
教師

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教師

【Nコード】

N2398E

【作者名】

いとかなし

【あらすじ】

日々の暮らしに飽き飽きしている女子高生、静香の前に現れたのは、田舎町にはいないような派手な面持ちの教師、佐伯豊。佐伯は前の学校で、生徒と恋に落ちていたという噂……。そんな時、佐伯の彼女だったという生徒、後藤歩が現れた。佐伯と歩は家族に阻まれ、悲しい運命の渦に飲み込まれてゆく――。

1、新風の教師

あの頃の私は、まだ本当の恋なんかもしたことがなくて、憧ればかりを抱いていた。そればかりか、人生についてなんて何も考えていなかったし、あんな愛の形があることすら知らなかったんだ。そう、あの二人を見るまでは――。

* * * * *
* * * * *

ある夏の日、住宅街に一際大きく建つ家の二階ベランダで、一人の少女が空を見上げていた。

（夏休みも今日で終わりか。明日からまた、退屈な学校が始まる。でも、こんな家にいるよりはずっとまし。早くこんな家から出たい。誰も知らない町に行きたい。ここには出会いもない。楽しみもない。私は……）

少女の名前は、室岡静香。父親はこの小さな田舎町で弁護士をしているため、地元でも有名な家柄だ。静香は両親と二人の姉弟に挟まれた次女である。

静香が物思いに耽っていると、バイクの音が静香を現実の世界へと引き戻した。

バイクは静香の家の前にある、テラスハウスに止まる。ふと静香がその様子を見てみると、バイクの主の顔が見えた。二十代の男性である。

その時、部屋のドアが勢いよく開いた。

「姉ちゃん。夕飯だつて」

入ってきたのは、中学生の弟だ。

「隆一！ 入ってくる時は、ノックしてって言ってるでしょ」

「ごめん、ごめん」

そう言っただけで去ってゆく弟に、静香は溜息をついて外を見つめた。しかし、すでにバイクの男性は、テラスハウスの中へと入ってしまった後だった。

（前の家に越してきたのかな……）

静香は男性が何者なのか気になったが、そのままりビングのある一階へと下りていった。

「静香、お父さんのビール出して」

「うん……」

リビングに着くなり、母親にそう言われ、静香はビールを持ってリビングの食卓へと向かう。すでに部屋には父親の他に、姉と弟が席に着いている。

「静香。おまえはいつものろいな」

父親が言った。

「でも、隆一が呼びにきて、すぐ下りてきたじゃない」

静香が反論する。

「呼ばれる前に来るのが常識だろう。うちは夕食の時間が決まっているんだからな」

「……はい」

静香は少々ふてくされて席に着いた。その時、家の呼び鈴が鳴った。

「母さん」

「今、手が離せないの。誰か出てちょうだい」

母親の声に、弟が立ち上がった。

「俺、出るよ」

「いや。静香、おまえが出なさい」

父親が弟を止めて、静香にそう言った。

「……はい」

静香は渋々、玄関へと向かった。

「はい。どちらさまですか？」

静香がそう言いながらドアを開けると、そこにはさっきのバイクの男が立っている。

「あの。前に越してきた、佐伯といいます。よろしく願います」
男はそう言いながら、一つの包みを差し出した。

「あ、えっと……ご丁寧にどうも……」

「じゃあ、どうも」

男は優しい笑顔を見せてそう言っていると、お辞儀をして去っていったので、静香はリビングへと戻っていった。

「どなただ？」

「前に越してきた、佐伯さんっていう男の人。よろしくってさ。これ、お母さん」

父親の質問に答えながら、静香は包みを母親に渡す。

「上がったもらわなかったのか？　そういう時は、家に上がってもらえと言っているだろう。これからご近所さんになる人をだ……」

「……ごめんなさい」

父親の言葉に、静香はうんざりした様子でそう言い、座った。

静香は、この家にいるのが苦痛でたまらなかった。父親はいつも厳しく、母親も父親に尽くしている。姉は成績優秀で、弟はただ一人の息子として可愛がられていたため、成績も何もかもがそこそこの静香にとっては、家族との良い思い出などなかったのである。

次の日。静香は学生服をまとい、久々の学校へと向かった。

「静香、おはよう！」

通学路の途中で、一人の少女がそう声をかけてきた。静香の友達、島田真子である。二人は小学校高学年からの幼馴染みで、今もこうして待ち合わせて、一緒に通学している。

「おはよう、真子。久しぶり」

静香も答える。

「うん。夏祭り以来だね。宿題終わった？」

「バッチリよ。一応ね」

「嘘！ この間見せ合いした以来、後ののはほとんどやってないよ、私」

「家庭科？ いいじゃない、そのくらい」

「まったく、うちの高校つてば、夏休みの宿題大量に出すんだもん。小学生じゃないんだから」

「本当」

「よつ、おはようさん！」

そう言いながら、真子の頭をカバンで叩いた人物は、隣のクラスの田中広太だ。広太は真子と小学校の低学年から一緒に、静香とも何度か同じクラスになったことのある幼馴染みだ。

広太だけは隣のクラスだが、今でも毎日会う仲である。

「広太。新学期早々、子供じみたことしないの！」

真子が怒鳴って言う。

「うるせー。それよりおまえら、宿題やった？」

「当然」

「見せてくれよ」

「嫌だ、馬鹿」

「冷てえな。静香は見せてくれるよな？」

広太が静香に言ったので、静香は苦笑する。

「そんな時間ないよ」

「いいじゃんか」

「ほら、ギリギリセーフ」

学校が見え、時計は登校時間ギリギリを示していた。

「チエツ」

「クラスの人に見せてもらいなさい、広太」

「友達甲斐のないやつらだな」

「そんな友達、いりませんよーだ」

真子と広太の口喧嘩は、日常茶飯事だ。静香は変わらぬ光景に微笑む。

「やべ。始業式が始まる前に、宿題写さなきゃ。じゃあな！」

広太は、走って校舎へと入っていった。

「まったく。いつまで経ってもガキね。うちらも急ごう」

「うん」

静香と真子も、走って校舎へと入っていった。

しばらくして、体育館では始業式が始まった。

「あーあ。退屈な始業式が始まったよ。校長の話、また長いんだろ
うなあ」

静香と真子の隣で、広太が言った。

「そんなに言うなら、サボればよかったじゃない。広太はサボり魔
なんだから」

うんざりした様子で、真子が言う。

「これ以上サボると、欠席日数増えてヤバイんだよ」

「まったく、あんたって人は……」

その時、校長の挨拶が終り、一同が拍手をした。

「それでは、今期から新しく入られる先生をご紹介します」

司会の教師の言葉に、一同が静まり返った。

「新しい教師だってよ。女かな？」

「広太、うるさい」

一同は、平穏な日々に来てきた新任教師に、興味深々でステージを見つめる。その時、一人の男性がステージに立った。

「なんだよ、男かよ」

広太の言葉をよそに、女子たちがざわついた。

「うわ。すごい格好よくない？」

思わず真子が言う。

「目がハートになってんぞ、真子」

「うっさい、広太。ね、静香。静香だって思うよね？」

「なんだよ。静香もああいうのが好きなわけ？」

「あ、あの人……」

静香の目には、昨日、静香の家に引越しの挨拶をしに来た男性が映っている。

「初めまして。佐伯といいます。結婚退職なさった上沼先生に代わって参りました。担当は数学です。どうぞよろしく願います」

そんな簡単な挨拶よりも、女生徒たちはその容姿に釘づけとなった。佐伯は、田舎町にはあまり見かけない、派手な面持ちの男性であつた。

2、気になる先生

数日後。静香と真子のクラスに、佐伯の初授業がやってきた。

「佐伯先生の授業、評判だよ。カッコイイし、苦手な数学も克服出来そう」

頬を赤く染めて真子が言う。そんな真子に、静香は苦笑した。

「真子ってば、気が多いなあ。サッカー部の先輩はどうしたのよ」

「それとこれは別。じゃあ静香は、佐伯先生が格好いいとは思わないの？」

「そりゃあ思うけど……」

「やっぱり。じゃあウチら、ライバル？」

「嫌だなあ、真子ったら」

「アハハハハ」

そこにチャイムが鳴り、佐伯が入ってきた。

「はじめまして。二年の数学を受け持つことになった佐伯です。今日はこのクラスで初授業ってことなので、お互いを知るために、少し自己紹介の時間でも設けようと思います」

どこか軽々しく、接しやすい態度の佐伯は、すでに生徒たちから慕われ、人気者となっていた。

「質問いいですかー？」

そう言って、一人の女子が手を挙げる。

「どうぞ。ええっと……」

佐伯が、座席表を見つめる。

「エミりんです。えっと、恋人はいますか？」

その質問に、どっとみんなが沸いた。いきなりの質問に、佐伯は苦笑する。

「今はいません」

「本当かよー」

「はいはい、質問！」

その質問を機に、数人が手を挙げた。

「はいはい、じゃあ……」

座席表を見ながら、佐伯は手を挙げている生徒を調べている。

「年はいくつですか？」

「下の名前はなんていうの？」

「誕生日はいつ？」

「どの学校から転任して来たんですか？」

「大学はどこ？」

佐伯が差す前に、数人が一気に質問した。

「わかったわかった、順番にな。えっと、年は二十五。フルネームは、佐伯豊です。前の学校は、東京の私立校、帝都学園高等部にいました。出身大学は東大。誕生日は五月十日。ゴトーの日と覚えてくれ。誕生日プレゼントは、幾らでもどうぞ」

軽いノリの佐伯に、一同が笑った。

「嘘、東大！」

「すごいね。帝都学園なんて名門じゃん」

「ゴトーの日だって。プレゼント、絶対買う！」

一同が、口々に勝手なことを言う。

「あれ？ 君……」

その時、生徒たちに構わず、佐伯が静香を見てそう言った。静香は途端に恥ずかしくなり、目を伏せる。

「静香、先生と知り合いなの？」

「いや、知り合いじゃなくて、でもえっと……」

「家が近所なんだよな。そうか、この学校の生徒だったのか」

佐伯が言った。

「静香の家の近所なの？ ずるい。今度、先生の家遊びに行ってもいい？」

「それは駄目」

「アハハハハ」

その日の佐伯の授業は、雑談を踏まえながらの自己紹介となった。

佐伯は、すぐに学校中の生徒に慕われていった。

放課後。静香が学校から帰る途中、静香の家の前にあるテラスハウスから、佐伯が出てきた。

「佐伯先生……」

「ああ、室岡……だったな」

「そう、室岡静香よ。覚えてくださいね」

「静香か」

静香は名前を呼ばれて、一瞬ドキツとした。

「今、帰り？」

佐伯が続けて言う。

「う、うん。先生はもう帰ってたの？」

「ああ。俺、まだ部活の顧問持ってないしね。今から買い物」

「……一人暮らし？」

「そうだよ。そっぴやおまえの家、弁護士らしいな。この町じゃ有名だって聞いたよ」

「お父さんがね……そうだ。この間、先生を家に上げなかったから怒られたの。今度、家で御飯でも食べていってくれませんか？」

静香の言葉に、佐伯は小さく笑って頷く。

「別に構わないけど……」

「本当！じゃあ、父に言います」

「ああ」

静香は家へと入っていき、佐伯は近所のスーパーへと出かけていった。

佐伯が家に戻ると、すぐに呼び鈴が鳴った。

「はい？」

佐伯が出ると、そこには静香がいる。

「静香」

「あの……今、父いるんです。よければ今日の夕飯、一緒にどうで

すかつて……」

「早いな。いいけど」

教師という立場にも関わらず、あまりに簡単に答えた佐伯に、静香は少し戸惑いながらも、素直に喜んだ。

「よかった！　じゃあ、早速来てください」

「今から？」

「うん」

「……オーケー。ご近所さんのよしみだもんな」

静香は佐伯を連れて、自宅へと入っていった。

静香の家のリビングには、すでに静香の姉以外の家族全員が揃っている。

「お父さん。前の家に越してきた、佐伯先生」

静香が佐伯を紹介した。

「どうも……佐伯豊といいます。突然、お邪魔して申し訳ありません」

「いえ。お呼びしたのはこちらですから。どうぞ座って、楽にしてください」

「ありがとうございます」

静香の父親の招きに、佐伯は席へと着いた。目の前の料理は、どれも美味しそうだ。

「どうぞ、お口に合うかわかりませんが……」

父親が食事を促す。

「いえ、ありがとうございます。いただきます」

佐伯は、料理を口にする。

「美味しいですね」

「それはよかった。一応、地元産ですよ。しかしこの町は小さいから、退屈でしょう？　なんでも先生は、東京から転任なされたと聞きましたか……」

父親が会話を弾ませる。それに対して、佐伯は頷きながら答えた。

「ええ。しかし、学校はどこも変わりませんよ。僕はずっと東京ですが、なぜかこういう町はホッとするんですよ」

「それはよかった。しかし、先生は東大出だそうで……いやあ、すごいですね」

「そんなことはないですよ。それに室岡さんは弁護士さんだそうで、僕のようながない教師よりも、お子さんにとっては尊敬出来るのでしょうね」

社交辞令のような佐伯の言葉にも、静香の父親は機嫌をよくしていた。

「いやあ、そんなことはないですよ。私はもう引退したも同然の身ですしね。しかし、長女である静香の姉も、私の後を追って弁護士を目指してくれていましたね。東京の大学に行っているので、なかなか帰ってこなくて、寂しいですよ」

少し自慢げに、父親が言う。佐伯は変わらぬ笑顔で頷いている。

「へえ、そうですか。じゃあ、将来は弁護士一家になりそうですね。静香さんも、ゆくゆくは東京の大学に？」

佐伯が尋ねた。

「いえいえ、とんでもない。静香は次女ですしね。長女と違って、何の取り得もない子ですし、なかなか……」

静香はそれを聞いて、箸を止めた。嫌というほど父親に差別されてきたと思っていたが、こんなところで言われたのも悲しかった。

「はあ……私は教師をしていて、何人もの生徒と接してきましたが、取り得のない子などいませんよ。静香さんの将来は、静香さんが決めるべきものですし、どうぞ静香さんの本音を聞いてみてあげてください。夢が弁護士とはいかないまでも、人には何か夢や取り柄があるものですから」

佐伯の言葉に、一同は驚いたように見つめている。そんな佐伯にたじろきながら、父親もおかずに箸を突いた。

「ええ、まあ……もちろん私も、この子の可能性は信じていますが……」

最後にそう言った父親に、静香は小さく微笑んだ。

しばらくして、食事を終えた佐伯は、静香の家を出ていった。

「先生」

家を出たところで、静香が家から出てきた。

「ああ、どうも。お招きいただきまして、ありがとうございました」
軽いノリで、わざとらしく佐伯が言う。

「先生……ありがとう」

静香が言った。

「……なにが？」

「わかってるんでしょう？ 私が言いたいこと」

「さあ？」

横目で静香を見つめながら微笑む佐伯に、静香も嬉しくなって笑った。

「ありがとうございます……私、この家が嫌いなんです。この町も……何の出会いもない。刺激もない」

「……子供の頃は、そういう時期もあるよ。でも、その世界を輝かせるのもくすませるのも、自分次第……なんて、クサイこと言ったな。じゃあ、おやすみ」

「待つて。あの……」

帰ろうとする佐伯に、静香が止めた。しかし、その先の言葉が出てこない。

「なに？ 俺のこと、好きなの？」

いたずらな目で、佐伯がそう言った。静香の顔が、一瞬で赤くなる。

「バツ！ バツ……」

「バカって言いたいのか？」

「バツ……」

「あれ。おまえ身長、一六三センチ？」

突然、佐伯がそう言った。静香は途端、我に返る。

「え？ うん、ぴったり……どうしてわかるの？」

「いや、別に……ほら、俺って天才だから」

「また、馬鹿言ってる」

「ハハハ。じゃあな」

去っていく佐伯に、静香も家へと入っていった。

佐伯の顔や言葉を思い出すと、顔が緩んでくる。静香は、自分が
佐伯のことを意識し始めていることに気がついた。

3、噂

次の日。昼休みに、静香は音楽室を訪れた。すると、ピアノの音が聞こえる。そつと中を覗くと、そこには佐伯の姿があった。

「佐伯先生……」

「ああ。静香か」

佐伯が、静香に気づいて言う。

「先生、ピアノ弾けるの？」

「ん？ ああ。今日から軽音部の顧問になったから、久々に練習をね……おまえはどうした？ 昼休みなのに」

「さっきの授業で忘れ物しちゃって……あ、あつたあつた」

静香は、机の中にあつたペンを取り出した。

「あ、そつだ。おまえ、俺のパスケース知らないか？」

突然、佐伯がそう尋ねた。

「パスケース？」

「どうやら、どつかで落としたらしいんだ。おまえの家かもしれなくて……革のパスケースなんだけど……」

「うっん、知らない。でも、帰ったら探してみるね」

「悪いな」

「うっん。こちらこそ……うちのお父さん、東京の人とか有名大学出の人とかに目がないんだ。先生のことにも気に入ったみたい。また来てくださいって……」

「そつ。昨日はありがとうございましたって、伝えておいてくれるか？」

「うん、わかつた」

その時、チャイムが鳴った。

「予鈴だ。おまえも早く戻れよ」

「はい」

静香は佐伯の意外な一面を見て、嬉しくなっていた。

「静香。今日、部活休みだって」

放課後、真子が言った。

「え、なんで？」

静香が尋ねる。二人は同じ手芸部に入っている。

「知らない。まあ、やる気のない人ばかりだし」

「うちらもね」

「言えてる。憧れの先輩に、編み物とかあげたくて入っただけだし。今日、家に寄っていかない？ 宿題多いしさ」

「いいよ。真子の家、久しぶり」

「そうだね。じゃあ帰ろう」

「うん」

二人は学校を出ていった。

真子の家で、二人は早速、宿題に取りかかった。

「まったく。なんでうちの学校、こう宿題ばかりなんだろ。小学生じゃないんだから」

真子が愚痴を言いながら、宿題にかかる。

「本当。特に国語と歴史。出せばいいってもんじゃないのに」

「あーあ。佐伯先生みたいに、宿題出さない先生ばかりだといいのに」

「うん……」

「そういえば、二組の船木さん、佐伯先生に告白したらしいよ」

真子の言葉に、静香が驚いた。

「え、本当？」

「あの子、ちょっとかわいいからって、いい男見るとすぐそうじゃん？ フラれたらしいけどね」

「ふうん。フラれたんだ……」

静香は、ホッとした様子で微笑んだ。

「でも、佐伯先生もすっかり馴染んじゃったよね。来たばかりな

のにさ。男子も、佐伯ちゃんとか呼んだりして」

「うん、親しみやすい先生だよ……東京から来たからかな。なんか、今までの田舎の先生って感じは全然ないし」

「そうだね。なんといっても、格好いいし」

静香はしばらく、真子といろいろな話をしてから、家へと帰っていった。

静香は家へ帰ると、すぐにリビングへと入っていった。家には誰もいないようだ。

「誰もいない。お母さんは、買い物か……」

静香はそう言って、冷蔵庫からジュースを取り出し、リビングの椅子に座る。

「結局、真子と話しこんじゃって、宿題どころじゃなかったな。やらなかったらヤバイし……ああ、でも全然わかんないだよな、宿題

……」

静香がそう言いながらも頭を抱えた時、爪先に何か当たった。
「ん？」

静香がテーブルの下を覗きこむと、そこには革のパスケースがあった。

「パスケース！ 佐伯先生の……？」

静香は手を伸ばして、パスケースを拾い上げる。

「家にあっただ……お母さんってば、今日は掃除してないわね。これに気づかないなんて……」

静香はそう言いながら、無意識にパスケースを開いた。中には数枚のカードなどが入っている他、窓の部分には、東京の住所らしきものが書かれたメモが入っている。そしてその下には、写真と見られるものが少し見えた。

「……写真？」

静香はためらいながらも、そつとメモの下の写真を引き出した。するとそこには、二人の女子高生が映っている。

「……なんで、女子高生の写真なんか……妹？ 恋人、なんて……」
静香は疑問を膨らませながらも、その写真を元の位置に戻した。
静香は、自分の胸が高鳴るのを感じていた。

次の日。静香と真子が教室に入ると、教室は騒然としていた。

「何かあったの？」

「あ、静香！ あんた、佐伯ちゃんと仲よかったよね？」

一人の女子が、静香に言った。

「え、仲が良いつて、ただ家が近所なだけで、別に……」

「いいから、ちよつと来てよ！」

「なに？ 佐伯先生がどうしたっていうの？」

静香と真子は、女子の輪の中へと入っていく。

「ほら見て、これ。佐伯ちゃん、彼女いたんだよ！」

「え……？」

輪の中にあつたのは、一枚の集合写真だった。

「私の従兄弟が、佐伯ちゃんの前いた高校にいて、地元じゃ有名な
しいよ。この子、佐伯ちゃんの彼女！」

一人が指差した写真の少女は、昨日、静香が見た、佐伯のパスケ
ースに入った二人の少女のうちの一人であつた。

「う、嘘だあ！」

思わず、静香が叫ぶ。

「本当よ！ 有名なんだつて。名前は後藤歩つていつて、うちらと
同じ年。身長、一六三センチで体重はわからないけど、足のサイズ
は二十四センチ。誕生日はクリスマススイブの、十二月二十四日だっ
て！」

「それつて、私と同じ誕生日……」

静香が言った。

「そうなの？」

「うん。おまけに、身長も一緒……」

「へえ、それつてすごいね。でね、二人はつき合つてたのがバレて、

先生はそこからうちに來たらしいよ。その後藤って子も、可愛くて有名でさ、あんまり周りには馴染まない子らしいんだけど、密かに憧れられてるって。こんなマニアックな情報も、簡単に手に入るらしいよ。でもすごいよね。シヨックだけどさ、本当にこんな話あるんだね」

静香は、何がなんだかわからなくなっちゃってた。

佐伯の噂は、その日のうちに学校中の生徒に知れ渡っていた。静香はそっとカバンの中から、昨日見つけた佐伯のパスケースを取り出して見つめる。

（パスケースの中の写真の子は、先生の彼女……そしてきっと、一緒に入ってた住所や電話番号は、彼女の家なんだ……私の身長がわかったのは、彼女と同じ身長だったから。先生……嘘でしょう？）

静香は佐伯にそんな過去があったということを知り、悲しくなった。

4、少女

昼休み、静香は音楽室を訪れた。そこに行けば、佐伯がいると思っただの。

音楽室からは昨日と同じく、ピアノの音が聞こえる。部屋の中を覗くと、案の定、佐伯の姿があった。

「……佐伯ちゃん」

入るなりその声をかけた静香に、佐伯が苦笑する。

「なんだ。おまえまで俺を“ちゃん”づけか？」

「い、一度、みんなみたいにそう呼んでみたくて。だって、先生らしくないんだもん」

「まあ、気にしないけど。また忘れ物か？ それとも、俺に愛の告白？」

佐伯がまた、からかうようにそう言う。

「そんなこと言っているの？ 大事な物、持ってきてあげたのに」

「……あつたのか？」

静香の言葉に、すぐに佐伯は気がついた。

「はい。これでしょ？」

パスケースを差し出す静香に、佐伯はほっとした様子でそれを受け取った。

「ありがとう……」

佐伯は素直にそう言った後、ゆっくりと口を開いた。

「……中、見た？」

その言葉に、静香は素直に頷く。

「うん。悪いと思ったけど、なんとなく……」

「そっか」

佐伯は苦笑して、パスケースを開いた。

「……写真の人、妹さんか何か？」

カマをかけるように、静香がそう尋ねる。佐伯は変わらぬ表情の

まま、口元だけを僅かに動かした。

「……うん」

（ウソツキ）と、静香は心の中で思った。

「そう……」

静香はそれ以上何も言えなかった。佐伯はゆっくりと立ち上がり、外を見つめる。

そんな佐伯の後姿を見て、静香は佐伯がどこかへ消えてしまうような気がした。そして、佐伯が遠くへ行くのは嫌だと思った。

「先生。変な噂が立ってるよ」

思い切って、静香はそう言った。

「……うん。知ってる」

静香の気持ちに反して、佐伯は外を見つめたまま、いつもと変わらぬ態度でそう言った。

「知ってるって……違うなら、ちゃんと言った方がいいよ。何か問題になったら……」

その時、佐伯はくりと振り向くと、静香を見て微笑んだ。

「ありがとう。でも大丈夫だよ。俺が気にしなきゃいいだけの話だし。それに、噂は噂でしかないだろ。学校のガキの間じゃ、それしか楽しみがないんだからな」

「先生……」

「ほら、行った行った。休み時間、終わっちまうぞ」

追い出すように、佐伯が言う。そこを、静香が振り向いて言った。

「あ、もう一つだけ」

「うん？」

「お父さんが、よければ今日、また御飯食べに来てくださいって。お姉ちゃんが帰ってくるから……」

静香が言った。

「東京行ってる姉ちゃんか？」

「そう。夏休みは家にいたんだけどね。私と違って、美人だし勉強も出来て……」

「へえ。そりゃあ、会ってみる価値あるな」

「先生！」

静香の言葉に、佐伯が笑う。

「冗談だよ。寄らせてもらうかな。おまえんちの料理、さすがにうまいから」

「本当？ お母さんも喜ぶよ。じゃあ七時に来てくださいね」

「ああ……ありがとうな、静香」

いろいろな意味を含めて、佐伯が言う。そんな佐伯に、静香は首を振って微笑んだ。この二人だけの時間を共有出来ることが、素直に嬉しかった。

「お礼言つなら、今度、勉強見てよね」

「そうだなあ……学校にバレなきゃな」

「あはは。じゃあね」

静香は音楽室を出ていった。佐伯はパスケースをポケットに入れると、一人で外を見つめていた。

夜。時間通りに、佐伯は静香の家を訪れた。そこには、静香の姉も含めた家族全員が揃っている。父親は姉の自慢をし、佐伯の人生について、耳を傾けていた。

しばらくして、先に部屋に戻るよう父親に言われていた静香は、無意識にベランダへと出た。そこは、静香が物思いにふける場所となっている。

静香が外を見ると、佐伯の家の前に、人影があることに気づく。

静香は目を凝らすと、どうしようもない動悸が襲った。そこには、佐伯との噂が流れている少女の姿があったのだ。

「あの子……」

そこにドアがノックされ、静香は驚いて振り向いた。するとそこには、佐伯の姿がある。

「先生」

「へえ。ここがおまえの部屋か。案外、綺麗にしてるじゃん」

佐伯が、静香の部屋を見回して言う。

「と、当然でしょ」

「嘘つけ。どうせお母さんに掃除やらせてるんだろ」

「そんなことないもん」

「おまえの父さんが、おまえの宿題の進み具合見てやってくれって……もちろん断ったけど、まあ食事のお返し。今回限りな」

佐伯が苦笑して言う。

「せ、先生……」

「どうした？ 顔色悪いけど」

様子のおかしい静香に気づき、佐伯が顔を覗きこむ。

「……なんでもない」

静香は、慌ててベランダから出た。

「なんだ。ベランダに何か隠してるのか？ 煙草とか、やらしい本とか」

「先生じゃないんだから、そんなことしません」

「言うね。ほら、さっさと宿題見せろよ。ちゃんとやったか？」

佐伯が急かして言う。

「やりました。ほら」

静香が宿題の束を見せて言う。

「おいおい、そんなに見切れないよ。ただでさえ、ひいきに値するんだし……」

「私はパスケースを見つけてあげたんだから、そのくらいするのが当然です」

「ハイハイ、じゃあ何から見ましょうかね……」

佐伯は軽く静香の宿題を見ていった。静香は佐伯に、少女が来ていることを告げられなかった。

十数分後。

「まあ、出来てるんじゃない？ さて、俺はそろそろ帰るかな」
佐伯がそう言ったので、静香は不満足そうに眉を顰める。

「え、もう？」

「なんだよ。一通り見ただろ？」

「そうだけど……あ、そうだ。もうすぐ文化祭だけど、軽音部もステージやるんでしょ？ 先生は何かやるの？」

とつさに静香がそう尋ねた。まだあの少女がいると思い、佐伯を帰したくないと思う。

「やるわけないだろう？ 俺は先生なの」

苦笑しながら、佐伯が言った。

「つまんないの。あれだけピアノが弾けるのに」

「別に、趣味だよ」

「ふうん？」

「おまえのクラスは、何やるんだっけ？」

今度は佐伯が、静香に尋ねる。

「展示。うちのクラス、あんまりやる気ないから」

「展示だとやる気ないのか？ そんなことはないだろう」

「でも、あんまり真面目にやってる人いないよ」

「ふうん？ まあ、行かせてもらっつよ。じゃあ、そろそろ行くよ」

「あ、ちよつと待って」

「なんだよ？」

やたらと引き止める静香に、佐伯は怪訝な顔で見つめる。

「ええつと、その……」

静香は目を泳がせながら、佐伯を引き止める会話を探した。

「おまえ、そんなに俺と一緒にいたいわけ？」

またしても、佐伯が冗談を言う。

「ば、馬鹿言わないでよ！」

そんな佐伯に、静香は赤くなって言った。佐伯はそんな静香に、吹き出すように笑う。

「ハハ。冗談だよ」

佐伯は静香の頭をポンポンと叩いて言うと、無意識に窓の外を見つめる。

「お、雨が降ってる」

「本当……」

「へえ。ここから俺の部屋、見えるんだ」

突然、佐伯がベランダの窓を開けたので、静香は驚いた。

「先生！」

静香が呼び止め、ベランダに出たが、すでに佐伯の部屋の前には、少女の姿などどこにもなかった。

5、噂の真相

「どうした？ おまえ、今日変だぞ」

佐伯が言う。静香は素直になれず、佐伯に背を向けた。

「そんなことないです」

「本当か？」

「……先生。もうちょっとここにいて。いろいろ、相談に乗ってほしいし……」

勇気を出して、静香が言った。佐伯は顔を軽く掻いて、静香を見つめる。

「いいけど、俺なんかで相談に乗れるかなあ……」

「私、好きな人が出来たみたいなの……！」

告白のような静香の言葉に、佐伯は尚も静香を見つめる。

「……へえ」

「今まで、あんまりそういう話は乗ってこなかったの。この町でそういう人、見つけれられるなんて思わなかったから。だけど……」

静香はゆっくりとそう言った。あの場から消えても、近くにいかもしれない。なんとしてでも、佐伯をあの子には会わせたくなかった。

「……俺も、何度か恋はしたよ。でも、辛くない恋なんて一度もなかった……静香はこれからなんだから、いっぱい恋をして傷つけばいい。俺だって辛い恋ばかりしてきたけど、後悔したことは一度もないしね」

静香の気持ちを察して、佐伯がそう言った。静香は俯き、口を開く。

「先生は本当に、恋人はいないの？」

「ああ……いないよ」

「……そう」

「恋煩いか。俺、そっちの分野は得意じゃないんだけど。まあ、そ

んなに悩んでるなら今度な。俺、そろそろ行かないと。文化祭の準備に探し物しなきゃならないしね」

佐伯はそう言いながら、静香の肩を軽く叩く。

「探し物？」

「軽音部で使う、譜面とか」

「行かないで。まだ……」

静香は尚も勇気を振り絞り、佐伯を引き止める。

「悪いけど、あんまり長居すると、おまえのお父さんたちも心配するだろうし」

「お父さんなんか、私の心配なんてしないよ！」

取り乱したように、静香は叫ぶようにしてそう言う。

「静香。大丈夫か？ 相談事なら、今度ゆっくり聞くから……」

佐伯がそう言った時、静香は佐伯の手を掴んだ。

「い、妹さんが……」

「え？」

「……先生の妹さんがいたの」

静香が、やっとそれを口にした。

「妹？」

「じゃ、写真の人……」

静香のその言葉に、佐伯の顔が一瞬にして変わった。

「いつ？ どこで会ったんだ？」

「会ったんじゃないわ。さっきベランダに出たら、その人、先生の部屋の前に立ってた……でももういないわ。なんか先生に言い辛くて……」

静香の言葉に、佐伯は歩き出す。

「悪い。行かなきゃ」

「嫌だ、行かないで。たかが妹でしょ？ いつでも会えるじゃない！」

「……ごめん。妹じゃないんだ」

佐伯の言葉に、静香の目から涙が零れる。

「嘘つき！ 私、先生のことが……」

「静香。俺は今、恋人はいないけど、忘れられない人がいるんだ」

静香の言葉を遮って、佐伯がそう言った。その表情はいつもと違い、真剣である。

「先生……」

「詳しいことは、今度話すから。とにかく今は、あいつを探さない
と……」

「あの人、先生の彼女……だったんだね」

「……ああ」

正直な佐伯の言葉に、静香は深く傷ついた。

「今でも好きなの？ その人のこと」

「……ああ」

静香は佐伯の気持ちを知り、涙を拭った。

「ごめんなさい。私、早く言えばよかった！」

我に返ったように、静香はそう言って、部屋を出ようと歩き出す。
「静香のせいじゃない。とにかく捜してみるよ。まだ近くにいないか
もしれない……」

逸る気持ちを抑えるようにしながら、佐伯はそう言って静香の部屋を出ていった。

「私も捜すよ。私のせいだもん。それにこの辺の地理は、私のが詳しいんだから」

「……悪い」

佐伯と静香は、家を出ていった。

「ここに立ってたの……顔は間違いないと思う」

雨音が激しく叩きつける佐伯の家の前で、静香がそう言った。佐伯の真剣な顔を見て、静香は佐伯に、少女のことを告げなかったことを後悔していた。そして、一緒に捜して出してやりたいと思った。

「庭にもいないな……ちょっと近くを捜してみるよ」

玄関先に置いてあったビニール傘を差して、佐伯が言った。

「じゃあ、私は駅まで行ってみるよ」

「……悪い」

「いいの」

その時、二人の前にタクシーが止まった。

「佐伯さん!」

中から出てきたのは、一人の中年女性だった。

「後藤さん……」

佐伯の知っている顔だった。佐伯の恋人だったという、少女の母親である。

「佐伯さん、あの子は？ 歩をどこにやったんです!」

「後藤さん。私も会っていないのです。でも近所に住んでいるこの子が、彼女を見たと教えてくれて……何があつたんですか?」

佐伯が尋ねる。

「あなたには関係ありません。いいですか？ あの子が来たら、すぐに自宅へ連絡してください。あの子が来ても、指一本触れさせませんからね!」

「……近所を捜してみます。見つけたら、必ずご連絡します」

「私は警察に行ってきます。その後は、近くのホテルを捜すつもりですから」

「わかりました……」

母親はタクシーに乗りこむと、その場を去っていった。

「……先生?」

「彼女の母親だ……行こう」

二人は二手に分かれて、一人の少女を捜しに出ていった。

数十分後。佐伯は、駅周辺までやってきた。

「先生!」

静香が声をかける。

「静香」

「見つかった?」

「いや……」

「こつちも。駅員さんにも聞いてみたけど、わからないって……」

「そうか……ありがとう。もういいから、おまえは帰れ」

佐伯の言葉に、静香は見つからない罪悪感に打ちひしがれていた。
「でも」

「いいから帰れ。俺も一度、家に戻るから」

「……そうだね。先生、そのままじゃ風邪引くよ。ずぶ濡れじゃない」

雨に打たれ通しだった佐伯に、静香が言った。

「この雨じゃ、あんまり傘は役に立たなかったからな」

二人は話をしながら、家へと戻っていった。

「先生……その人とき合ってたの？」

家へ帰る道で、意を決して静香が尋ねた。

「……うん」

佐伯は素直にそう答えた。静香は自分の中で、静かな衝撃を覚える。

「でも、別れたんでしょう？ 生徒でもいいなら、私も……みんなだって、先生のこと好きな子いっぱいいるよ」

「別に、生徒でもいいなんて思っていないよ」

「嘘。だって、その子とき合ってたんでしょう？」

「……いろいろあった……静香。おまえの気持ちが真剣でいてくれるなら、俺も真剣に答えなきゃならないと思う。静香は家も近所だし、他の生徒とは違う。だからこんな話をしているんだ」

いつになく真面目な顔で、佐伯が言う。そんな佐伯に、静香は俯く。

「先生……」

「俺は確かに、生徒とき合ってたよ……でも、当然許される恋じゃない。でも止められなかった。俺も馬鹿だったと思うけど、離れられなかったんだ。ある時バレて……当然、引き離された。その子は学校に残ったが、俺は当然クビだ。そしてここに来たってわけ。でも、そんな別れ方をして、気持ちに整理なんてつけられないんだ。」

ろくに話も出来ずに、離れ離れになったから……」

「今でも、その人のことが好きなんだね？」

「ああ」

きつぱりと言った佐伯の言葉に、静香は傷つきながらも、諦めがついた。

「……わかった」

「ごめん」

「いいよ。他の生徒とは違うつて言うてくれただけで、嬉しい。本当よ」

「静香……」

その時、佐伯の家が見え、佐伯が立ち止まった。佐伯の家の前には人影があった。

「あ……ゆみ？ 歩！」

6、先生の恋人

「あ……ゆみ？ 歩！」

佐伯はそう言つて、家へと駆け寄つた。静香はそれを見ているし出来ない。

「歩……！」

「豊……」

少女が、佐伯をそう呼んだ。

「豊！」

雨の中、少女は佐伯に駆け寄り、抱きつく。

「歩……」

「豊！ 豊、会いたかつた！」

少女は泣きながら、佐伯にそう言う。少女はかつての佐伯の教え子、後藤歩であつた。

「どうしたんだ？ どうしてここへ……どこにいたんだ？」

逸る気持ちを抑え、佐伯が尋ねる。

「豊が……手紙くれてたの知らなかつたの。お母さんが隠してたのでも、たまたま私が見つけて、手紙の住所を頼りにここへ来たの。でもないくて……諦めようとも思つたんだけど、冷静になろうと思つて、近所をぐるぐる周つてた。でも、やっぱり会いたくて。会いたくて……」

雨音に途切れ途切れの歩の声が、そう語る。

「傘も差さずにか？ 無茶するな」

「だって……だって……」

その時、歩の目に静香が映つた。

「豊、その人……」

「ああ。彼女が、おまえがいたこと知らせてくれたんだよ。その家に住んでる生徒なんだ。一緒に捜してくれていたんだよ」

「……彼女？」

目を泳がせながら、歩が言った。

「バーカ。そんなわけないだろう」

佐伯は苦笑しながらそう言って、歩の頭を軽く叩く。

「だって、美人だし……」

「それだけ無駄口叩けるなら大丈夫だな。お母さんも心配してるぞ」

「……お母さん、来てるの？」

急に怯えた様子で、歩は佐伯を見つめる。佐伯は真剣な顔で頷き、歩を見つめ返した。

「ああ。警察に連絡するって……」

「嫌！ 帰りたくない！」

「歩……」

「連絡しないで。帰りたくない！」

「歩、落ち着け」

叫ぶように取り乱す歩の腕を、佐伯が掴んだ。しかし、歩はしきりに首を振る。

「お願いだから、帰さないで！ お願い……」

その時、佐伯は歩の身体が熱いことに気がついた。

「歩。熱があるのか？」

「お願い。連絡しないで……」

歩はそう言うばかりだ。

「……話は聞くよ……」

佐伯がそう言うと、歩はそこで意識を失った。

「歩！」

歩は気を失ったまま、すぐには目覚めそうもない。佐伯は歩を抱きかかえると、静香を見つめる。

「静香。変なことにつき合わせたな……ごめんな」

冷静を装うように、佐伯が静香にそう言った。

「いいけど、大丈夫？ 風邪かな？」

「そつらしいな。シヨックもあつたんだろうけど……」

「……鍵貸して。それじゃあ開けられないでしょう？」

「悪い……」

静香は佐伯から鍵を受け取ると、佐伯の家のドアを開けた。初めて入るそこは、意外と綺麗になっている。

「大丈夫？ 手伝うよ」

ドアを開けたところで、続けて静香が言う。

「ああ……じゃあ、二階のドアを開けてくれるか？ 二階の右のドアだ」

「わかった」

静香は佐伯よりも先に歩き、佐伯は歩を抱えたまま、静香の後をついて二階へと上がっていった。

静香が二階の一室を開けると、そこはベッドしかないような寝室だった。佐伯はそこに歩を寝かせる。

佐伯は難しい顔をしたままで、心ここにあらずといった様子だ。それ以上、動かない佐伯に、静香は口を開く。

「先生。そのままじゃ風邪引いちゃうよ。パジャマかなにか……」

「あ、ああ……」

静香に言われるまま、佐伯はパジャマを取り出した。だが、その動きも鈍い。

「……私が着替えさせようか？」

静香の言葉に、佐伯は頷く。

「ああ、悪いけど頼むよ……俺は下にいるから」

「わかった」

そう言うのと、佐伯は部屋を出ていった。静香は眠ったままの歩に、パジャマへと着替えさせてやった。その間にも、静香はいろいろなことを考える。

（この人が、先生の彼女……かわいい子。どれだけ傷ついてるんだろう。引き裂かれなければならない運命なんて、悲し過ぎるよね……私にもいつか、そんな恋が出来るだろうか……）

静香は歩を着替えさせ、布団をかけてやると、一階へと下りていった。

静香が一階に下りると、佐伯はすでに着替えを済ませ、お湯を沸かしている。

「先生……」

「ああ。ありがとう、静香」

いつもの様子で、佐伯が礼を言う。

「私、帰るね」

「ああ……いろいろ悪かったな」

「いいよ。でも、連絡するの？ お母さんに……」

「いや。とりあえず、目を覚ますまでは……このまま連れ戻されても、何の解決にもならないからな」

「そうだね……じゃあね」

「ああ。ありがとう……おやすみ」

そう言うつと、静香は家へと帰っていった。そしてその日、何度も佐伯と歩の姿を思い出し、悲しさがこみ上げながらも、あの二人の間には入れないと悟っていた。

静香が去った後、佐伯は冷やしたタオルを持って二階へと上がっていった。寝室では、歩が眠っている。その歩の額にタオルを乗せてやると、ハッとしたように歩が目を覚ました。

「歩……」

「豊！ 夢じゃない……」

そう言うつて、歩は佐伯に抱きついた。佐伯も静かに抱き返す。

「歩……」

「もう離れたくない！ 学校も辞めるから、そばにいて……」

佐伯から離れようとせず、歩が叫ぶようにそう言った。

「……それは出来ないよ」

困った様子で佐伯が言ったので、歩は表情をこわばらせて、佐伯を見つめる。

「どうして？ 私たち、真剣に愛し合ってたんじゃないの？ どうして……」

「……ごめん」

そう言う佐伯の顔は、どこか辛そうだ。

「豊……」

二人は見つめ合った。やがて、佐伯が静かに口を開く。

「俺が馬鹿だったんだ。おまえが卒業するまで、待てればよかった……」

「違う！ 違うよ、豊。私たちは真剣だったはずだよ。それに、どうして豊だけ転任になって、私は退学にならないの？ どうして私だけ置いて行っちゃったの……残ったって、辛いだけじゃない！」

「歩……」

「みんな変わったよ。先生までが、私を違う目で見てる。家に帰ってもお母さんの目が光ってて、居場所なんかないんだよ。お願い、豊。もう離れたくない！」

歩の必死な訴えに、佐伯は歩を抱きしめる。

「駄目だよ、歩……俺、おまえのご両親と約束したんだ。もう、おまえとは会わないって」

それを聞いて、歩は捨てられた子犬のように、佐伯を見つめる。

「……どうして？」

「あの時は、そう言わなきゃ許されなかった。俺とおまえの仲がバシて、すごい騒動だった……あれ以来、おまえとも会えずにいたけど、毎月おまえのご両親には手紙を書いてたよ。許してほしい、お互い真剣だったって……」

「うん、知らなかったの。豊が手紙書いてくれてたこと。豊、今でも私のことを愛してくれているなら、そばにいてほしい」

「歩……愛してても、どうにもならないことがあるんだ。今の俺には、おまえを受け止めるだけの度量がない」

佐伯は困った様子で、しかしきっぱりとそう言った。

「豊……」

「ご両親が心配してるよ。それに、おまえには指一本触れるなんて言われてる。すぐに連絡しよう。あと一年もすれば、おまえも卒業

だ。もしその時まで二人の気持ちが変わらなければ、堂々と胸を張ってつき合える」

「一年なんて、待てないよ」

「どうして？ あっという間だよ」

自分を宥めようと必死なまでに見える佐伯に、歩の心は不安でいっぱいになっていた。

「……豊は寂しくないの？ 私はこの数ヶ月だけで、悲しくて死にそうだったよ。みんなにもいじめられて……それに一年の間に、豊の気持ちが変わっちゃうかもしれないじゃない」

今にも涙が零れそうな歩に、佐伯は優しく微笑みかける。

「俺の気持ちは変わらないよ。でも俺は、おまえのことを考えるとわからなくなる……俺に、何もかも捨てておまえを取ることも出来るんだろ？ おまえはまだ高校生なんだ。これからたくさん恋をするんだろ？ そんな時期に俺がいていいものかと思うよ、正直……」

佐伯は本音を言った。だが歩は納得しない様子で、懸命に首を振る。

「どうしてそんなこと言うの？ 豊はやっぱ、私のことなんて好きじゃないんだよ。好きなら……離れたくないと思うんじゃないの？ 他の男なんて知らなくていいって、そう言うんじゃないの？」

歩の言葉に、佐伯は辛そうな顔をして俯いた。

「……言えないよ。俺は……」

「……」

佐伯の言葉を聞いて、歩は静かにパジャマのボタンを外し始める。

「歩」

そんな歩の手を、佐伯はとつさに止めた。

「豊……また引き裂かれるなら、今だけ私を恋人に戻して。愛し合ってるって……感じさせてよ」

歩の必死な訴えに、佐伯は戸惑っていた。歩を正視出来ずに目を泳がせる。

「歩、わかってくれ……俺はおまえが大事なんだ。これ以上、傷つけたくない」

佐伯はベッドに座り、歩に背を向ける。そんな佐伯に、歩は後ろから抱きついた。

「私もこれ以上、傷つきたくない。そばに居させてよ……」

そう言った歩の身体は、震えていた。

すべてをなげうる覚悟でぶつかってくる歩に、佐伯は振り向いた。その顔は、苦しげな表情だ。

「俺がどれだけ我慢してると思ってる？」

佐伯は何かを吹っ切ったように、歩を抱きしめキスをした。苦しきまでの抱擁に、歩の目から涙が溢れ出る。

「豊……」

「おまえだけが寂しいなんて思うなよ。俺だってあんな別れ方しておまえを忘れられるわけないだろう？　でも、おまえにとったら……」

……

佐伯の中で何かと闘っているのが、歩にもわかった。

「もう何も考えないで。私は豊が好き。それ以外は何も考えられないよ。今しか考えられない……」

「歩……」

二人は離れられないかのように、時を忘れて抱き合っていた。

7、母親

暖かいが不安に満ちた空気が、二人を包む。そんな空気を一本の電話が断ち切った。

「お母さんかも……」

被った布団を握りしめ、歩が急に怯えた顔をして言う。

「……そうかもな」

「出ないで」

「歩。一年、頑張ろう。俺はおまえだけだから」

佐伯はそう笑いかけながら、歩の髪を撫でる。そんな佐伯に勇気づけられるように、歩も小さく微笑み、頷いた。

佐伯はそのまま、電話の受話器を取る。

「はい、佐伯です」

『後藤です』

電話の相手は、まさしく歩の母親だった。

『あの子は、まだ見つかりませんか？』

「いえ。先ほど……」

『見つかったんですか！ では、なぜ連絡してくれないのです。約束したではありませんか！』

逆上した様子で、母親が言う。佐伯は目を伏せた。

「申し訳ありません。歩さん、突然気を失ってしまって……雨に当たっていたようで、少し熱があり、風邪のようです。きちんと話したくて、様子を見ておりました」

『倒れた？ それで、大丈夫なのですか？』

「ええ。先ほど意識が戻りまして、少し話をしていました」

『では、今からすぐ迎えに行きます』

「今からですか？」

その時、歩が佐伯から受話器を奪った。

「お母さん。私……」

『歩！ あなたって子は……』

「ごめんなさい……でも、どうしても先生に会いたかったの。会って話がしたかったの」

歩は泣きながら、そう言った。

『話って、何の話ですか。あなたは何をしたのかわかっているの？』

母親の言葉は、歩の心を突き刺す。母親に対する罪悪感と嫌悪感とが、歩の中で揺れていた。

「わかってるよ……でもお母さん、私の話なんて聞いてくれなかったじゃない」

『聞いているじゃない。いつでもあなたのことを心配して……』

「嘘！ だったらどうして、私たちを引き裂くの。ろくに話もさせてくれないし、私がどんな気持ちでここまで来たか、お母さん、なんにもわかってない！」

『歩！』

歩の目から、涙がどんどん溢れ出す。佐伯はそばで歩の様子を見つめている。

「私、帰りたくない。ずっとここにいる！」

だだをこねる子供のように、歩はそう言った。

『何を言っているの。あなたはまだ高校生なのよ。あなたはお母さんの言うことを聞いていればいいの。お母さんの言うことを聞いていれば、あなたは幸せになれるのよ』

「嫌！ 帰りたくない！」

「歩、落ち着け」

興奮する歩に、今度は佐伯が受話器を取った。

「後藤さん……佐伯です。今はこの通り、歩さんも気が動転しているようです。少し時間をくれませんか？ 今日熱もありますし、きちんと話をして、明日には帰るよう説得しますから……」

佐伯が言った。だが、すぐに母親の言葉が返ってくる。母親も歩と同じく、ずいぶんと興奮しているようだ。

『そんなこと出来るわけがないでしょう！ あなたは歩に、何をし

たかわかつているのですか。我々と約束だつてしたではありませんか」

歩の母親の言葉をかみしめるように、佐伯は目をつむる。

「はい。もう会うことはないと思っていました……でも会ってしまった。だからといって、彼女をどうこうするつもりはありません。ただ、彼女が私を訪ねてきた気持ちだけは、踏みにじりたくないのです。彼女の気が済むまで、話を聞いてやりたいのです。一晩だけ時間をいただけないでしょうか？ このまま帰しても、歩さんの心は晴れないでしょうし、根本の解決にはなりません。必ず帰るよう説得しますから」

歩の母親が一瞬、黙りこんだ。そしてすぐに口を開く。

『……いいですか？ 指一本触れないと、約束してください。歩は大事な一人娘なんです。それをあなたに傷つけられて……明日の朝、迎えに参ります。もうこれ以上、歩に関わらないでください！』

「……わかりました。では一晩、預からせていただきます。ありがとうございます」

佐伯はそこで電話を切った。そばでは歩が、必死なまでの顔で佐伯を見つめている。

「……ここにいられるの？」

「今日はね……」

それを聞いて、歩の表情が明るくなる。それを見て微笑み返し、佐伯は歩の額に触れた。

「熱がある。もう休めよ」

佐伯はそう言つと、ベッドから立ち上がる。そんな佐伯の態度に、またも歩の表情が暗くなった。

「……豊は？」

「俺は、下のソファで寝るから」

「どうして……？」

「俺がいたんじゃ、風邪も治らないだろうしな」

「そんなことないよ。早く治るかもしれないよ。ほら、元気だもん」

歩が元気に振舞って、そう言う。

「まったく、おまえは熱があっても元気だな……話はさつきしたろう？　一年頑張るって」

佐伯の言葉に、歩は悲しく微笑み、佐伯を見つめる。

「頑張るから……一年分の元気をちょうだい」

それを聞いて、佐伯は目を伏せる。佐伯ももう限界だった。

「豊……」

「……おまえは、ねだるのだけはうまいよな……」

「だって……」

「俺、おまえのお母さんとの約束を、破ってばかりいるよ……」

佐伯はそう言うベッドに座り直す。歩はそんな佐伯に、もう一度抱きついた。

「私との約束、破らなければいいよ」

「こいつ」

佐伯は苦しそうに微笑むと、歩をしつかりと抱きしめる。やがて二人は寄り添うように、温め合いながら眠りについた。

早朝。電話のベルが鳴り、佐伯は受話器を取った。隣りにいる歩はぐっすりと眠っている。

「はい……」

『早朝に申し訳ありません。後藤です』

受話器の向こうから聞こえる声は、歩の母親であった。佐伯は眠い目を叩き起こし、受話器に耳を傾ける。

「はい。どうも……」

『歩は……』

その言葉に、佐伯は歩を見つめる。

「……風邪の方は大丈夫だと思います。寝る前に、薬も飲ませましたし」

『そうですか。あなたと二人きりで話がしたいのですが……』
「今ですか？」

『はい』

佐伯は静かにベッドから立ち上がり、声を響めた。

「わかりました……今からそちらに向かいます」

佐伯は受話器を切ると、もう一度歩を見つめた。歩は薬のせいかぐつすり眠っていて、額に手を当てると、熱も引いている。佐伯はすぐに着替えると、家を出ていった。

歩の母親が泊まるホテルの喫茶店で、佐伯は母親と会った。歩の母親は、心なしか以前会った時よりもやつれた様子で、恨めしそうに佐伯を見つめ、尋ねる。

「歩の様子はどうですか？」

「……熱は下がったようですし、風邪の方は大丈夫だと思います。少しですが話し合いましたし、もう無茶はしないと思います」

「……あなたは……まだ歩を、愛しておられるのですか？」

単刀直入に歩の母親が尋ねた。佐伯は俯き加減で、静かに口を開く。

「……手紙でもお話ししました通り、僕たちはいけないと知りつつも、真剣につき合って参りました。教師と生徒だから許されないことなど、わかり切っていました。それでも止められなかったのは……自分の責任も然ることながら、互いの気持ちが強すぎたからだと思います……」

苦しそだが正直に、佐伯が言った。歩の母親は、嫌悪感を露わにしている。

「あなたは、歩の将来のことまでは考えてくだらないのですか。教師のくせに、あなたはあの子に一生消えないレッテルを貼り、傷つけたんですよ？ あの子の青春を奪い、これからもあの子はあなたを慕う……あなたは、一生あの子を縛りつけるおつもりなんですか！」

「そんなことは、決して……」

「では、あなたの人間性を疑いますわ」

歩の母親の言葉に、佐伯は俯いた。

「……なんとおっしゃられても、仕方がありません。僕も、出る答えは毎回違います……後藤さんにこんなことを言うのはどうかと思います。いつそ教職という仕事を捨てて、歩さんを受け入れられたらと、思ったこともあります」

「なんですって！」

佐伯は険しい顔で、尚も話を続ける。

「でも……僕には、そこまでの度量はありません。歩さんの将来のことを考えなくてもありません。僕も後藤さんと同じことを考えていました。一番楽しいこの時期に、自分を愛したことで彼女の将来を奪うなら、いつそ離れた方がいいと……今でも思っています」

「だったら離れてください！ 一生、あの子に会わないで！」

母親の悲痛な訴えが、重く佐伯に圧しかかる。佐伯は小さく息を吐くと、まっすぐに歩の母親を見つめる。

「はい……と言いたいところですが、彼女に会って思いました。僕の気持ちは捨てられないと……」

佐伯ははつきりとそう言った。歩の母親はうなだれるようにしながら、お茶を飲んでなんとか冷静さを保とうとしている。

「佐伯さん……そこまであの子を思ってくださいるのは、とても嬉しい……でも、あの子はまだ高校生なんです。これからたくさん恋をして大人になる時期に、あなた一人で一生を無駄にしかねません。今日お呼びしたのは、あなたならわかってくださると思ったから……」

……

すると突然、歩の母親が深々と頭を下げた。

「佐伯さん。どうかあの子のために思うなら、あの子ときちんと別れてください！」

「後藤さん！ 頭を上げてください」

「では、どうすれば聞いてくださいますか？ お願いです。あの子は一人娘で、今まで大切に育ててきました。あの子の人生にとってあなたは必要な人間ではないはずです。少し熱が上がっているだけ

で、まだ子供なんです。どうか別れてください。最後にあの子をどれだけ傷つけても構いません。あなたを忘れて、新しい人生を踏み出せるように……お願いします!」

すぐる思いで、母親が佐伯を見つめる。その目は、歩そっくりであつた。

「……どうしろとおっしゃるんですか……?」

そんな歩の母親に、佐伯は苦しい表情を浮かべたまま、そう尋ねる。

「あの子を、振ってくださいればいいだけのことです」

「……それで彼女が幸せになると思えますか?」

「もちろんです」

佐伯は押し黙り、コーヒーに口をつけた。

「僕は……真剣に彼女を愛してしまつたから……この先、彼女が誰を愛しても咎めませんし、彼女の幸せを望みます。僕もいろいろ考えましたが、答えは出ません。それでも今、答えを出せとおっしゃるのなら、あなたのお考えに賛同するべきでしょうか……」

佐伯の目は虚ろに、歩の母親の顔を捉えている。母親は大きく頷いた。

「私は今まで、あの子の幸せだけを考えてきました。それには、あなたと別れることが一番だと思っております。もちろん主人も……」
それを聞いて、佐伯は静かに目をつむり、そして頷いた。

「わかりました……」

その言葉は、佐伯の中で重く響き渡つた。自分の言葉が意味をなさないかのように、虚しく感じる。それとは逆に、歩の母親は安心したように微笑んだ。

「あとで迎えに参ります。その時にでも、あの子をきつぱりと振つてやってください。くれぐれも、よろしくお願いします」

「……はい……」

佐伯は重い足取りで、家へと帰っていった。

8、偽りの言葉

歩は、不安の中で目を覚ました。

「豊……？」

近くに佐伯の気配はなかった。歩は一階に駆け下り、佐伯を捜す。しかし佐伯の姿はない。歩はソファに座りこむ。

そこに、佐伯が帰ってきた。

「豊！」

不安と安心が入り混じったような、複雑な表情を浮かべ、歩が佐伯に駆け寄る。

「歩……起きてたのか？」

「どこ行ってたの？」

「ああ、ちよつと……買い物だよ。二人分の朝食もなかったから」

佐伯の手には、コンビニの袋が握られている。歩の目から涙が溢れ出た。

「どうした？」

歩の顔を覗きながら、佐伯は歩の涙を指で拭ってやる。すると、静かに歩が口を開いた。

「今日が、ずっと来なければいいのに……」

「……もう今日だよ」

佐伯は苦笑すると、歩の額に手を触れた。

「熱は？ 寒くないか？」

「平気……」

歩はそう言つて、佐伯に抱きついた。佐伯も静かに抱き返す。

「……歩。俺はこうして会えただけで嬉しいよ。一年よりも長く、もうおまえとは会えないと思っていたから」

「豊……」

「おまえはまだ学生で、未成年で、だから許されないことも多いと思う。一年経てば、何かが変わるよ」

「そうかな……」

歩は顔を上げ、佐伯を見つめる。佐伯は優しく歩に微笑みかけていた。

「きつとね……」

「うん……」

二人はそつと、キスをした。

「さあ、朝飯にしよう。そこ座つてろよ」

佐伯は歩から離れると、買ってきたパンを焼き始めた。歩はソファに座り、そばに置いてあったイニシャル入りのクッションを抱きしめる。

「これ、まだ使つててくれてたんだね」

振り返りながら、歩がそう尋ねる。

「ああ。おまえが作ってくれたんだよな」

「うん。今年のバレンタインにね……でも、もうずっと前の話みたい」

「そうだな……」

「これは、誕生日に豊にもらったネックレス」

歩はそう言つて、首にかかったネックレスを見せた。

「ああ」

佐伯は少し照れ臭そうにしながらも、優しく微笑んでいる。

「豊は？ 私があげたパステース、使つてる？」

「ああ。使つてるよ」

それを聞いて、歩も安心したように笑った。

佐伯は手際よく朝食を作ると、テーブルに並べ、歩の隣に座る。

「さあ出来た、食べよう。いただきます」

「いただきます」

二人は笑いながらそう言い、料理に口をつけた。

「豊……今日、学校あるんだよね？」

歩はあまり食べようとせず、そう尋ねる。

「ああ」

「……新しい学校はどう？」

「田舎の学校だけど、みんな明るくていい生徒ばかりだよ」

「……豊は、どこ行っても平気だね」

変わらぬ佐伯の様子に、歩が言う。佐伯は苦笑した。

「なに言ってるんだ。早く食べる。お母さんが来るよ」

「うん……」

その時、家の呼び鈴が鳴った。歩の身体が一瞬、硬直するのがわかった。

「早いな……」

佐伯が立ち上がると、歩が佐伯の手を握る。そんな歩に驚きつつも、宥めるように歩を抱きしめ、離れた。

「大丈夫」

「う、うん……」

佐伯は歩を置いて、玄関へと向かっていった。そしてドアを開けると、そこには静香がいる。

「静香……」

「おはようございます。様子が気になって……」

予想外の訪問者に、佐伯は緊張と安堵が入り混じったような、複雑な表情で微笑む。

「ああ……大丈夫だよ。上がるか？」

「ううん……」

静香は首を振ると、リビングからこちらを覗いている歩に気がつき、会釈をする。歩は訪問者が静香だとわかると、玄関までやってきた。

「あの……昨日はありがとうございました」

深々と頭を下げて歩が言ったので、つられて静香も頭を下げる。

「え、いえ、別に……」

佐伯はそんな二人に微笑むと、口を開いた。

「上がれよ。いいよな？ 歩」

「うん」

招くように奥へと入っていく佐伯と歩に、静香も後に続いた。

佐伯はすぐに紅茶を入れ始める。その間に、一人掛けのソファに静香が座り、二人掛けのソファに歩が座る形となった。

「昨日は本当にありがとうございました。私の着替えまでしてくれ
たって聞いて、ちゃんとお礼が言いたかったんです」

歩はもう一度頭を下げ、そう言った。

「ううん、いいんです。困った時は、お互いさまだし……」

静香は少し照れながら答える。歩は微笑んだまま、少し俯いた。

「私、今日帰るんだ……」

「え……」

そこに、佐伯が静香に紅茶を差し出し、空いている二人の間に座った。

「あ、歩さん。風邪は大丈夫なんですか？」

弾まない会話に、静香が尋ねる。

「ええ、おかげさまですっきり。熱もほとんど下がったし」

「よかった」

静香の優しい笑顔に、歩は佐伯を見つめる。その視線に気づき、

佐伯は怪訝な顔で歩を見つめ返すと、歩は目を逸らした。

「どうした？」

「ううん」

「変なやつだな」

「……豊の周りには、いつもいい人がいるね。しかも美人で……」

「え？」

歩の言葉に、静香が驚いた。佐伯は苦笑している。

「なに、おまえ妬いてんの？」

「うん。ちよつと……」

「バーカ」

「だって……」

静香は、歩の素直な一面を見て驚いた。自分なら必死に否定しているだろう。

「あの……私、様子を見にきたただだから。元氣そうで安心したんで、もう行きます」

佐伯と歩の間に流れる暖かな空気を感じて、静香は居たたまれなくなり、立ち上がった。

「そうか。いろいろありがとうな」

佐伯は軽くお辞儀する。静香は首を振った。

「ううん。じゃあ、歩さん。また……」

「ありがとう……」

静香はそのまま、佐伯の家を後にした。

二人の間に揺るぎない何かがあるのを感じた静香は、その間には入れないと知った。

「本当に綺麗な人だね。静香さん……」

静香が去った後、歩がそう言った。佐伯は歩を見つめる。

「そうか？」

「うん……」

「心配すんなって」

「無理」

「無理？」

予想外の歩の言葉に、佐伯は思わず聞き返す。

「無理だよ……私はずっと離れ離れだけど、あんな美少女に、豊は毎日会うんだよ？」

「じゃあ、おまえは何なんだよ。学校にカッコいいやつ、いっぱいいるだろ」

「それはそうだけど……」

何もかもが不安な様子の歩に、佐伯は優しく微笑みかける。

「心配すんなって。それより、辛くてもちゃんと学校に行けよ。おまえのお母さんも、大分参ってるみたいだしな……」

「わかってるよ。わかってるけど……お母さん、口を開けば恨み言ばっかりなんだもの……」

「……わかるけどな」

「豊。パワーをちょうだい」

突然そう言った歩に、佐伯の顔が近づく。

「俺も……」

二人はキスをした。長いキスだった。

その時、呼び鈴が鳴った。無言のまま、二人は静かに離れる。

「……今度こそ、お母さんだな」

佐伯はそう言っていると、思わず流れた歩の涙を指で拭った。

「もう、さよならなの？」

涙声で歩が言う。そんな歩に、佐伯は真剣な顔で見つめる。

「さよならじゃないよ……生きていれば、いつかきつと会えるだろう？」

「……本当？」

「ああ」

「……うん」

その時、佐伯は歩をしっかりと抱きしめた。

「豊？」

「……元気でな……」

「豊……」

歩の目から再び涙が溢れた時、佐伯は歩から離れ、玄関へと向かっていった。

玄関のドアを開けると、そこには歩の母親が立っている。

「あの子は……」

「中に……」

佐伯がそう言いかけた時、母親が佐伯に近づき、小声で口を開いた。

「あの子がこちらを見えています。どうか今こそ、あの子から離れてください」

「……」

最期通告のような母親のその言葉に、佐伯は深く深呼吸した。

「佐伯さん。あの子のために、どうか……」

佐伯の目に映っているのは、いつもは口うるさく堂々とした女性ではない。ただのか弱い女性だった。

「……安心して下さい……」

佐伯は、数メートル後ろに居るはずの歩に聞こえるような声でそう言った。

「歩さんには、また会えると言っておきました。これでおとなしく帰るはずですが……でも、後藤さんたちも、目を離さないでください。今後このようなことがあると、こちらで迷惑ですから……僕には新しい生活があるんです。まだこちらにも慣れていないわけではありませんし、新しい恋愛に踏み切ろうとしているんです。歩さんとは……もう終わったつもりですから。今後、会うこともないでしょう。僕も歩さんのことは、一切忘れるつもりです……」

佐伯はゆっくりとそう言った。自分でも何を言っているのかわからなくなる。だが佐伯は、歩のために身を引こうと思った。

歩はリビングで、佐伯のその声をしっかりと聞いていた。

「ありがとうございます……」

母親は佐伯にそう言うと、奥のリビングに向かって口を開く。

「歩。帰るわよ」

母親がそう言うと、歩は涙をたくさん溜めて、こちらを見ていた。「早くいらっしゃい。お母さんたちにも、佐伯さんにも迷惑をかけたのよ。早く帰りましょう。学校だって、いつまでも休めないわ」母親の言葉に、歩は何も言わず玄関へと向かう。佐伯はもう、歩の顔など見れなかった。歩もまた、佐伯の顔を見るのが怖く感じる。そんな中で、母親だけが機敏に動いていた。

「歩。佐伯先生にご挨拶なさい。ご迷惑かけたんだから」

靴を履いて振り向く歩は、母親に言われるまま、ゆっくりと頭を下げる。

「……う、ごめんなさい……」

歩は悲しさに震え、か細い声でそう言った。やっと見上げた佐伯の顔は、無表情に冷たく見える。

「では、佐伯さん。お世話になりました。お元気で」

「……後藤さんも」

母親の言葉に、佐伯は機械的にそう答え、二人を見送るために一緒に外へと出ていく。家の前には、タクシーが止まっていた。

「……歩。元気でな……」

やっと佐伯もそう声をかけた。佐伯の精一杯の言葉だったが、歩は放心状態で、返事など出来ない。母親は歩を先にタクシーに乗せると、佐伯にお辞儀をする。そしてそのまま何も言わず、タクシーは去っていった。

「元気で……歩……」

佐伯はタクシーが見えなくなるまで見送ると、一人、部屋で頭を抱えた。これが二人にとっていいことだと信じたかったが、後悔と罪悪感だけが、佐伯を襲っていた。

タクシーの中で、歩は泣いていた。

「……歩。あの人のことは忘れなさい。あの人にも、新しい生活があるんですよ。あなたとはもう終わったんだから、いつまでもあの人のことばかり考えていないで、次へ進みなさい。学校だって、あなたを待ってるのよ」

言い聞かせるように、歩の肩を抱きながら、母親が言う。そんな母親の手を、歩は振り解いた。

「お母さんに、私の気持ちなんてわからない！ どうして……私には豊しかないのに！」

歩が泣きながら言った。歩の涙は、止まることを知らない。

「……佐伯さんだって、もう前へ進んでいるのよ。あなたのことなんて、すぐに忘れてしまうわ」

「そんなことない！ そんなの嘘よ。豊だって……豊にだって、私しかないはずだもん！」

歩の言葉に、母親はめげずに真剣な表情で見つめる。

「歩。佐伯先生ね、さっきお母さんにこっそり言ったのよ。歩のこ

とは忘れたいから、もう歩をよこさないでくれって……」

事前に話し合っていた佐伯と母親の筋書きを、歩が知る由もない。

「……そんなの、嘘だもん……」

歩は耳を覆った。しかし、さっき佐伯が口に使っていたことは、はつきりと歩の耳に残っている。信じたくないが、あれが佐伯の本心だと、歩は納得せざるを得なかった。

9、二人のはじまり

学校。佐伯は空き時間、一人で数学の準備室にいた。煙草の匂いが充満するその部屋で、佐伯は辛さを堪えきれないでいた。ただ思い出されるのは、歩の涙と走馬灯のように脳裏で蘇る、歩との思い出だけである。

一年前、四月。

「佐伯先生。これ、新しいチョークです」

職員室でチョークの箱を差し出しながら、同僚の教師が佐伯にそう言った。

「ああ、ありがとうございます」

佐伯はそう返事をし、受け取る。

まだ担任として受け持っていないものの、今日から新学期が始まる。この後の授業は一年生で、気持ちを新たに臨まねばならない。

「今日から授業ですね。一年坊主相手だと、大変だなあ」

「ハハハ。そうですね」

「お互い頑張りましょう」

「ええ」

佐伯は立ち上がると、一年生の教室へと向かっていく。

教室の生徒たちは、新しい世界に輝いて見える。佐伯はいつものように、軽く気さくな自己紹介をした。そうすることで、生徒の距離が縮まることを知っている。まだ若い教師であるからこそ出来る手段だ。

「一年生の数学を担当する、佐伯豊です。今日はこのクラスの初めての授業だから、最初は自己紹介といこう。まず俺の自己紹介を軽くさせてもらうと、年は二十四歳、独身。東大を卒業して去年ここに就職し、今年は二年目です。ちなみに誕生日は、五月十日。ゴトーの日と覚えてくれ。もうすぐだから、プレゼント待ってまーす」

軽いノリの佐伯に、生徒たちが一斉に盛り上がる。年が近いせいもあり、佐伯はどこでも人気者となっていた。

「ゴトーの日だって。そういやこのクラスも、後藤っていたよな」

一人の男子生徒がそう言った。

「へえ。後藤がいるのか」

佐伯はその言葉に、何気なく教卓に置かれた座席表を見つめる。

次の瞬間、佐伯と歩の目が合った。それが、二人の初めての出会いであつた。

「君が後藤さんか。じゃあ、君はゴトーの日に、特別にプレゼントをあげよう」

佐伯のその発言に、生徒たちがざわつく。

「いいなあ。私もほしい！」

「ダメ。それじゃあ、ありがたみがないだろ」

「私、ムトーの日が誕生日！ 私にも何かちょうだい、先生」

「ハハハ。近いけど関係ないじゃん」

それを機に、佐伯と生徒たちは、すっかり打ち解けてしまつていた。

数日後。休み時間、数学準備室にいる佐伯を、一人の少女が訪ねた。

「ああ、君は……後藤か」

少女とは、歩だった。佐伯も歩を覚えていて、優しく微笑みかける。

「職員室に行ったら、ここだって……次の時間、うちのクラスの授業です。何かありますか？」

表情を変えずに、歩がそう言った。

この学校には各教科ごとに係が設けられており、入学早々に分担が決められていた。佐伯が数学教師だということは知らないうちに、歩は偶然、数学の係に決まっていたのだった。

「今日は特にないかな」

「そうですか」

佐伯の言葉に、歩は背を向ける。そんな歩に、佐伯が口を開いた。

「あ、待って」

「はい？」

「これ、持ってくれる？」

佐伯が差し出したのは、佐伯自身の教科書である。

「これくらい、自分で持っていてください」

歩はつれなくそう言う。そんな歩に反して、佐伯の態度はあくまで軽く演じている。

「堅いなあ。仕事あげようって言うんだよ」

「仕事がないならいいです」

「でも君、数学の係なんだろ。係は一人だけ？」

「いえ。もう一人の古屋さんが、お休みで……」

その時、予鈴が鳴った。

「じゃあ、行きますか」

佐伯は教科書を持つと、歩と二人で教室へと向かっていった。

佐伯は新人生の生徒たちにも人気者となっていたが、歩は中学から一緒に友達もおらず、社交的な性格ではないため、クラスメイトたちと馴染めずにいた生徒であった。

放課後。歩は一人、クラブ見学をしていた。校舎を周っていると、音楽室から軽快なメロディが聞こえてくる。ふと中を覗くと、そこには佐伯の姿があった。

佐伯は電子ピアノを駆使し、好きなように弾いている。歩がその様子をしばらく見ていると、佐伯は歩に気がついて、手招きをした。

「……あの」

歩は我に返りつつ、恐る恐るドアを開けた。まるでこれから叱られにいくように、歩はバツが悪そうにしている。

そんな歩と反して、佐伯は少し照れたように笑っている。

「いつからいたんだよ。入ってくればいいのに」

佐伯の変わらぬ態度に少しホッとして、歩は佐伯に近づいた。

「あ、ピアノ、お上手ですね」

「上手じゃないけど、昔バンドを組んでてね。今でも趣味でやっている。この時間は空いてるから、弾かせてもらってるんだ。おまえは一人で、こんなところに何の用だ？」

「クラブ見学に……」

「一人で？」

「はい」

「……まだ友達いないのか？」

佐伯の言葉に傷つきながらも、歩は凶星で一瞬、言葉を失った。

「よ、余計なお世話です」

「ふうん？」

佐伯はそれ以上何も言わず、静かにピアノを弾き始める。歩は一人、教壇の段差へと座った。

「この曲、知ってる？」

突然、佐伯が尋ねたので、歩はそのまま頷く。

「うん。カントリーロード……」

「当たり前。俺にとっても古い曲だけど、やっぱり名曲だよな」

「……いいな、先生は」

突然、歩がそう言った。

「どうして？」

「有名大学出で、ピアノまで弾けて、人気者でなんでも持ってる……」

……

歩の言葉に、佐伯はピアノを弾く手を止め、歩を優しく見つめた。

「それは俺だけじゃないだろう。おまえだって、これからなんじゃないの？」

それを聞いて、歩は俯き、首を振る。

「でも、私は馬鹿だし、器用じゃないし、何にも出来ない……」

「誰が決めたんだよ。おまえの人生、これからだろうが」

「……わかんない」

佐伯は苦笑すると、もう一度ゆっくりと、メロディを奏でる。

「じゃあ、弾いてみる？ この曲。カントリーロード」

佐伯の言葉に驚いて、歩は慌てて首を振った。

「む、無理だよ。ピアノは習ってたけど、全然うまくないし、楽譜も読めないもん！」

「だから俺が教えるよ。難しくないから」

軽くそう言った佐伯に、歩は静かに近づき、口を開く。

「……本当に？」

「ああ」

「いいの？」

「ああ。その代わり、頑張って学校生活に慣れるよ」

「……うん」

「じゃあ、約束」

「約束……」

二人は指切りをした。

それから放課後の数十分間、二人だけのピアノレッスンが始まった。それを機に、歩も次第に打ち解け、明るくなっていった。

数週間後、放課後。

歩は佐伯からの課題曲を、見事に弾いて見せた。

「やったじゃん、歩。完璧だよ」

佐伯が拍手を言う。

「ううん。ちよつと覚束なかった……緊張して、手が震えちゃった」

答える歩は、照れと嬉しさを兼ね備えた様子で笑った。佐伯は続けて、歩に笑いかける。

「いやいや、間違い一つもないし、短期間でよくやったな。すごいじゃん」

「ありがとう、先生。少し自信持ってきた」

「ああ。これでカントリーロードは卒業だな」

「うん……」

「友達も出来てきたみたいだし、これで高校生活、ちょっとは楽しくなるんじゃない？ 自信持てよな」

「ありがとう。先生……」

歩がそう言ったその時、チャイムが鳴った。

「おお、もうこんな時間か。おまえも美術部入ったんだろ？ 遅れるぞ」

佐伯はそう言うと、立ち上がる。

二人が会っていたのは、放課後の部活が始まる前までという、短い時間だった。

「う、うん……」

歩はピアノを片付けると、立ち止まったまま、動こうとしない。

「どうした？」

佐伯はそんな歩に首を傾げながら、心配そうに歩の顔を覗きこむ。

「……先生は、なんで剣道部の顧問なの？」

俯いたまま、話題を変えて、歩が言った。佐伯はこの学校に赴任してから、ずっと剣道部の顧問だ。

「ああ。昔、習わされてたんだ。こう見えても黒帯だよ」

「すごい。先生って、なんでも出来るんだ」

「なんだ？ 今度は剣道鍛えてくれって言うんじゃないだろうな。」

大丈夫だよ。歩は歩で、良いところがたくさんあるんだから。ほら、自信持つていけ」

佐伯はそう言うと、歩の背中を押し、入口まで歩き出した。

「……先生。もうピアノ、教えてくれないの？」

歩は思い切ってそう尋ねる。

課題曲が弾けるまでという、条件付きの秘密のレッスン。おかげで歩もずいぶん明るくなり、友達も出来たため、佐伯の目標も達成されたので、もうこの時間は必要なくなってしまった。しかし歩にとってこの時間がなくなることは、とても寂しく感じる。

「うーん。教えないわけじゃないけど……」

歩の言葉に、佐伯は小さく溜息を吐いてそう言った。歩はすぎる

ような思いで、必死に佐伯に笑いかける。

「じゃあ……」

「でも、生徒はおまえだけじゃないからなあ……」

歩の言葉を遮って、佐伯が言った。その言葉に、歩は深く傷つき俯く。

「……わかった。ありがとうございました!」

歩は半ば投げやりにそう言つと、逃げるように音楽室を出ていった。

佐伯は小さく息を吐くと、静かに音楽室を後にした。

10、ゴトーの日

現代。

佐伯は数学準備室から動かないまま、一人、黙々と煙草を吸っていた。そこに授業終了のチャイムが鳴る。佐伯は、部屋に貼られた授業表を見つめた。

「次は静香たちのクラスか」

佐伯は煙草の火を消すと、職員室へと向かっていった。

「佐伯先生。新しいチョークがほしいって言っていましたよね？机に置いておきましたから」

同僚の女性教師が、佐伯に言った。

「あ、すみません。俺、筆圧すごくて、すぐ折っちゃうんですよ……」

佐伯は、苦笑しながらそう言う。その言葉に、女性教師も苦笑した。

「私は薄くて、生徒たちに怒られています」

「どちらでもいいですね」

「本当」

二人は笑った。そして佐伯は、自分の机の上で、授業の支度を始める。

「佐伯先生って、意外と綺麗にしていますよね」

女性教師が、机を覗きこむようにしてそう言った。佐伯は吹き出すように口を開く。

「どついう意味ですか？」

「あらごめんなさい。でも、そんなにさっぱりしている先生っていないから……」

「はあ。前の学校でも、あんまり職員室にいなかったんですよ。俺、どうも職員室って苦手で……」

「あら。昔、怒られたりしたクチですか？」

「まあ……ここの学校、あんまり準備室に入り浸る先生いないから、おかげで数学準備室は、自分の城になってますよ。そっちは散らかってるから、片付けないと」

「うふふ。おかしな人ですね、佐伯先生って」

「そうですかね……」

佐伯は、頭をかいて苦笑した。

* * * * *

一年前。帝都学園数学準備室。

それでも佐伯は、一人で煙草を吸っていた。そこに、ドアがノックされる。

「はい」

「一年二組です」

「はい、どうぞ」

ドアのところには、歩ともう一人の数学係の少女が立っていた。

「次はうちのクラスですけど、何か仕事はありますか？」

「ああ。その提出用のドリルを持って行って、配ってくれる？」

「わかりました」

「でも、もう始まるな。俺も一緒に行くよ」

佐伯は歩たちと共に、教室へと向かっていった。この間の放課後から、佐伯と歩が放課後に音楽室で会うことはなくなっていた。それどころか、こういう場でも目さえ合わない。佐伯は、そんな歩の態度を気にしていた。

「ユタ先生」

一年生の廊下で、数人の少女が佐伯に駆け寄ってくる。

「ユツコたちか。なに？」

「はい、これ」

少女たちが佐伯に差し出したのは、透明の袋に入ったクッキーだった。

「クッキー？」

「そう。昨日ユツコの家で、みんなで作ったんだ。先生の誕生日、明日でしょう？ 明日は日曜で会えないから、今日持ってきたんだ」
「そりゃあ、わざわざありがとう。じゃ、遠慮なくいただきます」
「うん。それより先生。この間、五組の遠藤さんが先生に告白したって本当？」

少女たちの言葉に、佐伯は苦笑する。

「なに言ってるんだ」

「噂だもん」

「本当、噂なんて当てにならねえな。そんなこと、あるわけないだろ。それにな、俺は誰にもモテるんだよ」

「キヤハハ。バツカ。でも、私たちだって先生に惚れてんだからね」
少女たちは、あっけらかんと佐伯にそう言った。佐伯は慣れているように笑う。

「そりやどうも。いいから行け。授業始まるぞ」

「はい。クッキー、ちゃんと食べてよね」

「ああ、サンキュー」

少女たちが去っていき、三人はまた歩き始めた。

「モテモテですね、先生。生徒に告白されたって本当ですか？」

歩と同じ係の、古屋が尋ねる。

「まさか……そうだ、歩。おまえには、ゴトーの日の記念品やるっていう約束だったよな」

話題を避けて、佐伯が歩に言う。佐伯の誕生日の語呂と歩の苗字をかけて、生徒全員の前でプレゼントをあげる約束をしていた。

笑ってそう言う佐伯に、歩は佐伯を睨みつける。

「そんな物、いりません」

そう言った歩は、明らかに佐伯を拒んでいた。

「でも、せっかく……」

「私、そういうの嫌なんです」

歩の言葉に、佐伯は笑って頷いた。

「そうか。ごめんな……」

少し重苦しい雰囲気の中で、三人は教室へと歩いていった。

次の日。佐伯は、自分の誕生日でもある休日を、一人で過ごしていた。そこに電話が鳴る。

『佐伯？ 俺、大友だけど』

電話の相手は、大学の同級生だ。

「大友か。久しぶりだな」

『ああ。それより今日おまえ、誕生日だろ？』

「そうだけど……なんでだよ」

『ゴトーの日だろ、覚えてるよ。それより、どうせ彼女いなくて暇なんだろう？ たまにはおごってやるから出て来いよ。飲もうぜ』

「昼間っから、酒かよ」

佐伯は呆れながらも、笑って答える。

『いいだろ。近くの日本料理屋にいるんだ。とにかく来いよ。待ってるから』

「わかった」

佐伯は電話を切ると、指定された店へと向かっていった。

「来た来た。佐伯」

佐伯が店に行くと、店には大友という男性と、一人の女性が待っていた。

「おお、美香子。久しぶりだな」

佐伯はそう言って、女性の隣へ座る。美香子という、大友の妻である。二人共、佐伯の大学時代の同級生だった。

「おい、佐伯。人の女房に手を出すなよ。俺とも久しぶりだろうが」
美香子の横から顔を出して、大友が言う。佐伯は懐かしい友人に、ほっとしたように笑う。

「誰が手を出すか。おまえとは美香子より会ってる」

「そうかい。実を言つとさ、美香子がおまえの誕生日、覚えてたん

だよ」

そのまま大友が、佐伯に向かって言う。

「へえ。そうだったんだ」

「本当に久しぶりね、佐伯君」

佐伯と大友は、何度か飲み会をして会っているが、美香子とは数年ぶりである。

佐伯は美香子に向かって、口を開く。

「ああ。こいつとは、うまくいつてる？」

「まあまあってとこね」

「ハハ。そっか」

「佐伯君はどうなの？ 高校の先生は」

「こつちもまあまあってところかな。二年目だけど、まだまだわからないことだらけだし」

「おいおい。なんで二人して話すんだよ。俺も仲間に入れるよ」

仲良く話している佐伯と美香子に向かって、大友が口を挟む。そんな大友に、佐伯は苦笑した。

「悪い悪い。美香子のほうが久々だからさ」

「おまえも早く結婚しろよ。そしたら俺、嫉妬しなくて済むだろう」

「へえ、意外だな。おまえはそういう考えなんだ」

「茶化すなって。ほらほら、酒が来たぞ。乾杯しよう」

一同はグラスを交わし、酒に口をつける。その後、一番初めに口を開いたのは、美香子であった。

「でも佐伯君、昔から結構、硬派なところあったよね。今、本当に彼女いないの？」

「いませんよ。それどころじゃないって。ガキばっか相手にしてるんだから」

佐伯は苦笑して答えた。そんな佐伯に、大友が身を乗り出す。

「そりゃあ大変だ。それに佐伯は硬派じゃなくて、ガリ勉なんだよ。大学時代から」

「確かに」

「それで？ そのガキには告白とかされちゃったりするわけ？」

「いつの時代も、生徒にとって教師は憧れの存在なの。そういうやつもいるだろう」

「へえ、告白されるんだ」

「おまえはどうなんだよ」

今度は佐伯が大友に尋ねる。大友もまた、高校の教師である。

「俺は男子校だぞ」

「ハハハ。そうだった」

三人は数時間、そのまま一緒に食事をする、それぞれ家へと帰っていった。

その頃、佐伯の自宅マンションには、歩の姿があった。手には職員名簿で調べた住所のメモが握られている。

学校では素直になれなかったものの、今日は佐伯の誕生日だ。歩はこれまでの行動を謝るためにも、どうしても今日、会いたい……そして、誕生日プレゼントを渡したいと考えていた。

歩が佐伯の部屋を訪れると、その前には数人の女子たちが座りこんでいた。

「なによ、あんた。豊ちゃんになにか用？」

女子たちは上級生のようで、威圧感たっぷり歩を睨みつけている。

「あんた一年ね？ ガキは帰んな。豊ちゃんが、あんたなんか相手にするわけないんだから。ウチら三年はもうすぐ卒業で、ガキじゃないからいいけどね」

歩は押し黙った。しかし、ここまで来て帰るのも空しい。歩は勇気を振り絞って、口を開いた。

「せ、先生はいないんですか？」

「うるさいな。とつとと帰んな！」

女子たちの剣幕に、歩は驚いて後ずさりすると、肩を落としてマンションを出ていった。

「歩？」

その時、ちょうど帰ってきた佐伯が、歩を呼び止めた。

「先生……」

「どうした？　こんなところで……」

「あの。名簿を見て……誕生日プレゼント……」

人付き合いの苦手な歩が、しどろもどろでそう言いながら、小さな箱型のプレゼントを差し出す。

「ああ、そっか。わざわざありがとう……俺もおまえに渡すもんがあつたんだ。ちょっと待ってて」

佐伯の言葉に、歩は佐伯の腕を掴み、首を振った。

「へ、部屋の前に、三年生がいる……」

怯えたようにしている歩の顔を、佐伯は覗きこんだ。

「追い返されたのか？」

「うん……」

「そうか。じゃあ明日、学校に持っていくよ。おまえはいらないって言ってたけど」

「……ゴトーの日のプレゼント？」

歩が笑って尋ねる。

「当たり前。俺も安月給だから、大したもんはあげられないけど」

「うっん」

「……よかった。もう、口きいてくれないのかと思った」

歩の笑顔に笑いながら、佐伯が言った。

「え？」

「俺……おまえ、傷つけちゃったもんな」

佐伯の言葉に、歩は佐伯を見つめる。

「先生……私、決めて来たの」

「何を？」

「私、先生のことが……」

「ストップ」

歩の言葉に、佐伯は突然そう言って、歩の話を止めた。

「先生？」

「悪いな、歩……俺、生徒をどうこうする気ないんだ。だから誰が何を言っても、答えは同じだ。もうおまえのこと傷つけたくないし、わかってほしいんだけど……」

「……わかった……」

歩は佐伯が気になっていた。学校でかまってもらえたのが嬉しく感じる。話をする機会もない日は苦しくて仕方がない。

そんな胸いっぱいの想いを抱え、歩は佐伯の誕生日を機に、一生分の勇気を使い果たしても、告白しようと思っていた。だがその寸前で、歩はすべてを否定され、断られてしまった。

「……ごめん」

佐伯にとつて、生徒から告白されたことは、歩が初めてではなかった。それゆえに、生徒である歩が何を言おうとしているのかがわかってしまう。傷つけたくはなかったが、教師としてきっぱり言わなければならぬこともある。

歩は肩を落としながらも、無理に笑って首を振った。

「ううん。じゃあ……さよなら」

歩はそう言つと、その場から去つていった。佐伯は小さく溜息をつくと、マンションへと入つていった。

佐伯が部屋に向かうと、歩が言った通り、部屋の前には数人の女生徒たちがいる。

「あ、豊ちゃん！ 遅いよ、ずっと待ってたんだよ。誕生日おめでとつ」

佐伯の帰りに盛り上がりながら、女生徒たちはラッピングされた袋を差し出す。しかし、佐伯の顔は晴れておらず、女生徒たちを見つめている。

「ああ。ありがとう……」

「ねえ、中入れてよ。寒かったんだよ」

「悪いけど、もうここには来ないでくれ」

溜息をつきながら、きつぱりと佐伯がそう言った。そこに学校で

見るような佐伯はいない。

女生徒たちは、戸惑いながら口を開く。

「え、なんで？」

「なんでも。俺にもプライベートってもんがあるし、こんなところに集団でいられたら、マンションにも迷惑だ。おまえたちならわかるだろう？」

「……なによ。せっかくわざわざ来てやったのに」

「悪い」

「自惚れないでよ。もう知らない！」

女生徒たちは腹を立てて立ち上がると、去っていった。

佐伯は溜息をつきながら、部屋へと入っていった。そしてソファに腰を下ろすと、ふと気になって、歩からの誕生日プレゼントの包みを開ける。中には、カントリーロードのオルゴールが入っていた。佐伯はそれを見て少し驚いた後、部屋の棚に置いてあった小さな包みを持って、マンションを出ていった。

佐伯はそのまま、バイクで駅へと向かっていた。しばらく走ると、駅の近くの商店街で、歩がとぼとぼと歩いているのが見える。

「歩！」

佐伯はそう言って、歩の前にバイクを止める。

「先生……」

「間に合ってよかった」

笑いかける佐伯に、歩は首を傾げる。

「ど、どうしたの？」

「これ、ゴトーの日のプレゼントだ。やっぱり今日、渡したくなかった」

佐伯はそう言って、ポケットに突っこんでいた小さな包みを差し出す。

「ありがとう……」

「開けてみな」

「うん」

歩は嬉しそうに包みを開けると、そこにはカントリーロードのオルゴールが入っている。

「先生。これ……」

「同じ物、買ってたんだな」

二人は微笑んだ。そして歩は、笑っている佐伯を見つめる。

「先生、やっぱり言わせて。私、先生のことが好きだよ」

歩の言葉に、佐伯の目が揺れる。

「歩……」

「だからと言って、先生にどうこうしてもらいたいわけじゃない。

ただ……言っておきたかったの。私が勇気持って告白したの、忘れないで……」

「……ありがとう……」

二人は優しく微笑むと、その場で分かれて帰っていった。

11、文化祭

一年前、秋――。

夏休みを終えたばかりの生徒たちに混じり、佐伯が学校に登校した。佐伯と歩の間には何もなく、もちろん夏休みに会うような、特別な存在ではなかった。

夏休みが終わってすぐに、文化祭の準備が始まった。文化祭のために、夏休みも活動していたクラスはいくつもある。

数学準備室。ほとんど佐伯しか使わないその部屋は、もはや佐伯の私物で溢れている。

そこに、歩がやってきた。

「お、一人か？」

歩に気づいて、佐伯が尋ねる。

「古屋さん、風邪で早退しました」

「そう。今日は別に、仕事はないよ」

「そうですか……」

「でも、ちよつと話でもしない？」

佐伯はそう言って、火のついた煙草をもみ消す。歩は佐伯の近くにある椅子へと座った。

「先生ってヘビースモーカーなんだね。いつも吸ってる」

「まあね……煙草は嫌い？」

「嫌いもなにも、吸ったことないもん」

「そうか。おまえはお嬢様だったな」

「そういうわけじゃないけど……」

歩は押し黙る。そんな歩に、佐伯はなんとなくの質問を続けた。

「兄弟はいるの？」

「一人っ子です。厳しい父と、教育ママに囲まれて……」

「幸せな家庭じゃないか」

「……わかりません」

「そうか」

佐伯は苦笑しながらも、話を続ける。

「夏休みは楽しかったか？」

「特に変わったことは……家族で親戚の家に行っただけ」

「友達と遊んだりしなかったのか？」

「はい……」

「……まだ馴染んでないのか？」

友達の少ない歩が、佐伯は心配であった。佐伯とも前よりは打ち解け、明るくなっているように見えるが、歩はいつもどこか引いている部分がある。佐伯は教師として、力になりたいと思っていた。

歩は佐伯の質問に、俯きながら答える。

「そういうわけじゃないけど……うちの近くに友達いないし……」

「ふうん……」

歩の今後を模索するように、佐伯は名案がないかと考える。

そうして黙りこんだ佐伯に、今度は歩が口を開いた。

「……先生は夏休み、何してたんですか？」

「俺？ 俺も、別に変わったことはしてないな……大学の友達と、山登りとかは行ったけどね」

「へえ。山登り……」

その時、チャイムが鳴った。

「予鈴だ。じゃあ行くか」

「はい」

二人は立ち上がると、教室へと向かっていった。

「おまえのクラス、文化祭は何やるの？」

廊下を二人で歩きながら、佐伯が尋ねる。

「プラネタリウムに決まりました。一人、とても詳しい子がいて、結構本格的に……」

「へえ、プラネタリウムか。いいね。俺、星好き」

「私も」

「楽しみにしてるよ」

佐伯の言葉に、歩は素直に喜ぶ。

「先生は、何もしないんですか？ 文化祭」

「しないよ。俺は顧問も剣道部で、せいぜい講堂とかの入場整理とかだけだよ。その分、いろいろ見られると思うけどね」

「じゃあ、うちのクラスも、きつと見にきてくださいね」

「ああ。必ず行くよ」

二人はそのまま、教室へと入っていった。

文化祭当日。

「佐伯先生、そろそろ休憩時間ですよ。楽しんできてください」

一人の女性教師が、佐伯に言った。教師は交代制で、文化祭を回れることになっている。

「ありがとうございます」

佐伯はそう言うと、辺りを見回す。

「今日は曇ってしまったから、どうなるかと思ったけれど、たくさん人が入ってますね」

「ええ。夕方までは、天気はもつそうだからよかった」

佐伯はそのまま、教室を周っていった。

「あ、佐伯ちゃん。来るの遅いぜ」

一年生の棟で、男子生徒がそう言つて、佐伯の肩を叩く。

「悪い。三年の方から順番に見てきた」

「まったく。ほら、見てつてよ」

「五組はなんだ？」

佐伯は、目の前にある教室の中を見ながら尋ねる。小さなコーナ―が区切られているようだ。

「ダーツに輪投げ。やってつてよ！ 豪華賞品あるからさ。まあ、当たればの話だけどね」

「おまえ、俺のダーツの腕知らないな」

呼びこみの男子生徒が、そのまま佐伯を教室の中へと連れていく。佐伯は腕をまくり上げると、自慢げにダーツの矢を手にする。

「そんなこと言って、どうせハツタリなんだろ」

「さあ、どうかな」

佐伯はそう言うと、ダーツの矢を放った。三本の矢のうち、矢はすべてまん中付近に刺さった。

「すげーじゃん、佐伯ちゃん！　じゃあ、ここから三つ景品選んで」
そうやって差し出された箱の中には、消しゴムや折り紙などが入っている。

「ろくなのねえな……」

「そう言っなよ、佐伯ちゃん。でもマスコット人形だけは、女子の手作りだよ」

「じゃあ、それ三つもらおうかな」

マスコット人形の景品を受け取ると、佐伯は順番に教室を周っていった。

たまたま最後に来たのは、歩のクラスであった。

「豊ちゃん、入ってって。もうすぐ始まるよ」

呼びこみの女子が、佐伯を誘う。

「ここはプラネタリウムだったな」

「そうだよ。ちょうどいい時間に来たね。今から始まるから」

佐伯は、教室の中へと通された。中には大きな布が天井からかけられており、まるで大きなテントの中のように、薄暗い明かりがついているだけだ。

「あ、佐伯先生だ。やっと来てくれたんだ」

中にいる女子が、佐伯に声をかける。

「ああ。体育館の方から順に来たから、ここが一番最後だよ」

「なんだ、ついてない」

「最後だから、ゆっくり見られるって」

「うまいなあ、先生」

「ほら、始まるんだろう。うるせえよ」

「ハイハイ」

「あの、佐伯先生……これ、パンフレットです」

そこに、歩がプリントを差し出してきた。

「ああ。ありがとう」

佐伯はそれを受け取り、歩のクラスも楽しんでいた

夕方。文化祭が終了し、佐伯は掃除をして、職員室へと戻っていた。

「佐伯先生、お疲れさまです」

男性教師が、佐伯に声をかける。

「お疲れさまです。後片付けのが大変ですネ」

苦笑しながら佐伯が言う。

「ええ。でももう、大分片付きましたね。生徒たちもほとんど帰りましたし、後は教師の仕事です。我々も、なんだかんだと大変ですよネ」

「本当に。じゃあ俺、ここのゴミ捨ててきますから」

職員室のゴミ箱を持ち上げて、佐伯が言う。

「ああ、すみません。外は雨が降ってるので、傘持ってた方がいいですよ」

「大丈夫ですよ。すぐ戻りますから。でも、昼間は天気もってよかったですね」

「本当ですね」

「じゃあ、行ってきます」

佐伯はいつぱいになったゴミ箱を持って、焼却炉へと向かっていった。

そしてゴミを捨てると、どこからか声が聞こえてくる。しかし、辺りを見回すが、姿は見えない。

「いい気になってんじゃないって言うてんのよ!」

その時、そんな声が聞こえ、何かを叩く音が聞こえた。佐伯は近

くの倉庫裏を覗きこむ。そこには、数人の女生徒に囲まれた、歩の姿があった。

女生徒たちは傘を差していて顔は見えなかったが、歩は怖さで震え、近くには傘が落ちている。

「泣けばいいとも思ってるわけ？　どういふつもりかって聞いてんのよ！」

「何してんだ？」

そこに、佐伯が声をかけた。女生徒たちは、驚きに声を失っている。

「あ……」

そこで、佐伯に初めて、女生徒たちの顔が見えた。二年生である。

「……いじめか？」

「そんなんじゃないません！」

女生徒たちは、逃げるようにその場から去っていった。

「おい。大丈夫か？」

残されたのは歩だけで、佐伯は歩の顔を覗きこむ。

「せ、先生……」

歩は、ガクガクと座りこんだ。

「歩」

「先生……先生！」

歩は涙に濡れ、佐伯に抱きついた。そんな歩の背中を撫でながら、佐伯は歩を見つめる。

「大丈夫だ。もういないよ」

歩は何度も頷き、やがて佐伯を見上げた。

「ご、ごめんなさい。ありがとう……」

大分、落ちついた歩を見て、佐伯は優しく微笑み、頷く。

「大丈夫か？　怪我してるな」

歩の頬は叩かれて腫れ、一度倒れこんだらしく、その拍子に怪我したと見られる傷が足にあった。

「大丈夫……」

歩はそう言うものの、ショック状態で動けないようだ。

「家まで送るよ。これ戻したら帰れるから」

佐伯はゴミ箱を見せてそう言う。歩は目を泳がせると、静かに口を開いた。

「私、クラスの打ち上げが……」

「無理しない方がいい。誰かしら残ってるだろう。見かけたら帰るって伝える」

「……うん」

「震えてるな……」

「平気……」

「じゃあ、教員の駐車場で待っていてくれるか？」

歩は頷いた。佐伯はそのまま歩を一人にするのをためらったが、急いで職員室へと戻っていった。

「あ、佐伯先生。お疲れさまです」

佐伯が職員室に戻るなり、さっきの男性教師が声をかける。

「お疲れさまです」

「もう終わりでしょう？ どうですか、たまには一杯」

「すみません。行きたいんですが、ちょっと一人トラブって……」

「何かあったんですか？」

「大したことはないと思うんですが、心配なので送り届けます」

佐伯は正直にそう言い、自分の机の下を探る。そこには、予備で用意してあったヘルメットが置かれている。

「大丈夫ですか？」

「ええ、多分……じゃあ、お先に失礼します。今度ゆっくり飲みましょう」

「ええ」

佐伯は急いで、職員室を出ていった。

教員用の自転車置き場には、歩が座りこんでいた。

「歩」

佐伯が声をかけると、歩が立ち上がる。

「大丈夫……」

「これ着ろよ。バイクだから……しっかり掴まってるよ」

佐伯はジャンパーを歩に渡し、ヘルメットを被せた。自分も非常用で置いていたヘルメットを被り、後ろに乗せた歩に振り返る。

「おまえの家、隣町だったよな？」

その時、歩がくしゃみをした。

「大丈夫か？」

「う、うん。でも、すごく寒い……」

雨の中で詰め寄られていたため、歩の身体はズブ濡れだった。今でもガタガタと震えているので、佐伯は頷く。

「参ったな……ちよつとの間、我慢してくれよ。ゆっくり走るから」

佐伯はそう言つと、歩を後ろに乗せて、学校を出ていった。

12、重なる心

バイクが止まったのは、佐伯のマンションだった。

「大丈夫か？ 俺の家のが近いからな。一度着替えた方がいい。熱は？」

「ないと思う……」

「とにかく上がれよ。ちょっと汚いけど……」

佐伯は歩を、部屋へと引き入れた。歩は初めて入る男性の部屋を、興味の目で見渡す。

「意外と綺麗……」

「そうか？ ほら、タオル。それから俺のジャージだけど、着替えた方がいいぞ。奥で着替えな」

「ありがとう……」

歩は奥の寝室へと入り、すぐに着替えて戻っていく。佐伯は救急箱を用意していて、歩の怪我した足を消毒すると、立ち上がった。

「じゃあ、行くか」

「もう？」

佐伯の言葉に、思わず歩がそう言った。

「でもおまえんち、厳しいんだろ？」

「今日は大丈夫。打ち上げがあるから、少し遅くなるって言うてあるから……」

「そうか……じゃあ、少しは落ち着けるわけだ」

佐伯は小さく微笑むと、台所で湯を沸かし、温かい紅茶を出してやった。

「ありがとう、先生……」

顔色もよくなった歩に、佐伯は口を開く。

「……何があつたんだ？」

佐伯の質問に、歩は小さく息を吐いた。

「……この間、二年生の人から告白されたの。同じ部活の先輩で…

…でも断つたの。だけど先輩、人気のある人で……」

「さっきのやかからは、その追っかけてところか」

「わからないけど、急に連れていかれて……」

「そうか。おまえが悪いんじゃないのにな……」

「……怖い」

涙ぐむ歩の頭を、佐伯は優しく撫でてやった。

「おまえの担任には言っておくよ。部活の顧問の先生にも。これからは、俺も気をつけるし、今日はゆっくりするといい」

「うん……先生、ありがとう」

「いいよ」

佐伯は歩の制服を干すと、ドライヤーで乾かし始める。そして、話題を変えた。

「文化祭は楽しんだか？俺は結構楽しんだよ。おまえのクラスもなかなかだったぞ」

「うん。全部は見れなかったけど……」

「あ、そうだ。これやるよ」

佐伯は思い出したように、カバンからマスコット人形を取り出す。

「人形？」

「ダーツの景品でもらったんだ。さすがに俺はな……」

「いいの？」

「ああ」

「ありがとう。かわいい……」

やっと歩が笑ったので、佐伯は少しほっとした。

「本降りじゃなくてよかった。制服もすぐに乾くよ」

「うん……」

その時、歩はテーブルの上のオルゴールを見つけて鳴らし始める。

「ああ、それ……」

「私、辛い時とか、これ聞いてるんだ……」

歩の言葉に、佐伯は無言でソファへと座った。

「歩。おまえにも親友みたいな友達が出来るといいな……それまで

は、辛いことがあったら、俺が相談に乗ってやるよ」

佐伯のその言葉に、歩は涙を流す。

「だったら、友達なんか出来なくていい……」

「歩……」

「先生……私、あの時の告白、嘘なの」

おもむろに、歩がそう切り出した。

「え？」

「私、先生とどうこうなりたいわけじゃないって言ったけど、嘘……」

……本当は、先生の特別になりたい……」

歩が真っ赤な顔をしてそう言った。佐伯は困ったように、歩を見つめる。

「あ……歩。わかるだろう？ 俺は教師で、おまえは生徒なんだ……」

佐伯が一瞬、言葉を失って言った。歩は口を結んで、佐伯を見つめる。

「じゃあ、どうして優しくするの？ 私の気持ち知ってるのに、どうしてこんなに優しくしてくれるの。ただの生徒だから？ だって、話しかけないでよ！」

歩はそう言つと、玄関へと走っていく。

「歩！」

玄関先で、佐伯は歩の手を掴んだ。

「離して……もう、傷つきたくないよ……」

「……」

佐伯は何も言わず、後ろから歩を抱きしめる。その時の佐伯は、自分がどうしたいのかがわからなくなっていた。だが、歩をこのまま行かせたくないと思う。

「離して……」

自分の腕の中で泣き続ける歩に、佐伯は一層強く抱きしめる。

「歩……俺は正直、どうしたいのかわからないでいるんだ。ごめん……でも、おまえとは他の生徒よりは仲の良い方だし、大事にし

たいと思ってる。おまえに友達が出来るように考えてやりたいし、いじめは排除したい。それは……やっぱり生徒だからだ。この一線は越えられない」

佐伯が言った。歩は振り返り、佐伯を見つめる。

「じゃあ……私が先生の生徒じゃなかったら？」

歩の言葉に、佐伯の心は揺れた。何も言えない佐伯に対し、歩は涙を流し続ける。

「歩、頼むから泣かないでくれ。俺はおまえの涙なんて見たくないよ。おまえが俺を好いてくれてるのは、嬉しくないわけじゃないんだ。でも……」

「キス……してください。お願い……」

歩の言葉に、佐伯は目を泳がせる。そんな佐伯に、歩は言葉を続けた。

「私は先生が好きだよ。それは今まで変わらなかった。私のこと、少しでも好きな気持ちがあるならしてほしい……今ここには、私たちしかないじゃない。生徒だから駄目なら、私、学校辞めたっていい。先生の彼女になりたい」

泣いて酸欠状態になりながら、歩は精一杯の勇気で、佐伯に体当たりしていた。そんな歩に、佐伯は即答することが出来ない。

「馬鹿だな……なに言っただよ」

「お願い、先生。キスしてくれたら、元に戻るから……」

佐伯はしばらく悩んだ後、歩にそっとキスをした。歩は涙を流しながら、佐伯を離さない。

「歩。俺もおまえが好きだよ……」

自分の言葉を噛みしめるように、佐伯が言った。今度は歩が驚く。「せ、生徒として？」

「……いや」

佐伯の正直な言葉だった。歩は佐伯の頬に触れる。しかし見つめる佐伯の顔は、辛そうに自分を見つめている。

「……同情して言ってくれてるの？」

辛そうな佐伯に、歩が俯いて言う。そんな歩の顔に佐伯の手が触れ、涙を拭った。

「いいや。でも正直、どうしたらいいのかわからない……人間としておまえを受け入れることは出来るけど、俺たちは教師と生徒なんだ。どこまでいっても……」

「先生……」

「だから、もしおまえが卒業しても俺を好きでいてくれるなら、その時は……」

「嫌！ そんなの待てないよ。どうして……私は先生が好きで、先生も私を好きでいてくれるなら、何の問題もないじゃない。先生と生徒の何がいけないの？ 卒業までなんて、待てないよ……」

佐伯の告白を遮って、歩が叫ぶ。

「馬鹿か。辛いのが、おまえだけだなんて思うなよ」

歩に向かつて佐伯が言った。佐伯の目は、真剣に歩を捉えている。

「先生？」

「……おまえは俺にとって、特別な生徒だよ。ずっと、気にかけてた……」

今までを振り返り、佐伯が言う。改めて考えると、歩のことが気になる存在だったのは事実である。友達の少ない歩をどうにかしたいと思っていたのも、特別な存在だからといえるのかもしれない。

しかし、無意識に歩への気持ちをかき消そうとしている自分がいる。だがそれは無理なことだった。歩の気持ちが、佐伯に痛いほど突き刺さる。

「せ、先生。今だけ抱きしめて……本当に私を愛してるなら、今だけ先生と生徒の関係なんてやめてよ。ここには私たちがしかないんだよ？ お願いだから……」

少し震えながら、顔を赤らめて歩が言う。佐伯はそんな歩を、しっかりと抱きしめた。

歩は今までになく積極的で、佐伯は自分の気持ちに気づいた瞬間だった。

二人は長い間、互いの温もりを確かめ合うようにしながら、何度も何度もキスを重ねる。もう、互いのことしか考えられなかった。

しばらくして――。

「……もうこんな時間だ。そろそろ帰らないとな」

抱きしめる手を緩めて、佐伯が言った。

「まだ平気！」

「でも、そろそろおまえのクラスの打ち上げも、終わる頃なんじゃないの？」

「……でも」

「駄目だよ。お母さんに心配かけちゃ」

「……過保護なのよ。異常なくらい」

溜息をつく歩の頭を撫で、佐伯が苦笑する。

「一人娘だもんな。駅まで送るよ」

「平気。タクシー代、持たされてるから」

「へえ。お嬢様じゃん」

「やめてよ……」

歩はもう一度、佐伯に抱きつく。

「……先生。本当に私のこと、好き？」

「ああ……好きだよ」

ためらいもあつたが、今は二人にとって幸せな時間であることは間違いない。

歩はすっかり安心して、佐伯に微笑みかける。

「じゃあ、一つだけわがまま聞いてくれる？」

「なに？」

「私、十二月が誕生日なの。だからその時……何かしてくれる？」

「いいよ。何日なんだ？」

佐伯も笑うと、軽く答える。

「二十四日」

「クリスマスイブじゃん。学校も休みだな」

「うん。でもその日は家でパーティーするから、会えないと思うけど……」

「じゃあ、違う日に会おうか。ご馳走作ってやるよ」

「本当？」

「ああ、本当」

「嬉しい！」

歩は、本当に嬉しそうに喜んだ。

「よし。じゃあ約束だ。今日はもう帰ろう」

「うん……」

二人は名残惜しそうに、もう一度キスをする、歩は佐伯のマンションの近くから、タクシーに乗りこんで帰っていった。

今日のことは、二人にとって、まるで夢のような時間であった。

13、秘密の関係

次の日から、二人にとって今まで通り、変化のない生活が始まったが、心のどこかで繋がっていると信じ、二人は生きていた。

十二月。数学準備室に、歩がやってきた。

「歩」

「あの、集めたプリント持ってきました」

「ありがとうございます。古屋は？」

「少ないから、一人で持ってきたの」

「そうか。ご苦労さん」

あまりに淡々としている佐伯に、歩は不安になった。

あの文化祭の日から、これといって二人で会うような時間もない。こうして時々、この数学準備室で会話を交わす程度で、キスさえ交わしていない。歩にとっては、本当に夢のように思えてしまう。

「……」

「……どうした？」

歩は熱い瞳で佐伯を見つめた。佐伯はそんな歩の想いを知りながら、苦笑する。

「そんな顔すんなよ。学校じゃ我慢しなさい」

佐伯が歩の鼻をつまんで言った。

「そんなこと言ったって、学校以外じゃ会わないじゃない……」

「まあな……」

この時、佐伯は歩と両思いになったからこそ、慎重な態度を取っていた。だが歩には、まだ佐伯の苦悩が本当にはわかっていない。

「……失礼しました」

歩は少し怒って、背を向けた。

「待てよ。おまえ、スキー教室には行くのか？」

突然、佐伯がそう尋ねた。話題を変えられ、歩は我に返って首を

振る。

「え？ うっん……」

「そうか」

「スキー教室って、冬休みの自由参加のイベントでしょう？」
歩が言う。冬休みに学校ぐるみで行くスキー教室があるが、参加は自由である。

「ああ。冬休み入ってすぐに一泊だけど、俺も行かなきゃならなくてさ。そうか、おまえは来ないのか」

「行きたいけど、お母さんが許してくれないの。いいなあ。北海道まで行くなんで、本格的なのに」

「まあ、仕方ないよ」

「嫌だ。先生が行くなら行きたいよ！」

「そんなこと言っただって、無理なんだろう？」

「そうだけど……」

「……じゃあ、いつか二人で行けたらいいな」
あまりに落ちこむ歩を見て、佐伯がそう言う。歩は驚きながらも目を輝かせた。

「ほ、本当に？」

「ああ。いつになるかは約束出来ないけど。いつか必ず二人で行こう、北海道」

「うん、嬉しい！ 約束だよ」

「ああ」

二人は指切りをした。その時、チャイムが鳴る。

「予鈴だ。行かなくちゃ……」

歩はそう言っ、小さな溜息をつく。佐伯も立ち上がると、微笑みながら歩を見つめる。

「歩。終業式の日、少し時間取れるか？」

「え？」

「約束したろ？ 誕生祝い」

「うん、大丈夫！ みんなで会って言えば、何時だって……」

「じゃあ、空けとけよ」

「うん。じゃあ、失礼します！」

歩は嬉しそうに出ていった。そんな歩に、佐伯の心も軽くなるのだった。

終業式の日。

「あ、ユタちゃん」

数人の女生徒が、佐伯に駆け寄る。

「冬休み、会えないの寂しいよ」

「なに言っただ。おまえら、スキー教室来るんだろう？ もう二日会えるじゃん」

廊下で立ち止まり、佐伯が返事をする。

「直々に手解きしてくれる？ スキー」

「手解きするのは、向こうのインストラクターだよ」

「なによ、つまんない」

「俺だって、冬休みになつてまで、おまえらのお守りは嫌だよ」

「ひっどーい」

「ハハハハ」

そんな会話をしているところに、歩が通りかかった。しかし、歩は佐伯と目を合わそうとはせず、去っていく。それは、今日会う約束をしているはずだが、佐伯が一向に歩と連絡を取らなかったことが原因だった。

放課後。歩は数学準備室を訪れた。自分から行動しなければ、佐伯とは会えないと思ったからだ。しかし部屋には鍵がかかっており、中に人影はない。職員室にも佐伯の姿はないので、歩は諦めて昇降口へと向かった。

その時、下駄箱にある靴の中に、一枚のメモ用紙が入っていることに気がついた。

『家で待ってます。Y』

歩はメモを握り締めると、急いで佐伯の家へと向かっていった。

佐伯のマンションで、歩は息を整え、呼び鈴を鳴らした。すると中から佐伯の顔が覗く。

「先生……」

歩は気を緩めて涙を流し、佐伯に抱きついた。

「いい連絡手段が見つからなくて、悪かったな」

「会えないかと思った……」

「ほら、泣くのはこれからだ。入れよ」

歩は中へ通されると、部屋のテーブルには、豪華な料理が並んでいる。

「……これ」

「いくつか買ってきたものもあるけど、一応手作りだよ」

それを見て、歩の目からまた涙が溢れ出す。

「また泣く」

「だって……だって嬉しいんだもん」

「あんまり時間はないんだろう？ 食べよう」

「うん」

二人は食事を始めた。

しばらくして、一通り食事を終えると、佐伯は歩に小さな箱を差し出す。

「はい、プレゼント。安物だけど……誕生日、おめでとう」

「ありがとう……」

感無量で、歩が小さな箱を開けると、中には銀のイルカのネックレスが入っている。

「かわいい。綺麗……」

「ネックレスなら、してるやついっぱいいるし、目立たないだろうと思って」

佐伯はそう言って、歩の首につけてやる。歩は涙ぐむ目を擦り、佐伯を見つめた。

「ありがとう。嬉しい。本当に嬉しい……」

「そんなに喜ばれるなら、やり甲斐があるな」

「ありがとう、先生」

「ああ」

歩は首に下がったネックレスを見つめ、佐伯に寄りかかった。佐伯は静かに歩の肩を抱くと、そのまま二人は吸い寄せられるように抱き合い、キスをした。

「先生。もう離れたくないよ……」

「歩……」

二人はそのまま、互いにすべてを委ね、すべての立場を捨てていた。もう離れない。誰にも止められなかった。

しばらくして、二人は安らぎの時間にいた。

「俺、教師として自信なくすな……」

歩を抱きしめながら、佐伯は少し後悔してそう言った。

「どうして？ 私はこんなに幸せなのに……」

そう言う歩は、佐伯の腕の中で、幸せそうに微笑んでいる。そんな歩に安らぎを感じながら、佐伯も微笑んだ。

「……ちよつとね」

佐伯は正直にそう言って、歩の髪を撫でる。覚悟は決めたが、今後はもつと慎重にならねばならない。

難しい顔の佐伯に、歩の顔が曇る。

「先生は悪くないよ。私が……」

歩の言葉に、佐伯は首を振って微笑む。

「選んだのは俺だから……おまえは悪くない。俺は大丈夫だよ」

「先生……」

「……でもこれからは、二人の時は先生じゃなくて、名前で呼んでくれるか？ ちよつと……罪悪感に駆られる」

佐伯が、少し照れながら言った。

「……豊」

「ああ……」

歩は微笑みながら、佐伯の腕に顔をうずめる。

「私、何も怖くないよ」

「そうか？ 俺は怖いよ」

「どうして？」

「でも、おまえを傷つけないように頑張るって、決めたから……」
二人は抱き合った。

「うん……でも、しばらく会えないのは寂しいな」

「俺はいつでも空いてるよ。年が明けたら、初詣に行こうか」
「本当？」

「あ、でも出られないか」

厳しい両親と聞いているため、察して佐伯が言った。しかし、歩は必死に首を振る。

「ううん。なんとかする」

「大丈夫か？」

「うん」

「じゃあ……元旦の昼に、神社で」

「わかった」

「……そろそろ行かないとな」

佐伯の言葉に、歩が時計を見つめる。もう帰らなければならない時間だ。

「うん……北海道、気をつけてね」

「ああ。土産買ってくるよ」

「うん。今日はありがとう。わざわざ誕生祝いしてくれて」

「いいんだよ」

「ゆ、豊……来年の誕生日の催促してもいい？」

突然、歩がそう言った。その言葉に、佐伯が笑う。

「いいけど、気が早いな」

「だって……あのね、今度は指輪がいいな」

「指輪？」

「うん。婚約指輪みたいに、ずっとつけるの。でも大っぴらには出来ないから、今年くれたネックレスに通すの。決めたの」

嬉しそうにそう言う歩は、いつもの引っこみ思案な少女ではない。佐伯も頷いた。

「わかったよ。じゃあ、来年は指輪な」

「うん！」

二人は、恋人と呼べるように通じ合っていた。

歩は名残惜しそうに帰っていくと、佐伯は一人きりになって、いろいろなことを考えた。だが心に決めた以上、歩を守ろうと思った。

14、ささやかなひととき

元旦。

佐伯は、とある神社の前に座りこんでいた。時間になっても現れない歩に、何かあったのかと心配でならない。

しばらくすると歩の姿が見えて、佐伯は立ち上がった。しかし歩は一人ではなく、母親と思しき女性と一緒にある。

「先生……」

佐伯を見て、歩が言った。

「先生？ 歩、この方は先生なの？」

母親が言った。

「う、うん。数学の佐伯先生だよ……」

歩が少し怯えるように言った。高校近くの大きな神社のため、教師が居てもおかしくない。

少しためらいつつも、思い切って佐伯は口を開く。どういう状況で、歩が母親と来たのかはわからないが、決して二人の仲がバレたのではないと、祈る気持ちだ。

「……後藤さんのお母様ですか？ 私、帝都学園の数学教師をしております、佐伯と申します」

「どうも、娘がお世話になっております……」

佐伯が教師なのかと、未だ半信半疑な様子の歩の母親が、佐伯を舐め回すように見て応える。

母親の様子を見て、二人の仲がバレたわけではないと、佐伯は確信した。

「どうも……後藤、あけましておめでとう」

佐伯が今度は歩に言う。歩も頷き、口を開く。

「お、おめでとうございます……」

「お二人で初詣ですか。私もこれからなんですよ」

まだ様子を伺うように、佐伯が会話を続ける。

「いえ。この子が、お友達と初詣なんて行くと云うんですが、今まであまり友達の多い方ではなかったたので、本当かどうか確かめたくて……まさか、悪い友達などとは……」

母親が、心配そうに言った。佐伯は頷くと、歩に顔を覗く。

「後藤。誰と初詣に行くんだ？」

「ふ、古屋さんと……」

「ああ、古屋か。古屋ならさつき会ったよ。誰かと待ち合わせしていたらしいけれど、後藤のことだったのか。時間に来なかったから先に帰るって言うてたと思ったけど……」

佐伯と歩は、互いに探りながら嘘をついた。それを信じたように、母親の顔がみるみる変わっていくのがわかる。

「まあ、先生。それは本当ですか？ 嫌だわ。私、てつきり悪い友達でも出来たんだと……歩、すぐに謝りに行きましょう。お母さんも行くから」

「い、いいよ。一人で行くから」

「そんなわけにはいかないわ。お母さんのせいで……」

「お母さん。私、もう高校生だよ。謝りに行くのもお母さんと一緒だなんて、恥ずかしいよ」

「なに言ってるの。お母さんは、歩のためを思ってる……」

歩と母親の口喧嘩が始まったので、佐伯は一歩前に出た。

「お母様。自立しようとしている子供を押えつけるのは、成長の妨げになり、将来にとっても危険なことです。確かに高校生の時期は、危険なことたくさんありますが、後藤さんはしっかりしていますし、信じてあげてはどうですか？ 確かに、高校生にもなって親同伴というのは、同級生にとってもよろしくないでしょう」

宥めるように、佐伯が言う。母親は動揺を続けているようで、目を泳がせている。

「そ、そうかしら。私、この子が心配で……」

「うちの学校の生徒は、みんな良い子ばかりですし、事件もありません。後藤さんも同級生と仲よくやっているようですし、なにより

しっかりしたお子さんですよ」

「わかりました……じゃあ、歩。お母さんは先に帰るわ。でも、くれぐれもお友達には謝っておくのよ」

佐伯の言葉に納得して、母親がそう言った。歩は笑顔で頷いている。

「うん、わかってる。このまま謝りに行って、少し遊んで帰るから……」

「遅くならないようにね。どうもすみませんでした、先生……」

母親は、何度も心配そうに振り返りながらも、去っていった。二人きりになった佐伯と歩は、小さく笑う。

「おかしいの。豊ってば、嘘つきね」

「内心ビクビクしてたけどな。でも、過保護なのは相当らしいな……」

歩の母親の様子を思い出し、佐伯が言った。

「そうでしょ。もう、本当に困る……」

「でも子供を心配する気持ちも分かるよ。さあ、お参りして、ここから離れよう」

「うん」

二人は初詣に行くと、人目を避けるように、海へと出かけた。二人はプライベートで会う機会などほとんどなく、たまに会うこういう時間を、とても大切にしていた。

二月。数学準備室に、歩と同じ係の古屋がやってきた。

「先生。何か仕事はありますか？」

「ああ。今日はプリントがたくさんある」

そう言って、佐伯は机に積まれたプリントを指差した。

「わあ、先生。それ全部チョコですか？」

古屋が机の横に置かれた紙袋に気づき、指摘する。中にはラッピングされた箱や袋がたくさん入っていた。今日はバレンタインデー

である。

「まあね……」

「モテモテですね、なんて言いながら、私もこれ」

古屋が箱を差し出す。佐伯は素直にそれを受け取った。今日ばかりは、どの男性教師も結構な数をもらう。

「サンキュー、古屋」

「あ、あの。私も……」

今度は歩が、恥ずかしそうに言った。

「後藤さんて、照れ屋よね。私、いない方がいい？」

「え、ううん。別に……」

「いいのよ。じゃあ私、先に行ってるから」

サバサバした性格の古屋は、プリントを半分持つと、気を利かせて佐伯と歩を残して先に出ていった。

残された歩は、佐伯に袋を差し出す。

「これ……」

「ありがとう。なんかデカイな」

袋の大きさに、佐伯が中身を探る。

「チョコと、クッション作ってみたの……」

「へえ、手作り？　ありがとう」

「……モテモテですね、先生」

歩が皮肉っぽく言う。

「まあね……こればかりは仕方がない。受け取らないわけにもいかないし。俺、チョコ好きだし」

「全部食べるの？」

「まさか。腹壊しちゃうよ。でも、これはちゃんといたくよ」

佐伯が、歩の袋を見せて言う。

「うん」

「じゃあ、先行っててくれる？」

「はい」

歩はプリントを持って、古屋を追いかけた。

一人になった佐伯は、そつと歩からのプレゼントを開けてみた。中にはイニシャル入りの二つのクッションが入っている。また、チョコレート箱の中には一枚のカードが入っていた。

『朝、家へ行つてもいいですか？』

意味深なそのカードに、佐伯は驚いた。しかし、その後二人きりになる機会はなく、結局その真意を確かめることは出来なかった。

佐伯は歩のチョコを一口頬張ると、歩のことを考えていた。

次の日の早朝。佐伯の部屋の呼び鈴が鳴った。

「ん……？」

寝起きの佐伯が、寝ぼけたまま時計を見つめる。まだ、早朝四時を回った頃だ。

「誰だよ、こんな時間に……イタズラか？」

佐伯はそう言つて、もう一度布団を被る。しかし、すぐにハツとして起き上がった。

「まさか！」

佐伯は、急いで玄関へ駆けつけると、ドアを開けた。するとそこには、歩の姿がある。

「歩……」

「来ちゃった」

そう言う歩は、嬉しそうな顔をしている。佐伯は未だ寝ぼけた頭を叩きながら、歩を見つめる。

「……どうしたんだ？ あ、まあ入れよ」

佐伯は歩を中に入れた。歩は何も言わず、ソファに座る。

「どうした？ こんなことして、家には……」

「大丈夫。まだ寝てるはずだから。なんか最近、会えないのが我慢出来なくて……」

佐伯の質問に、歩が答える。

「豊と会えないのが寂しいの。顔を見てる分、余計に……学校じゃ、ほとんど話も出来ないし……」

歩の言葉に、佐伯は小さく息を吐いた。

「だからって、家からここまで近くはないんだし、第一危険だよ」
「……ごめんなさい……」

佐伯の予想外の言葉に、歩は肩を落として俯いた。佐伯は歩の顔を覗きこむ。

「歩？」

「……もっと、喜んでくれるかと思った……」

歩の言葉に、佐伯は歩の髪を撫でる。

「喜んでないわけじゃないよ。でも気持ちはわかるけど、無茶するなって言ってるんだよ」

佐伯はそう言って、歩を抱きしめる。歩を抱きしめるのも久しぶりで、佐伯は内心嬉しかった。二人はそっとキスを交わす。

「歩。そういうことなら、また今度会おう。今度は俺が迎えに行くよ」

「本当？」

「ああ。でも今日はこれで帰った方がいい。もうすぐテストもあるんだし」

「じゃあ、テストが終わったら……こうして会える？」

「ああ、わかった。さあ行こう。送るよ」

「うん……」

佐伯は、歩の無茶な行動に驚きつつも、そこまで想ってくれる歩が、愛しくてたまらなかった。

それから二人は、月に二、三回、秘密のデートをするようになった。歩の家の近くに、佐伯はバイクで待ち、歩は両親が完全に寝たのを見計らって、部屋の窓から外へと抜け出していた。その回数は次第に増え、春になる頃には、週に二、三回のペースにまでなっていた。

15、運命のその日

歩、二年生の春。

「豊。お誕生日おめでとう」

歩がそう言いながら、ラッピングされた包みを渡す。今日は佐伯の誕生日である。

「ありがとう」

佐伯が包みを開けると、中にはパスケースが入っていた。

「パスケース？」

「うん」

「本革じゃん。高かったんじゃないのか？」

佐伯は、上等なパスケースを見て尋ねる。

「ちよつとね……でも大丈夫。私、おこずかい結構あるんだ。それに豊だって、私の誕生日に、高そうなネックレスくれたでしょう？料理も作ってくれたし。本当は私も、料理作りたかったんだけど、それはさすがに家じゃ無理だから……」

「ありがとう。大事にするよ」

佐伯は優しく微笑んで言った。

「うん。それから、これ……」

続けて、歩が恥ずかしそうに差し出したのは、一枚の写真だった。そこには、春の遠足で撮られた、歩と古屋の姿がある。その向こうにも数人がカメラ目線でポーズをとっており、仲の良さそうな集合写真となっている。

「私一人の写真じゃ、なにかと不便かと思って……」

歩の意図することを理解すると、佐伯は歩の頭に手を置き、写真を受け取った。歩は嬉しそうに微笑んでいる。

「ありがとう。じゃあ、早速入れて使うよ」

「うん」

「じゃあ、俺からはこれ」

「え？」

「ゴトーの日のプレゼント」

「うふふ。ありがとう」

そう言つて、佐伯が差し出した物は、写真立てだった。

「なんか俺たち、趣味が合うよな」

「うん。私も大事に使っね」

「ああ」

二人は、ささやかな誕生日パーティーをしたのだった。

七月。

「暑くなってきたね」

今日も早朝、佐伯の部屋にやってきた歩は、佐伯の腕の中でそう言つた。

「ああ。もう本格的に夏だからな」

「夏休みになったら、もっと会えるかな？」

「そうだなあ……」

「楽しみ」

「ああ」

「うーん……最近、離れられなくて寝不足みたい」

歩がそう言つたので、佐伯は歩の頬に触れ、見つめる。

「大丈夫か？」

「うん、平気。寝不足になったって、この時間は捨てられないよ」

「……歩」

佐伯は歩の頭を撫でる。これがいけないことだとわかっていても、歩とは離れられなかった。しかし毎日同じ後悔を抱いていたのは、事実である。

「今、何時？」

佐伯が尋ねる。

「五時。ああ、もうこんな時間か。嫌になっちゃっ」

「仕方がない。行くか」

「うん……」

歩は素直に返事をするものの、浮かない顔をしている。佐伯はそんな歩の頬を軽く引つ張った。

「そんな顔しない。後で会えるよ」

「うん……」

佐伯は、しぶる歩をバイクに乗せ、歩の家へと向かっていった。

佐伯はいつも歩の家の前までは行かず、近くの公園に送っていた。それは、バイクの音で、歩の家族や近所の人を起こさせないように、考えてのことである。

「今日もありがとう……」

歩は名残惜しそうに言った。

「ああ。じゃあ、気をつけて帰れよ」

「すぐそこだけだね」

「すぐそこでもだよ。ごめんな、家まで送ればいいんだけど……」

「ううん。いいの」

「歩！」

その声に二人は硬直した。振り向くと、そこには歩の母親がいる。

「お、母さん……！」

歩はあまりに突然の出来事に、後退りする。

「あなたは……佐伯先生！」

母親は、佐伯の顔を見て言った。もはや、言い逃れなど出来る状況ではない。

「どこへ行ったのかと思えば、あなたはいつもこんなことをしていたの？ 夜中に勝手に抜け出して。それも、学校の先生なんかと……歩、なんとか言いなさい！」

歩の母親が、震えながら怒鳴り散らした。

「ぐ、ごめんなさい……」

歩には謝ることしか出来なかった。佐伯も何も言えない。

「あなたはどいつももりなんですか。教師のくせに、夜中に娘を

連れ出して！ たまたま私が様子を見に行かなければ、一生バレないとも思っていたのですか！」

母親の矛先は、佐伯に向かう。佐伯は深々と頭を下げた。

「申し訳ありません……！」

「どうしたのか、心配でたまらなかったんですよ。ずっと捜し回って……さあ歩、帰りましょう。佐伯先生、このことは当然、学校に言いますからね」

「やめて、お母さん！」

それを聞いて、突然、歩が母親に掴みかかる。佐伯は歩を止めようと、すぐに手を伸ばす。しかし、歩は母親の腕を掴みながら、必死な目で訴えている。

「豊は何も悪くない！ 悪いのは私なの。私が先生を好きになったのが悪いの！ 先生は私を拒んだよ。でも、私が……」

「歩」

佐伯が歩を止めようと、歩の肩に触れる。その時、母親が佐伯の手を振り払った。

「うちの子に触らないで！ 豊ですって？ あなたは、うちの子を……うちの子を！」

歩の母親は涙目で、怒りに震えている。

「お母さん、やめて！ 豊、早く帰って」

すぐにでも手が出そうな母親を止め、歩が必死になって叫ぶ。そんな歩を見て、母親は冷静さを取り戻そうと、歩を連れて背を向けた。

「……歩、帰るわよ。佐伯先生、覚悟しておいてください。うちの子を傷ものにした罪は、重いですからね！」

母親はすごい剣幕で歩の手を掴み、その場を去っていく。

「嫌、離して！ 私たち、何も悪いことしてない。離して、お母さん。豊……豊！」

歩の悲痛な叫びが、早朝の街に響いた。佐伯はしばらく、その場を動けなかった。

数時間後。佐伯の家の電話が鳴った。学校からである。佐伯はしばらくの間、謹慎を言い渡され、放課後の緊急会議に出席するよう言われた。

歩も謹慎処分が出て、母親の執拗な監視下に置かれたのであった。

夕方。佐伯は学校に向いた。すれ違う生徒の態度から、もう学校中に知れ渡っているのだと悟る。会議室には、歩の両親もいた。

「どういことですか、佐伯先生。あなたは本当に、こちらの後藤さんの娘さんと、交際関係にあったのですか？」

そんな質問に佐伯は深呼吸をした。周りにいる教師たちも、いつもと違う冷やかな態度でこちらを睨みつけている。

「……はい。本当です」

佐伯は言い逃れなど少しもせず、はつきりとそう言った。

「ほ、本当ですって、あなたはご自分の立場をわかっているのですか？ 相手は生徒ですよ！」

「はい……本当のことです。弁解の余地もなく、言い逃れは致しません。私は……後藤さんと交際していました。教師と生徒という立場は重々わかっていた上でしたが、互いに真剣で……」

「先生方、この男を直ちにクビにしてください！ もう、この人の顔なんて見たくない。うちの歩を……歩の人生はめちゃくちゃです！」

佐伯の言葉を遮って、歩の母親が叫んだ。佐伯はもう一度、頭を下げる。

「本当に申し訳ありません。どんな処分も覚悟しております」

「では、教職を辞めても悔いはないとおっしゃるんですね？」

教頭が佐伯に尋ねる。

「はい。ただ……」

「ただ、なんですか？」

「後藤さんの処分だけは、考えていただきたいのです」

佐伯の言葉に、一同はざわついた。そんな中で教頭が口を開く。

「処分は免れないでしょう。朝の口論を、近所に住む生徒が聞いていたということで、すでに学校中の噂になってるんですよ？ 出てきたところで、後藤歩本人だって……」

「噂は消えるものです。謹慎処分は免れないかもしれませんが、彼女の普段の素行に問題はないはずです。未成年の生徒ですし、退学だけはどうか考えてください。その代わり、私の処分がどうなっても構いません」

佐伯はまっすぐに一同を見つめて、そう言った。

「かつこいいことを言って、あの子のレッテルは消えないのよ！」

母親は尚も興奮して叫ぶ。父親はそんな母親を宥めながらも、佐伯を冷たく見つめていた。

「どう言われようが、私に弁解の余地はありません……退職願は書いてきました。ですから、どうか生徒の在学だけは保障してください。大きな過ちとはわかっておりますが、彼女には将来があるのも事実です。お願いします！」

佐伯はもう一度そう言くと、深々と頭を下げた。

その日のうちに、佐伯の退職が決まった。しかし、佐伯と後藤夫妻の申し出により、歩だけは退学処分とならずにすんだのだった。

会議が終わると、歩の両親が佐伯に歩み寄ってきた。そして父親が、無言で佐伯を殴る。

「退学にならなかったことだけは救いだが、私はおまえを一生許さない！ ここで約束してくれ。もう二度と我々の前に、歩の前に現れないと。この街にも来るな！」

佐伯の胸倉を掴みながら、歩の父親が言った。佐伯は目を伏せると、やがて歩の父親を見つめる。

「……わかりました。でももう一度だけ、彼女と話をさせていただけないでしょうか？」

そう約束せざるを得なかったが、佐伯は最後にそう申し出た。しかし、それを両親が受け入れられるはずもない。

「なにを馬鹿な……そんなことを許すわけがないでしょう？」

「しかし、このままでは、私も歩さんも前へ進めないと思います。歩さんには、私からきちんと話をしたいんです」

「何の話ですか？ もう二度と、歩には会わせません。歩には我々があります。我々がきちんと言い聞かせますから結構です。それよりいいですね？ もう二度と、歩には会わないでください！」

歩の両親はそう言つと、学校を後にした。

佐伯はその日のうちに学校の荷物をまとめると、家へと帰つていった。他の生徒にも話が出来ない辛さは、どうしようもなかった。

その後、佐伯は地方の学校に就職することが出来、夏休み明けに引越したのだった。

16、静香の願い

現在。

佐伯は、新しく赴任した学校の数学準備室にいた。そこは佐伯以外に使用する教師はほとんどいない。

佐伯は物思いに耽りながら、煙草をふかし続ける。そこに、静香がやってきた。

「先生」

「おう……なんだ、静香か」

「ノックしたんだけど」

「そうか。悪い……」

静香は吸殻が山盛りになった灰皿を見つめると、一冊の本を差し出した。

「これ、さっきの授業で忘れてたよ」

「ああ、そうか。ありがとう」

そう言う佐伯はいつものように微笑むものの、生気のない顔をしている。

「大丈夫？ 顔色がよくないみたいだけど」

「そう？ 大丈夫だよ」

「だいたいこの部屋、空気悪いよ。煙草吸い過ぎ。灰皿いっぱいじゃない」

静香が、灰皿に手を触れる。

「いいよ。自分でやるから……」

佐伯がそう言って立ち上がると、その拍子にズボンのポケットからパスケースが落ちた。いつか静香が拾ったものと同じだ。静香はすぐにパスケースを拾い上げる。

「大事な物なのに、よく落とすね。駄目じゃん」

「ああ……」

佐伯の態度は、明らかにいつもと違った。静香のことはまるで見

ておらず、上の空といった様子だ。

そんな佐伯を心配して、静香が顔を覗きこむ。

「何かあったの？」

「え？」

「だから……」

「ああ、悪い……ちょっと考え事してて。一人にしてくれるかな……」

「あ、うん……」

静香はいつもと違う佐伯に、少し戸惑いながらも、数学準備室を出ていった。

残された佐伯は煙草の火を消すと、頭を抱えた。

（もう会えない……本当に、もう……）

今の佐伯には、歩のことしか考えられなかった。別れた辛さはあるものの、歩の将来を思えば、やはり選んだ道は正しいのだと、思わずにはいられない。それでもやつぱり、辛かった。

数日後。文化祭当日の放課後、佐伯はやるべきことを終えると、職員室を出ていった。いくつかの教室を横切った時、ざわついている教室があつたので、顔を覗かせる。

「どうした？」

「あ、豊ちゃん。静香が……」

床には静香が倒れている。佐伯は駆け寄った。

「どうした、静香。大丈夫か？」

「うん……」

静香はゆっくりと起き上がり、返事をする。

「机に乗って文化祭の片付けをしていたら、急に静香が机から落ちて……」

近くにいた真子が説明したので、佐伯は頷く。

「誰か、保健の先生呼んできて」

「大丈夫。ちょっと頭打っただけで……」

静香は痛がるようにしているものの、しっかりとそう言う。そんな静香を支えながら、佐伯は静香の額に手を触れた。

「静香。おまえ、熱があるんじゃないか？」

「え、嘘……」

「馬鹿だな。これだけあるのに気がつかなかったのか？ もたれていいから、じっとしてろ。ほら、野次馬もいらねえ」

佐伯は静香を支えながら振り向き、周りの生徒を遠ざける。そこに、保健の先生がやってきた。

「どうしたんです？」

「熱でふらついて、机から落ちたみたいなんです。頭を打ったと言ってます」

佐伯が説明すると、保健の教師が静香に触れた。静香は顔を赤くして、明らかに熱が出ているように見える。

「コブが出来てるわね。特に心配ないと思うけれど、熱の方が心配だわ。どちらにしても、帰ったら病院に行ったほうがいいわ」

「はい……」

保健の先生の言葉に、静香は頷く。

「大丈夫？ 保護者の方、呼びましょうか？」

「大丈夫です……」

「あ、俺が送ります。家が近所ですから……」

佐伯が言った。

「そうですね？ じゃあお願いします。佐伯先生、バイク通勤でしたよね？ ゆっくりめに走ってあげてくださいね」

「ええ。ありがとうございます。静香、行くぞ。歩けるか？」

「うん……」

静香は周囲の羨望の眼差しを受けながら、佐伯とバイクで帰っていった。

静香の家。

「バイクだと早いね」

バイクから降りながら、静香が言う。

「まあな。一応、俺も挨拶するから」

そう言つと、佐伯は静香の家の呼び鈴を鳴らす。すると、中から静香の母親が出てきた。

「まあ、佐伯先生。静香がどうかしたんですか？」

「どうも。熱があるのでお送りしました。あと、文化祭の片付けを
していて、運悪く机の上から転落して、頭を打っているようです。
一応、保健の先生には見てもらいましたが、熱もあることですし、
病院へ連れて行ってあげてください」

「そうでしたか。わざわざすみません、先生」

「いいえ。では、お大事に」

佐伯は静香を送り届けると、自分の家へと帰っていった。

次の日。佐伯が家の前でバイクにまたがると、目の前の家から静香が出てきた。佐伯はヘルメットを取つて、静香に声をかける。

「おはよう」

「先生。おはようございます」

「具合は？」

「バツチリ」

「そうか。でも無理すんなよ」

静香は一晩休んですっかり元気になったようで、元のように笑っている。

「うん。ねえ、またバイクに乗せてよ」

「ダメ」

軽く言つた静香の申し出に、佐伯が笑つて拒否する。

「ケチ。でも先生。お礼に、誕生日パーティーに招待してあげる」

「誕生日パーティー？」

「大分先だけど、空けておいてよ。十二月二十四日」

「え？ おまえ、イブが誕生日なの？」

佐伯が驚いて尋ねる。忘れられないその日は、歩の誕生日でもあ

る。だが、そう思ったことをかき消して、佐伯は静香に笑いかける。
「そうよ。いいでしょう。唯一、自慢出来ることなの」

「なんだそりゃ。食事のご招待なら、近い日のがいいけどな」

「そう思ったけど、近い日なんて何もないもん」

「だからってイブの誘いにしちゃ、早過ぎるんじゃないか？ まだ九月だぞ」

「だってイブよ？ 先生、予定入れちゃいそうじゃない。ねえ、いいでしょう？ お願い、先生！」

必死な様子で、静香が言う。

「なんだよ。いやに積極的だな」

「だって……」

静香は友達から、自分の誕生日が歩と同じだと聞いていたため、不安でたまらなかった。誕生日には佐伯に会いたい、そして祝ってもらいたいと願う。

必死な目で見つめる静香に、佐伯は優しく微笑んだ。

「わかったよ。イブだな？ 忘れたって押しかけられそうだからな」

「本当？ 絶対だからね」

「ああ、わかったよ」

「プレゼントはいらないけど、今度勉強、見てよね」

「ハイハイ……じゃあな。先行くぞ」

佐伯はそう返事をする、バイクで走っていった。

静香は佐伯との約束に微笑むと、歩き出した。あれから佐伯と歩に何があつたのかは聞けなかったが、歩を見習って、少しは素直になろうと思っていた。

人あたりのよさもあって、佐伯の人気は静香の学校でもすごかった。静香にとっても、いつの間にか佐伯は特別な存在で、教師という枠組みを越えて、気になる存在となっていた。

「静香」

いつもの待ち合わせの場所には、真子が待っていた。

「おはよう、真子」

「おはよう。どう？ 具合は」

「うん。もうすっかり」

「さすが、静香」

二人は笑いながら、学校へと歩き出す。

「どうだった？ 豊ちゃんのバイクの乗り心地は。みんな羨んでたよ。豊ちゃんのバイクに乗るなんて、生徒の間じゃ夢に近いんだから」

それを聞いて、静香は少し照れ笑いをする。

「そっか。でも熱で朦朧としてて、あんまり覚えてないんだよね……」

「もつたいない。それより知ってた？ 豊ちゃん、彼女と別れたらしいよ」

「え！」

突然の真子の言葉に、静香は驚きの声を上げた。

「声大きいよ、静香」

「だって……なんで知ってたんの？」

「ほら、美紀の従兄弟が、先生が前にいた学校に通ってるって言うてたじゃない？ その子からの情報だって。ハッキリしたわけじゃないみたいだけど、その彼女だったって子、また登校拒否気味になってるらしいし、本格的に別れたって噂が流れてるみたい」

新しい噂話に、真子が目を輝かせて言う。しかし静香は、二人がどうなったのかは知らなかったが、軽々しくその話はしたくないと思った。

「そ、そんなのデマじゃないの？ ハッキリ聞いたわけじゃないんでしょ？」

「そうだけど……静香だって、豊ちゃんファンじゃないの？ 喜ばないの？」

予想外の静香の態度に、真子が首を傾げている。

「大変だったんだろうなって思ってた……」

「まあ、普段チャラチャラしてる分、豊ちゃんって、恋愛は真面目

「そっだよね。浮いた噂は他には聞かないし」

「うん……いつか私も、そういう恋してみたいな」

「静香ったら、なに言ってるのよ」

「だって……」

静香はいつの間に、佐伯のことはもちろん、歩にも憧れを抱いていた。佐伯を応援したい気持ちがあるながらも、佐伯の深い愛情が、自分だけに向けられればいいとも思う。静香の中で佐伯の存在は、確実に大きく膨らんでいた。

17、彼女の誕生日

十二月のとある日曜日。佐伯の家の呼び鈴が鳴った。

「はい……」

佐伯がドアを開けると、そこには静香と真子の姿がある。佐伯は苦々しく笑う。

「……どちらさま？」

「かわいいかわいい生徒です。お邪魔します！」

二人はそう言つと、どこかかと中へと入っていく。

「つたく、朝っぱらからなんなんだよ」

佐伯はまだ寝起きといった様子で、後から奥へと向かう。

「勉強教えてつて、前に約束したでしょう？」

静香が言つたので、佐伯は頭をかきながらソファに座る。

「そうだったけ？」

「そうだよ」

「でも、これって問題なんじゃねえの？」

「あら。先生は、もっと問題起こしたんじゃないの？」

冗談のつもりだったが、真子のその言葉に、静香は慌てた。

「そうでしたね……」

しかし、佐伯は気に止めた様子もなく、立ち上がつてお湯を沸かし始める。

「やだ。イニシャル入りのクッション？ 豊ちゃんつて、意外とかわいい趣味あるんだね」

歩のプレゼントの一つだが、それを知る由もなく、真子が抱きかかえて言う。

「まあな……あんまり触るなよ。それより、どこがわかんないって？」

佐伯がノートを覗きこんで言う。

「ここ全部。もう数学つて、全然駄目」

「まったく、しょうがねえな。おまえら授業中に寝てるから悪いんだよ」

「寝てないって」

「とにかく、こういうことはバレたらまずいんだよ。とつとと帰れ」「バレない、バレない。バレても二人きりじゃないし、生徒に慕われてる先生なんて、素敵じゃないですかー」

「おまえらなあ……」

元気の良い静香と真子に苦笑しながらも、佐伯はそのまま軽く勉強を見てやった。

「あ、もう昼だ。豊ちゃん、お昼は何？」

しばらくして、真子が言った。

「まだいる気かよ」

「当たり前でしょ。まだ全然わかんないもん」

「いいけど……夕方前には帰れよ」

「どこか出かけるの？」

時間を気にした様子の佐伯に、静香が尋ねる。

「ああ、ちよつとな」

「わかった。じゃあとりあえず、出前でも取るうよ」

静香と真子は、手慣れた様子でピザの出前を取り始めた。

夕方。結局、この時間まで居座っていた静香と真子を帰すと、佐伯はバイクに乗り、繁華街にあるデパートへと向かっていく。

「いらつしやいませ」

佐伯はデパート内にある宝石店へと入り、財布から予約の引換券を出した。

「頼んでた物、取りに来たんですけど……」

「ありがとうございます。少々お待ちくださいませ」

引換券を受け取って、店員は奥へと入っていく。その間、佐伯は何気なく、目の前のショーケースを見つめた。そこには、指輪やペンダントのトップ部分が飾られている。

「お待たせいたしました、佐伯様」

そこに、店員が戻ってきた。

「あ、はい……」

その場の雰囲気は少し照れながら、佐伯は店員が差し出す小箱をじつと見つめる。

店員が見せたのは、シンプルな指輪だが、指輪には文字が掘りこまれている。“to AYUMI”……。

佐伯は数日前にここを訪れ、この指輪を選んで文字を掘ってもらっていたのだった。もう歩には会わないと決めつつも、この指輪を買わずにはいられなかった。それは去年、二人が幸せだった頃に交わした約束のためである。

「来年の誕生日には、指輪がほしい。婚約指輪みたいに、肌身離さず持つてるの」

そう言った、歩の笑顔が浮かぶ。

またどこかで会えるかもしれない。会えなくても約束だからと、佐伯はこの指輪を買ったのである。

数日後。学校が冬休みに入った早朝、佐伯はバイクに乗ると、静かに街を消えていった。

十二月二十四日、クリスマスイブの昼。佐伯は東京にある、とある住宅街に辿り着いた。そこには、歩の家がある。

もう二度とこの街には戻らないと誓った佐伯だったが、今日だけは別だった。なによりも、気持ちの高ぶりが抑えられず、佐伯は夢遊病者のようにこの場所へ来ていた。

閑静な住宅街は、あまり人通りもない。佐伯は人目を気にしながらも、歩の家を見上げた。何をしようというのでもなかったが、せめてこの日だけは近くにいたいと思う。ジャンパーのポケットには、歩へのプレゼントである指輪が無造作にねじこまれて入っているものの、それを渡せるわけでもない。

「……歩。誕生日おめでとう」

しばらくして、佐伯は何をするでもなく、その場を去っていった。切なさで胸が張り裂けそうだったが、身を切るような冷たい風が、思考を正常に保とうとしている。

佐伯はそのまま、バイクを走らせた。

佐伯が自宅に戻ったのは、夕方のことだった。静香との約束の間が迫っており、佐伯はすぐに静香の家を訪れる。

「あ、豊ちゃんだ」

静香の家に入るなり声をかけたのは、真子と広太である。

「おまえら、もう来てたのか」

いつもの笑顔で、佐伯が笑う。

「もう時間だもん」

「ギリギリセーフか。お邪魔します」

「豊ちゃん来たよ。ほら、今日の主役！」

リビングに入ると、静香が嬉しそうに駆け寄る。

「よかった。さっき真子と二人で家に行ったんだけど、いなかったみたいだから心配してたんだ」

「ああ。ちよつと出かけてて……約束は守るよ。誕生日おめでとう。これ、一応プレゼント」

佐伯はそう言うのと、ラッピングされた袋を差し出した。静香は嬉しそうに受け取った。

「ありがとう。よかったのに」

早速包みを開けると、中にはキャラクターものの文具が入っている。

「かわいい！」

「でも、夢ないな」

広太が口を挟むものの、何をもらっても静香は嬉しかった。

「一応、教師なので。他に思いつかなくてさ……」
照れながら言う佐伯に、静香は首を振る。

「うつん、ありがとう。早速、授業で使うね。今日はお父さんが仕

事でいないんだ。弟も遊びに行ってるし、本当に内輪っただけど、気を使わなくていいでしょ？ 料理はいつも通り、お母さんの手作りだよ」

静香の誕生日パーティーは、三時間ほど続いた。ゲームなどもやり、一同は楽しんでいた。

十時過ぎ。未成年の真子と広太を先に帰して、佐伯は静香の家の後片付けを手伝い、静香の家を出ていく。

「先生。外まで送るよ」

静香の言葉に頷いて、二人は外へと出ていった。

「寒いな……」

「今日はありがとう、先生」

静香がそう言ったので、佐伯は笑って応えると、そのまま静香の家の門を目指す。

「こちらこそ。俺も結構、楽しんで……」

その時、二人の目に、佐伯の家の前に佇む歩の姿が映った。

18、別れ

「……あ……ゆみ……」

佐伯は信じられない光景に驚いた。さつき真子たちを見送りに外へ出た時は、いなかったはずだ。だが、そこには間違いなく歩の姿がある。

駆け寄りたい気持ちを抑え、佐伯は道路を隔てた静香の家の前から、歩を見つめて口を開く。

「歩。どうしてここにいるんだ？」

佐伯が少し強い口調でそう言った。歩は悲しそうな目で、佐伯を見つめている。

「あの……どうしても、会いたくて……」

「……先生。私、帰るね……」

静香は空気を察してそう言うのと、背を向けようとする。そんな静香に、佐伯は歩を見つめたまま、口を開いた。

「いや、居てくれないか？」

「え、でも……」

佐伯はそのまま、ゆっくりと歩に近づいていく。

「……またお母さんに黙って来たのか？ 約束しただろう。しばらく会えないけど、頑張ろうって」

佐伯の強い口調に、歩はゆっくりと口を開いた。

「ゆ、豊……私、確かめに来たの。豊、私に黙ってることあるよね……？」

歩のその言葉に、佐伯は口を閉ざした。歩もまた、ゆっくりと佐伯に近づく。

「私、あの時、聞いてたんだよ？ 豊がお母さんと話してるの。もう会わないって……私と会うつつもりはないって。迷惑だって……」
歩が、凍える唇でそう言った。

「……そうか。聞いてたのか……」

佐伯は、静かにそう言った。

もちろんあの時の言葉は、歩の母親に言わされたことであつた。しかしそれは、佐伯の本心ではなかったものの、理想であつたかもしれない。

歩は、佐伯と歩の母親が、事前に話し合つていたこととは知る由もなく、ただ別れ際の言葉が、佐伯の本心であると感じていた。しかし、それを受け入れることは出来なかったのだ。

「本当に……私のこと嫌いになつたの？ 好きな人がいるの……？」
歩は今にも倒れそうな弱い声で、震えながらそう言った。佐伯は静かな目で歩を見つめている。

「……そうだよ」

やがて、佐伯がそう言った。自分自身辛いものの、きっぱりとそう嘘をついた。歩の将来のためにも、今は離れておく必要がある。

佐伯は言葉を続けた。

「聞いていたなら正直に言う。俺はもう、おまえのことをなんとも思つてないよ……俺は新しい場所で、新しい人生を歩もうと思う。だから……悪いけど、もうここへは来ないでほしい。はっきり言つて……迷惑だ」

続けた佐伯の言葉に、静香も驚いていた。佐伯の気持ちはわからなかったが、この状況が二人の別れを意味していることだけはわかる。

「……ごめんなさい。わ、私……」

歩の目から思わず涙が流れた。そんな歩に近づいて、佐伯は歩の顔を覗きこむ。

「歩。泣いてないで、すぐに家に連絡するんだ。もうご両親にも心配かけるんじゃない。わかつたな？」

「豊……もしかして、豊の新しい恋人つて、静香さん？」

突然、歩がそう言った。静香はその言葉にドキツとしたまま、二人の様子を見つめている。

「……」

佐伯は、何も言わなかった。

「……そうなの？」

歩の言葉に、佐伯は頷きもせず、ただ歩を見つめている。それは歩にとつて、肯定したとしか取れなかった。

その態度に驚きつつも、静香だけは佐伯が嘘をついていることがわかった。

「そ、そうなのね……」

静香が見つめている中で、歩は放心状態だった。佐伯は小さく息を吐くと、歩に金を差し出す。

「これ、タクシー代。すぐに帰れ。それから、すぐに家に連絡するんだ。いいな？」

それを聞いて、歩は金を握り締めるものの、その場から動こうとはしない。そんな歩の肩を叩くと、佐伯は静香を近くに呼び、歩に声をかける。

「……おまえも、いい人見つけるよ。おまえはまだこれからなんだから。そして幸せになってくれよ。俺も応援してるから……いいな？　ちゃんとすぐに帰れよ。静香、行くぞ」

佐伯は静香の手を取ると、動かない歩を横切って、自分の家へと入っていった。

真っ暗な佐伯の家の玄関で、静香は佐伯を見つめた。佐伯はドアに寄りかかったまま、辛そうな顔を見せている。そして静香に背を向け、ドアの覗き窓から外を見つめた。佐伯の目には、傷ついたまま、まだ動こうとしない歩の背中が見える。

歩はしばらくその場に立ちすくんでいた後、カバンから何かを出してうずくまった。そしてしばらくすると、歩がこちらに近づいてくるのが見えた。

佐伯は息を殺して、その様子をじっと見つめる。歩は紙のようなものを畳むと、ドアにつけられたポストに、それを入れた。

佐伯は自分の下にあるポストに、確実に何かが入ったことを感じつつ、今はまだそれが何なのかを確かめずに、必死に歩の姿を見つ

めている。

そんな歩は、その後こちらにお辞儀を見せた後、静かにその場を後にした。

完全に歩の気配が消えた後、佐伯は急いで、ポストに入れられた紙のようなものを取り出した。紙はメモ用紙で、折り畳まれた中には、佐伯がタクシー代として渡した金がそのまま包まれている。そしてメモ用紙には、歩の凍えた字が綴られていた。

“ 豊へ。

豊の気持ちも考えず、今まで勝手なことをしてきて本当にごめんなさい。でも私は、今でも豊のことが好きです。出来れば豊にも、ずっと好きでいてもらいたかった……でももう駄目なんだね。相手が静香さんなら、仕方がないのかな。

今は悲しくて仕方ないけど、きつと乗り越えていきます。豊が今まで私にくれた優しさは、本物だつて思えるから。私は豊を好きのまま、ちゃんと幸せになるって約束します。豊は静香さんと幸せになつてね。

だから安心してください。もう豊には会いません。迷惑もかけません。だから、ムシがいいかもしれないけど、今まで迷惑かけてきたことは、全部忘れてね。もう会えないけど、私はいつでも豊の幸せを願ってます。今までありがとう。元気だね。さようなら”

前向きに綴られた歩の文字だが、歩がそんなにきつぱりと割り切れるはずがない。

佐伯は辛くて仕方がなかったが、歩が新しい人生に踏み切れるのだと思うと、これでよかったのだと思わずにはいられない。

しかし、これが本当の別れで、もう二度と会えないということを、佐伯は悲しまずにはいられなかった。

「……先生……」

静香の心配そうな声に、佐伯は我に返った。

「静香……」

「大丈夫？」

「ああ、ごめん。おまえにも辛い目に合わせた……本当にごめん」
佐伯は静香が自分を思っているのを知りながらも、歩と別れるためにとつさに恋人同士だと否定しなかった嘘で、静香を傷つけたことを謝った。

しかし静香は、微笑みながら首を振る。

「ううん、いいの……でも先生は、あれでいいの？」

「……ああ。いいんだ」

暗い表情の佐伯に、静香は詰め寄るように口を開く。佐伯が歩と別れることは嬉しいものの、辛そうな佐伯は見たくない。

「でもまだ歩さんのこと、好きなんでしょう？ どうしてあんなこと……本当にそれでいいの？ 後悔しないの？」

静香に言葉に、佐伯は顔を逸らす。

「好きだから突っ走るなんて、ガキみたいなこと出来ねえよ」

「……なに言ってるのよ。好きだから突っ走るのが、恋なんじゃないの？」

強がっているような佐伯に対して、静香が怒鳴って言った。佐伯が歩をどれほど好きだったかはわかっている。だから妥協してほしくないと思った。

そんな静香に、佐伯は目を伏せる。

「……あいつの将来を考えたら、これが一番の方法なんだ。いくら互いに好き合っても……それがあいつの人生を潰すことには変わらないんだよ！」

佐伯の言葉に、静香は驚いた。佐伯はいつになく複雑な表情のままで、とても自分が支えになれるとは思えない。

「……わからないよ。潰すって？」

「あいつは俺への依存心が強い……両親も何もかも、俺のためなら捨てるという。まだ高校生のあいつに、俺がしてやれることなんて、

たかが知れてるだろう？ 恋も知らずに、夢も持たずに、あいつは一生俺に縛られるっていうのか？」

「わからないけど、それでも……歩さんにとっての幸せは、先生といることなんじゃないの？」

静香はそう言いながら、佐伯の本心を知り、とても歩には敵わないと思っていた。自分も佐伯のことが好きではいるが、それほどまでに強い意志で愛するなど、自分には出来ないと思う。

「……本当に悪かったな。誕生日なのに」

「うつん。いいの……」

二人が落ち着いたようにそう言った時、電話のベルが鳴ったので、静香はドアノブに手をかける。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ……本当にごめんな」

「いいってば。早く電話に出なよ」

「ああ。悪い……」

佐伯は家へ上がると、電話に出た。

『よかった！ やつと通じて……後藤です』

電話の相手は、歩の父親である。佐伯は、両親が歩を捜しているのだと悟った。

「はい。歩さんなら、さつき会いました。話をして帰しました。そろそろそちらに連絡が……」

『ああ、遅かったか……！』

電話口で、父親が落胆の声を上げた。

「え………どういことですか？ 何かあったんですか？」

「先生！」

ただならぬ雰囲気、佐伯の顔色が変わる。その時、玄関の方から静香の声が響いた。

「先生。歩さんのお母さんが……」

静香のその声に、佐伯は受話器を持ち直した。

「後藤さん。今、奥様が見えたようです」

『では、話は家内から聞いてください。私も警察などに行かなければなりませんから』

最後の言葉が気になったものの、電話はそこで切られたので、佐伯は玄関へと向かった。玄関には、静香と歩の母親がいる。

「後藤さん……」

19、知らされた真実

「後藤さん……」

「佐伯さん！ あの子は……」

「先ほどここへ来ましたが、帰るように言っただけでした……何事です。何かあったのでしょうか？」

佐伯は逸る気持ちを抑えきれず、次の言葉を求める。

「あ、あの子からの手紙です……」

放心状態の母親が、そう言っただけの数枚の便箋を佐伯に差し出した。その身体は震えていて、今にも倒れそうである。

“お父さん、お母さんへ。”

いつも心配ばかりかけてごめんなさい。この間、佐伯先生の家から帰る時、先生の本心を知りました。嘘だっただけ信じたけれど、私は先生に迷惑ばかりかけていたし、離れてしまったことで、先生の気持ちが変わってしまったのかもしれませんが、それでも、私は今でも先生のことが好きです。でも、お母さんたちは一生許してくれないのかな？ でもね、あの頃だって、本当に真剣につき合ってきたし、これから私は先生が好きだと思います。他の人なんて知りたくないの。

一つだけ、お母さんたちに言わなければならないことがあります。私のおなかには、先生との赤ちゃんがいるの……ごめんなさい。許してもらえないと思うけど、私は絶対に産みたいです。でもお母さんたちといくと、きっと反対されるから、私はこの家を出ます。親不孝な私を許してください。私を許せなくても、赤ちゃんだけは許してください。そして、決して先生を責めないでください。悪いのは全部私です。

もう一度、先生のところへ行って、私の気持ちを伝えたいと思います。それでも先生が、前と違う気持ちを持っていたら、私は先生

のことを忘れるつもりです。でも、お母さんたちとはもういられないので、どこか知らないところへ行きます。

心配しないでください。私はきつと幸せになります。私は一人じやないから。赤ちゃんがいるから、二人で幸せになります。だから、本当にお母さんたちには謝り切れないけど、いつまでも元気で、幸せに暮らしてください。

今まで私を大事に育ててくれてありがとう。最後まで親不孝な娘だったけど、私は私で頑張ります。本当にごめんなさい。さようなら……”

数枚の便箋にしたためられた歩の文字は、佐伯の胸を締めつけた。歩が妊娠したという、初めて知る真実に、顔面蒼白になる。

「子供が……いるんですか……？」

「佐伯さん！ あなた、私の言いつけを破ったんですね？ どうしてあの子を苦しめるようなことをしたんです。あの子を傷物にして……あの子を返してください。あなたは、あの子の一生を奪ったんです。あの子を返してください！ 返してよ……！」

歩の母親は、急に怒鳴り出したかと思うと、その場に泣き崩れた。「申し訳、ありません……」

佐伯がやっとそう言つと、母親は泣きながら、佐伯の服を握り締めた。

「なんてことを……！」

「……彼女を捜しましょう。今はその方が先決です。今ならまだ、そう遠くへは行っていないはずですよ」

佐伯は口を結ぶと、そう言った。今は歩を捜すことが先決である。「佐伯さん……」

歩の母親は今にも倒れそうで、か弱い一面を見せている。そんな母親を支えながら、佐伯は俯く。

「後藤さん。本当に……なんと言ったらいいいのか、今は何も思い浮かびません。本当に申し訳ありません……今後のことは、彼女が見

つかった後で話し合いました。今は手分けして捜すことが第一です。静香も悪いけど、出来たら……」

「うん。一緒に捜すよ」

静香はすぐに頷いて、三人は手分けして歩を捜しに出た。

歩は信じていた佐伯を失い、氣力をなくしたまま歩いていた。そして、ちょうど停まっていたバスに乗りこむと、佐伯の家の最寄駅ではなく、少し離れた繁華街の方の駅へと向かっていった。そしてそのまま、夜行列車に乗りこんだ。

一時間後、佐伯の家に集合した三人は、収穫のなさに愕然とした。「静香、今日はありがとう。変なことにつき合わせたな。本当にごめん。誕生日なのに……」

歩捜しにつき合ってくれた静香を氣遣い、佐伯が言う。静香は首を振った。

「いいの。もう少し捜せるよ」

「いや、いいんだ……本当にありがとうな」

「うん。じゃあ、いつでもいいから、私も手伝えることがあったら言ってね……」

「ありがとう……」

「じゃあ、さよなら……」

静香はそのまま、家へと帰っていった。

不思議なことに静香は、佐伯の本命である歩がいなくなつて嬉しいとは、少しも感じなかった。ただ、佐伯のために何かしたいと思う。それが歩を捜すことであり、その後二人が寄りを戻すことになったとしても、それでいいとも思った。

二人きりになった佐伯と歩の母親は、互いに切羽詰った表情をしている。

「後藤さん。僕はもう一度捜してきます。後藤さんは、ここでご主人をお待ちください。一時間後に、もう一度戻ります」

佐伯はそう言い残すと、もう一度、夜の街へと消えていった。歩が乗りこんだ駅にも行つてみたものの、歩を覚えている人はなく、歩の情報は一つも得られなかった。

更に一時間後。佐伯が家へ戻ると、駆けつけた歩の父親も家に来ていた。

「歩は……」

「……申し訳ありません」

すると、父親が佐伯の胸倉を掴み、何度も顔を殴りつける。

「私は、自分がこれほど無力に思ったのは初めてだ。大事な娘をおまえみたいな男に取られて、しかもまだ高校生の分際で妊娠などと……おまえを殺してやりたいくらいだ！」

父親は佐伯の顔を見て、更に興奮したようので、殴り続けるのをやめない。佐伯は自分自身をも許せず、ただ父親に身を任せる。

「……申し訳ありません……」

やがて、父親が佐伯を解放した。

「今は歩を捜すことが、先決だったな」

父親はそう言うと、どかりとソファに座る。佐伯はその場に立つたまま、歩のことを考えた。

「……警察には連絡して、捜索願を出した。しかし、あの子は何をしでかすかわからない。まさか、悲観して思い詰めたりは……」

父親の言葉を聞いて、今度は母親が佐伯を見つめる。

「佐伯さん。心当たりはないですか？ 我々の心当たりはすべて捜しましたが、無駄でした……今のあの子は、何を考えているかわかりません。あの子是你はあなたのことしか考えられないようですから……何か心当たりはないのですか？」

顔すら見たくない佐伯にすぎるほど、母親の神経は参っていた。

事実、歩の両親に出来ることは、これ以上はもうなかった。

佐伯は必死に心当たりを考える。ろくに外へは出かけられなかった二人だが、思い出の場所はある。しかし、歩がそんなところにい

るとは思えなかった。

「思い出の場所はいくつかあります。海や神社、学校……ただ、そういった場所に行くとは……」

「では、どういう場所へ行くと思うのですか？　少しでも心当たりがあるなら、行く価値が……」

「……北海道」

その時、佐伯がぼつりと思い出して言った。

「え？」

「そうだ、北海道かもしれません！　いつか、二人で行けたらいいと言っていたことがあります。深い接点はありませんが、そこなら……」

佐伯が言った。なぜか、そこが一番有力だと思ってならない。

「馬鹿馬鹿しい。深い接点もないなら、探す必要はない。それに、ただ漠然と北海道だなんて、どれだけの地域を捜すおつもりですか？」

「でも、そんな気がします。それに少しでも接点があるなら、行く価値があるとおっしゃったのは後藤さんです。北海道といっても、漠然としているのは確かですが、少しは心当たりもあります。今はちょうど冬休みですし、明日にでも行きます」

確信したように佐伯が言った。そんな佐伯に、両親は互いに顔を見合わせる。

「本当に、北海道まで行くというのですか？」

「行く価値はあると思います……見つけたら、すぐにお知らせします」

佐伯の言葉に頷いて、両親たちは立ち上がった。

「私たちは家に帰ります。くれぐれも、よろしくお願いしますよ」

後藤夫妻はそう言っていると、佐伯の家を出ていった。

佐伯が北海道だと思ったのは、かつて佐伯がスキー教室に行く時に、歩といつか行こうと約束したことにあつた。

確証は何もないが、なぜか佐伯は、北海道に歩が行くような気が

してならなかった。

残された佐伯は一人になり、歩のことを思っていた。すべてに対して後悔せざるを得ない。最後に見た歩の姿を思い出し、佐伯の目からは涙が溢れ出る。

（悲しそくに、雪の中に立ってた……俺に別れを告げられて、どんな気持ちだっただろう……妊娠したことも俺に告げられないまま、歩はどんな思いで……）

佐伯はその夜、一睡も出来ずにいた。

20、搜索

次の日。佐伯は一人、北海道行きの飛行機に乗りこんだ。歩が何の接点もない場所に向かっているのなら見当もつかないが、なぜか歩が北海道に行ったと思えてならない。

かつて少しだけ出た話の一つだったが、きっと歩は忘れていない。佐伯は北海道に行かずにはいられなかった。

歩は夜行列車に乗り、早朝に青森へと着いていた。あまり体調が優れず、しばらくファミリーレストランに腰を落ち着かせる。

（お母さん、どうしてるだろう……もうとくに、私の手紙は気づいたよね。怒ってるだろうな……捜してるんだろうな、私のこと……）

そんなことを考えている時、歩は腹部に痛みを覚えた。

「痛……」

極度の疲労と緊張に加え、寝不足もたたり、歩はその場で気を失ってしまった。

数時間後。病院で目を覚ました歩は、近くにいた看護師と目が合った。

「ああ、よかった。気がついたのね」

「……看護師さん？」

「そう、ここは青森市内の病院。あなたはファミレスの中で気を失って、ここに運ばれたんですよ」

「あ……」

「思い出した？」

歩は言葉を失って、小さく頷く。

「少し疲労気味ですね。妊娠もしてるようだし……荷物からして、一人旅？」

「……………」

看護師の質問に、歩は何も言わなかった。

「言いたくないならいいの。ただ無茶しちゃ駄目ですよ。赤ちゃんのためにもね」

「……はい」

素直に返事をした歩に、看護師は優しく微笑む。

「一人みただけど、大丈夫？ 若く見えるけど、学生さんかしら」

「……一人です。学生じゃありません」

歩が言った。高校生ではあるものの、学校は辞めるつもりだ。尋問のような質問に、歩は考えながら返事をする。

「そう。一人なのは、親御さんとか知っているの？ 青森へは観光？ それとも、どこか別のところへ行くつもりだったのかしら」

「……北海道に……親は私が一人なこと、知ってます」

「そう……でも、少し休んでください。あとで医師が見に来ますからね」

「ありがとうございます……」

その時すでに看護師は、歩の荷物から自宅の電話番号を発見しており、メモを取っていた。そして歩が未成年だということを確信すると、歩の自宅へと電話をかけたのだった。

佐伯は北海道へ着くと、早速、ホテルへと向かった。

「予約した、佐伯です」

「佐伯様。ご伝言をお預かりしております」

「え？」

ホテルの受付で、佐伯は伝言のメモを受け取った。そこには、後藤家からの連絡事項が書いてある。

“娘が青森市内で見つかりました。ホテルに着き次第、連絡乞う”

佐伯はその場から、急いで東京の後藤家へと連絡を入れた。

『はい、後藤です』

切羽詰った様子、歩の父親の声が聞こえる。

「佐伯です。今、ホテルに着きまして……見つかったとは、本当ですか！」

『そうなんです。青森の病院から電話があつて……未成年とわかり、看護師の方が歩の荷物から手帳を見つけて、うちにかけたとか……家内もそちらに向かいましたが、やはり歩は北海道に向かつていたようです』

「それで、どこの病院にいるのですか？ 青森なら、こちらからの遙かに近い。すぐに向かいます！」

佐伯は逸る気持ちを抑え、病院の名前を聞くと、すぐにその足で北海道から青森へと向かつていった。

しばらくして、歩がトイレへ起き上がると、ナースステーションから看護師たちの声が聞こえてきた。

「今日、救急で来た子の親御さん、どこに住んでるの？」

「東京みたい。すぐに向かつてるみたいだけど、結構かかると思うわ」

歩の担当をしている看護師が言った。歩は聞き入るように、その場に立ち止まる。

「でも、連絡してよかったの？」

「仕方がないじゃない。事情があるのはわかるけど、未成年なのよ？ 親御さんに連絡したら、やっぱり驚いてたわ。何度もお礼言われちゃったもの」

担当の看護師が言う。看護師たちの会話は、尚も続いている。

「まあ、よかったわね。トラブルはご免だもの。でも、東京からじゃ遠いわね」

「でも、北海道まですでに捜しに来ている人がいて、その人も向かつてるって」

「じゃあ、そろそろ着くかもしれないわね」

「ええ。まあ、家族の方と話し合ってもらわないと、こっちも手出し出来ないから」

歩はそれを聞いて、病室で着替えると、すぐに病院を飛び出していった。

それから佐伯が病院に着いたのは、一時間もかからない頃だった。佐伯は、歩の担当だという看護師から事情を聞く。

「すみません。多分、私たちの話を聞いたんじゃないかしら。あなた方がこちらに来るってことを話していて……見回りは何度も行っていたんですが、小休憩中に……これがベッドに置かれていました」看護師が見せたのは、二枚の走り書きのメモ用紙と、一万円札だった。

『少ないかもしれませんが、入院費です』

そして二枚目のメモには、こう書かれていた。

『捜さないでください』

佐伯は、無念にうなだれた。

数時間後。佐伯は病院で歩の母親を待った。事情を知った母親は、またも泣き崩れる。

「……後藤さん。僕は冬休みの間は、北海道で捜すつもりです」

佐伯もシヨックを隠し切れないまま、そう声をかける。その言葉に母親は顔を上げた。

「わ、私も、しばらく北海道にいるつもりです。主人は仕事で来られません……でも、あの子は北海道に行くでしょうか。我々が捜しているのを知って……」

「わかりません……捜してみないことには」

「そうですね……行きましょう。札幌へ」

「ええ」

二人は、北海道へと足を踏み入れた。

その後、函館のフェリー乗り場で、二人は思わぬ情報を得ることとなる。

「本当ですか？ この子に間違いないですか！」

思わず佐伯が叫ぶ。歩の写真を見せて回ると、フェリー乗り場の男性が見たというのだ。

「多分、間違いないですよ。この女の子でした。青森からフェリーで来て、しばらくその案内板とか見てましたよ。女の子一人きりで目立ってましたんでね。覚えてますよ」

男性の言葉に、二人は希望の目を輝かせる。

「そ、それで、その子はどちらへ行きました？」

「駅の方に行きましたよ」

「ありがとうございます！」

二人は急いで駅へと向かっていった。

しかし、駅での情報は一つも得られなかった。仕方なく二人は札幌へと向かい、数日かけて札幌の街を回り、ホテルというホテルに電話をかけたりと努力を重ねたが、歩の情報は何一つ入ってこなかった。

数日後の夜。佐伯が滞在するホテルの部屋を訪れる、少女の姿があった。

呼び鈴に佐伯がドアを開けると、そこには静香が立っている。

「静香！ どうして……」

「気が気でなくて来ちゃった。私も一緒に捜すわ」

あっけらかんと、静香が言う。

「ば、馬鹿なこと言うな！ だいたい、親は知ってるんだろうな。なんだってこんな遠くまで……」

佐伯が慌てて言う。静香の地元から北海道までは、高校生が気軽に来られる距離ではない。しかし静香は、笑ったまま佐伯を見つめている。

「もちろん、心配だからよ」

「静香……」

「あ、宿は大丈夫だよ。札幌市内に親戚が住んでるの。そこに泊ま

らせてもらうことになってるから。もちろん親にも言っているから、大丈夫」

静香の真意は、佐伯にはわからなかったが、静香にとっても同じだった。遠くまで来た自分を馬鹿だと思いつながら、佐伯の力になりたいという気持ちの方が大きい。何よりこの旅で、静香は自分の気持ちにケリをつけたいと思っていた。

「先生のことから、無理してるところ。駄目って言われても、一人で歩さんを探すんだから」

静香の言葉に、佐伯は小さな溜息をつく。ここまでしてくれる生徒に、申し訳なく思った

「ありがとう……なんだかおまえには、礼がしきれない」

「いいの。じゃあ私、これから親戚の家に行くから。明日は何時に来ればいい？」

「その前に、送るよ」

佐伯はそう言つと、コートを羽織つて身支度する。

「大丈夫だよ。ここからそう遠くないし、よく遊びに来てたから迷わないよ」

「送る」

遠慮する静香を、佐伯は半ば強引に連れ、ホテルを出ていった。

タクシーの中で、佐伯は何を話すでもなく、隣にいる静香のことを考えていた。おそらく未だ自分を好いてくれている少女に、自分の恋人を探させるなど酷ではないのだろうか。しかし本人が強い意志でここまで来た以上、追い返すわけにもいかず、ただ静香の申し出を受け入れることしか出来なかった。

静香は怒っているような佐伯の態度に、少し不安を感じつつも、ここで引き返せはしない。なにより佐伯の気持ちに感情移入してしまい、なんとしてでも捜したい構えでここへ来ていた。

「……怒ってる？」

佐伯の様子に、静香が横目で見ながら尋ねる。佐伯は我に返り、

静香を見つめた。

「いいや……」

「でも、怒ってるみたいだよ」

「……呆れてる。いくら親戚がいるからって、こんなこと……」

静香は笑顔で返す。

「何もいらなから気にしないで。本当、自分のためにやっているんだから……すみません、この辺でいいです」

静香はひとり言のようにそう言うと、運転手に声をかけてタクシ―を止めた。そこは住宅街である。

「すぐそこなの。明日は八時頃でいい？」

ハキハキと静香が尋ねる。後戻り出来ない距離な分、静香は積極的に振舞った。

「ああ……それでいいよ」

「じゃあ、ホテルのロビーに行くから」

静香は佐伯からの言葉を恐れるように、タクシ―を飛び降りた。

佐伯は静香が住宅街に消えていくのを見届けると、ホテルへと戻っていった。

次の日の朝。静香は佐伯に加わり、手探り状態の搜索が始まった。警察も動き出していたが、手掛かりも何もない。

歩の母親は別のホテルに残っており、情報を待っているはずだ。

「先生。本当に歩さん、札幌にいるの？」

静香が尋ねる。

「それはわからないけど……でも、北海道に来たのは間違いないんだ。北海道で接点と呼べる場所は、札幌しかない。小さな口約束だけけど……」

「札幌の心当たりは、全部当たったの？」

「行ったよ。スキー場とか、観光地とか。写真も見せてきたし……でも、一人でスキーは行かないだろうな。子供だっているんだし……」

……」
「……」

佐伯のその言葉に、静香は押し黙った。それはあの日、引き離された佐伯と歩が再会した日、二人が男女の関係になっっていたことを物語っている。

「……今日は札幌を出てみようか。あまり身動きが取れないのかもしれないし、函館に戻ってみよう」

「そうだね……」

二人はそのまま、駅へと向かった。

「……まだ早いね」

静香が言った。ホームには電車が来ているものの、まだ発車時間ではない。

「もうすぐだよ。寒いし、乗ってしよう」

二人は停車中の電車へと乗りこんだ。しかし、静香はすぐに背を向ける。

「寒いね。缶コーヒーでも買ってくる」

静香はそう言っていると、ホームへと降りていった。佐伯はボックス席に座り、外を眺める。

一人になると、どうしても物思いに耽ってしまう。いったい歩は身重の身で、未成年で、この極寒の地でどこへ行こうというのか。

その時、佐伯の視線を、反対側に入ってきた電車が遮った。佐伯は我に返り、車内を見回した。そこに静香が帰ってくる。

「寒かった……電車はあったかいね。はい、コーヒー」

「ありがとう」

佐伯はコーヒーに口をつけると、無意識にもう一度外を見つめる。すると、反対側に入ってきた電車が止まり、佐伯と静香は目を疑った。

入ってきた電車の、ちょうど二人の前に止まったボックス席には、紛れもなく歩の姿があった。

21、「さよなら」

「歩！」

佐伯は思わずそう叫んで、立ち上がった。そして窓に手について、向こうの電車に向かって合図を送り続ける。すると、歩も佐伯に気がついた。

歩も驚きが隠せない様子で、信じられないという表情をしながら、ゆつくりと立ち上がる。

「歩！ 歩！」

佐伯は、必死に歩を呼び続ける。

歩はしばらく佐伯を見つめたかと思うと、佐伯の隣で自分を見つめている静香に気づき、もう一度佐伯を見て、悲しく微笑んだ。

「違う！ 歩、話がしたいんだ。おまえをずっと捜してた！ そこで下りるんだ。すぐに行くから！」

窓に阻まれて声は聞こえないものの、歩は佐伯の言っていることを理解すると、小さく首を振り、佐伯を見つめる。

『さよなら……』

ガラス越しに、歩の口がそう動いた。

「歩！」

佐伯の言葉をもう知ろうとはせず、歩は席に座って俯いた。

「歩！ クソッ！」

佐伯は電車を下り、歩のいるホームまで向かおうとした。しかしその時、歩の乗る電車の発車ベルが鳴り、佐伯は慌ててもといた電車へと乗りこみ、歩を見つめる。しかし、歩はもうこちらを見ようとしめない。

それからすぐに、歩の乗る電車は発車していった。そして同時に、反対車線の佐伯が乗る電車も閉まり、それぞれ別方向へと走り出していった。

歩は走り出した電車の中で、一人、涙を流していた。

（捜しに来てくれていた……でも、もう会えない。私は一人で生きていくって決めたんだ。でも豊、こんなところにまで静香さんと来ていて、本当に好きな人を見つけたんだ……もしかして、お母さんに言われて、無理に探しに来てくれたのかな？ わからないけど、もう本当に会えない。会わない……豊。お願いだから、もう捜さないで……もう辛いのは嫌だよ。もう何も見たくない。考えたくない。さようなら、豊……）

歩は一人、心の中で呟いた。

歩はこの数日間、函館から札幌へゆつくりと向かい、主に室蘭のビジネスホテルにいた。少し身体の具合が優れずに、ゆつくりとした行動しか取れずにいたのだ。

佐伯や両親からの追っ手に怯えながらも、歩は電車に揺られ、行く当てもなく旭川方面へと向かっていった。しかし佐伯と出会ってしまった以上、追っ手が来ることを恐れ、一度乗り換えをし、帯広方面へと方向を変えた。

佐伯は電車の中で、一人うなだれていた。

（歩。やはり北海道に来ていた……だけど、こんな形で会うなんて！俺と静香が一緒にいるところを見て、あいつはどんなふう思ったのだろう。どんな気持ちで……歩は本当に、もう誰にも会わないつもりなんだ。さよならだなんて……あいつは本当に、一人で生きていくつもりなのか？）

一人、頭を抱えこむ佐伯を前にして、静香は何も声をかけることが出来なかった。二人は次の駅で降りると、歩の乗った電車を追いかけて、札幌方面へと戻っていった。

しかし佐伯たちも、どこへ行くべきか迷っていた。

「広過ぎる。旭川へ向かったのか、途中で降りたのか、乗り換えたのか、全然わからないじゃない……」

路線図を見ながら、静香が言う。

「でも、探すしかない」

佐伯は主要な駅を一つずつ降り、駅員に歩の写真を見せるものの、手掛かりもないまま、二人は旭川へと着いてしまった。

「……そろそろ暗くなるな。静香はもう帰った方がいい」

旭川の駅前で、佐伯が言った。

「え、先生は？」

「俺はここでホテルを取る。一人で帰れるよな？」

「私も泊まる。もう札幌まで遠いし、家なら大丈夫。ちゃんと連絡入れるから。ね？」

静香の言葉に、佐伯はゆっくりと口を開く。

「……静香。おまえの気持ち、痛いほど嬉しかった。でも、もうこっちはいいから、明日にでも実家へ帰るんだ」

「先生……」

「正直、今は誰とも居たくないんだ……もう歩に、誤解もさせたくない……悪いな、静香。俺、教師なのに、生徒のおまえに格好悪いところばかり見られちゃって……でも、今は何も考えられないんだ」

佐伯の言葉に、静香は俯いた。

「今ここにるのが、教師なんて思っただけ……先生の気持ち、わからないわけじゃないよ。でも、今は一人でも人手がほしいだろうし、先生だって辛い時に一人でいちゃ駄目だよ」

静香はそう言った後、すぐに言葉を続けた。

「なんて、綺麗事だね……私も、自分がなんでこんなところにいるのかわからないんだ。ただ、歩さんを捜し出してあげたいって気持ちには本当だよ。でも一番は、先生の辛そうな顔、もう見たくないの……駄目なの？先生の力になりたいって思うのは、迷惑？私、見返り求めてないよ。そりゃあ先生のことまだ好きだけど、駄目なんだでしょ。私じゃ……」

そう言っ、静香は佐伯を見つめる。佐伯は俯いた。

「ごめんな、静香……俺は、やっぱり今でも、歩を愛してるんだ……静香が俺を思ってくれる気持ち、本当に嬉しいよ。でも、ここま

でされる義理はないよ。このままおまえに甘えてたら、俺もどこへも行けなくなる。俺にとっても……重荷なんだ。わかってほしい」
佐伯はゆっくりと、その言葉にした。静香の心は傷つきながらも晴々とし、納得して頷く。

「わかった……ありがとう、はつきり言ってくれて。明日、実家に帰る」

「……ああ」

二人は改札口へと向かっていく。

「じゃあ、ここで」

静香が、振り向いて言った。

「ああ。ありがとう、静香」

「ううん。じゃあ新学期には、笑って会おうね」

「ああ、気をつけて。本当にありがとうな」

「いいってば。ごめんね、先生。強引なこととして……じゃあね。頑張ってるね」

静香はそう言うのと、もう佐伯の顔も見ずに、改札の中へと走っていった。

佐伯は静香の後ろ姿を見つめながら、一人の少女を傷つけて、胸が締めつけられる思いでいた。しかしそのまま駅を出ると、歩を捜し続けた。

電車の中で、静香は必死に涙を堪え、外を見つめる。

（ごめんね、先生。こんなところまでついてきて……でも私、先生のことを好きになれて本当によかった。だって初めて自分に素直になれた気がするんだ。それに先生と歩さんを見て、本当に大切なものを教えてもらった気がする……歩さん、早く見つかるといいね。先生、頑張ってるね……）

静香の中で、何かが成長している気がした。佐伯と結ばれることはなくても、教えられたことはたくさんある気がしてならない。

その日は新たなスタートとして、佐伯と静香はきっぱりと分かれ

た日となつた。

22、新しい出会い

歩は富良野に一泊すると、次の日には幕別にいた。しかし気力も体力も限界で、行く場所もなく、歩は遂に立ち止まってしまった。

歩は小さな公園のベンチに腰を落着かせるが、この先どうしていいのかわからない。不安と悲しみでいっぱいだが、自分の腹をそつと撫でると、勇気が湧いてくるような気がする。

「私は一人じゃない……」

歩はそう言つと、少しでも気を落ち着かせようとした。しかし、もう身体を支えることも出来ず、その場から動けない。

そのまま歩は、しばらく公園のベンチに座っていた。食事をするこつとさえる気にならず、吹きさらしの公園で、寒さに意識まで遠のいていく。だがここで倒れれば、また病院へ送られ、行方を知らされてしまうと思い、必死に意識を保とうとした。

しかし、歩の身体はすでに限界に達しており、また慣れない寒さにさらされ、身体は氷のように冷たくなっていくのを感じる。

「おい、あんた。大丈夫か？」

歩が意識を失いそうになったその時、一人の男性が声をかけた。二十代半ばくらいの男性は、歩を心配そうに見つめ、関西なまりで話しかける。

「どないしたん？ 病院行くか」

男性がそう言つと、歩は大きく首を振つた。

「大丈夫です。病院には連れて行かないで……」

「そやかて、辛そうやんか」

「お願いします。大丈夫だから……」

歩は興奮して立ち上がるつとをする。しかし、足が震えて立てなかつた。

「おい！」

男性が、そんな歩を支える。

「わかった。病院には連れて行かへんから。でも、どないしようか……」

「大丈夫ですから……」

「そんなこと言ったって、真つ青やん。あ、うちでよければ来るか？ 一人暮らしちゃうから、安心やで。女もいるから……」

歩はそこで気を失った。遠のく意識の中、男性の声はもはや聞こえなかった。

「だから、連れこんだんちゃうて。貴美子」

そんな声が聞こえる暖かな部屋で、歩はそつと目を覚ました。

「そんなことはわかつとるわ。私が言つとんのんは、なんでもっと早く見つけんかったかつて……」

「そやかて……」

「あ、目覚ました！」

歩は小さな部屋で、さっきの男性と知らない若い女性がいるのに気がついた。

「氣いついたんね。ここは私とこいつの部屋やわ。遠慮せんと休んどるんよ」

女性はそう言つて微笑む。その笑顔に、歩は少しほつとしたように口を開く。

「……あなたは？」

「私は、平井貴美子いうねん。こいつは、尾形龍太郎。こいつがあなたのこと連れて来たんよ。ここは安全だから、ゆつくりしいや」

その時、部屋に中年女性が入ってきた。

「貴美ちゃん。様子はどう？」

「奥さん。今、氣いついたんよ」

「じゃあ、後は私に任せて、仕事行きなさいな。尾形さんはちょっと残つて。この子、家に移すから」

中年女性が言った。

「わかりました。じゃあ私、先に行つとるわ」

貴美子という女性は、部屋を出ていった。

「大丈夫？ まだ顔色悪いけど、大分暖まったみたいね。よかった」
中年女性が歩に声をかける。

「私……」

「公園で気を失ってね。ここは彼の部屋で、私は彼の上司みたいなもの。山伏といえます。ここは狭いし二人の部屋だから、家に移つてもらうわね」

「でも……」

「ああ、遠慮はしないで。こういうのには慣れてるから。この人たちも、拾ってきた子犬みたいなものよ」

「奥さん。犬は酷いんちゃう？」

尾形が冗談交じりで、山伏という中年女性に食いかかる。

「まあまあ、それで、あなた立てる？」

「はい……」

歩はゆっくりと立ち上がった。しかし、まだ足元が覚束ない様子に、尾形が背を向ける。

「負ぶさった方がええやろ。ほら」

「じゃあ、行きましようか。ここから割とすぐだけど、外は寒いから覚悟して」

歩は尾形に負ぶさり、山伏と共にアパートから出ていった。そして一同は、近くの一軒家へと入っていった。

「ここは娘の部屋なんだけど、今は嫁いで帰ってこないから、自由に使ってちょうだい」

山伏が、一軒家の中の一つの部屋に通して言った。

「ありがとうございます……」

歩はまだ状況が把握出来ないものの、その人たちの優しさに触れ、素直に礼を言う。

「じゃあ俺、仕事向かいますわ」

尾形はそう言うと、家を出ていった。

いわね。あなたがそこまで産みたいと思うなら、ここにいなさい。

ここにいる限り、あなたは安全よ。決して警察にも実家にも知らせないわ。じっくり考えて、それから実家に連絡してもいいじゃない」

山伏がそう約束してくれたことで、歩は深々とお辞儀をする。

「ありがとうございます、山伏さん……」

「さあ、事情はわかったから、今は体力を取り戻すことに専念しなきゃね。たくさん食べなきゃ、赤ちゃんだって育たないわよ」

「はい……」

「そして、少し体力が戻ったら、うちの手伝いとかをしてもらって嬉しいわ。私も店が忙しくて、なかなか家のことまで回らないの。でも無茶はさせないから安心して」

「いえ。出来る限り、なんでもさせてください」

歩が言った。世話になる以上、恩返しはしたい。

「ありがとう。じゃあ、安心してゆっくり休みなさい。私は店に行ってくるわ。後で顔出すから。家の中は、好きに使っていいからね」

「はい。ありがとうございます……」

歩は山伏の優しさに触れ、久々に笑顔が戻っていた。

23、決意

佐伯はそれから数日間、ほとんど飲まず食わずで歩を捜すものの、手掛かり一つ掴めないまま、新年を迎えていた。

歩の母親は絶望し、すでに自宅へと引き返している。佐伯は望みを捨てていなかったが、身一つで出てきたため、一度家へ戻ることを決め、北海道を去っていった。

佐伯が自宅へ戻ると、早速、静香が駆けつけた。

「……その顔じゃ、進展なし？」

「ああ……でも、ありがとうな」

残念そうな静香に、力なく笑って佐伯が答える。

「いいってば。それより、痩せちゃったんじゃない？　ちゃんと食事してる？」

「大丈夫だよ」

生気のない佐伯を心配しながらも、静香は久々に姿を見て安心し、家へと戻っていった。

その後、佐伯は冬休みギリギリまで、もう一度北海道へ向かったが、曖昧な情報があるだけで、進展はなかった。

そうこうしている間に冬休みが明け、学校が始まった。

「先生！」

佐伯がバイクに乗ると、静香が制服姿で声をかけてきた。佐伯は新学期ということもあり、いつもの笑顔で笑いかける。

「おう。おはよう」

「おはよう。よかった……先生、学校辞めちゃうんじゃないかと思ってた」

「辞められないよ、こんな中途半端な時期に……ほら遅刻するぞ。早く行け」

佐伯はそう言うと、バイクで学校へと向かっていった。

その後の佐伯は、週末には北海道へ行ったり来たりの生活をしてきたが、歩の両親は警察に任せるだけとなり、北海道へ出向くことはなくなっていた。

二月。静香の学校では、突然の噂話が持ち上がった。

「ねえ！ 豊ちゃん、今期で学校辞めちゃうんだって！」

静香はそれを聞くなり、十分な話も聞かずに、佐伯のもとへと走っていった。

「ああ、本当だよ」

佐伯のいる数学準備室には、すでに噂を聞きつけた生徒たちが真相を確かめるため、押しかけている。

「嘘、どうして！」

生徒たちが問い詰める。

「転勤が決まったんだ。少し前に、届けを出してね」

「嫌だよ、豊ちゃん！ ここが嫌なの？」

「別に嫌ってわけじゃないよ。ここはいいところだと思うよ」

「じゃあなんで？」

「俺にもいろいろ事情があんの。ほら、授業始まるぞ」

苦笑しながら、佐伯は生徒たちをあしらう。

「じゃあ、どこに行くかだけ教えてよ」

「ん？ 北海道」

野次馬の後ろの方で聞いていた静香は、そこで初めて佐伯の思惑を知った。

その時、予鈴が鳴り、生徒たちは一斉に去っていく。そこに、静香一人だけが残った。

「なんだ、静香もいたのか。予鈴鳴ったぞ」

静香に気づいて、佐伯が言う。

「先生……今の話、本当なの？」

「……うん。この間、正式に決まった。生徒は情報が早いな」

苦笑している佐伯の前に、静香はその場に立ち止まったまま、一瞬、言葉を失った。

「そ、そこまでするの？ 妊娠なんて、嘘かもしれないじゃない……」

静香が言った。佐伯を諦め、二人を応援しようと決めた静香だったが、佐伯のあまりにも突然の行動に、戸惑いを隠せない。

佐伯は、静香を見つめる。

「……そうだな。でも多分、嘘じゃないよ」

「でも北海道には、もういないかも……」

静香が続けて言う。

「そうかもな……でも、広いあの大地に、まだ埋もれてる可能性はあるんだ。可能性がある限り、俺は捜すよ。そうじゃないと俺、一生後悔する」

佐伯は正直にそう言った。もう何も迷っている様子はない。

「……北海道のどこに行くの？」

「函館市内の男子校だよ」

「四月から？」

「ああ。こっちの整理がいたら、春休み中にでも行くつもりだ。マンションも、もう決めてきた。おまえには迷惑かけ通しだったけど、いろいろありがとうな」

優しい笑顔でそう言う佐伯に、静香は涙が出そうになる。

その時、本鈴が鳴った。

「静香。授業……」

「私……先生のことが好きだった。でももう、本当に終わりだね……さよなら」

静香は笑ってそう言うと、その場を去っていった。そしてそのまま、学校をも飛び出す。今は何も考えなくなかった。もう終わった恋だと諦めても、佐伯が遠くに行ってしまうショックは隠しきれない。

その日から、静香は佐伯には近づいてこなくなった。

佐伯は時が経つにつれ、学校の荷物を着々とまとめ、今までの思い出はすべて断ち切るように、時を過ごしていた。もう振り返る余裕すらない。歩を早く捜したい、その一心だった。

そして終業式。佐伯は名残惜しむ生徒たちを振り切って、学校を後にした。そして家へ戻ると、身軽なバッグを持ち、足早に家を出ていく。すでに荷物は新居へと送っていたため、もはや家の中には何もない。

佐伯が家を出ると、そこには静香が立っていた。

「静香……」

しばらくの間、声すらかけてこなかった静香に、佐伯が驚いて言った。

「……これ、餞別だよ」

静香は少し照れながらも、前と変わらぬ様子で笑って、袋を差し出す。

「ハハ。餞別か」

佐伯も以前と同じように振る舞い、袋を受け取った。すると袋の中には、手編みのマフラーが入っている。

「お、マフラー？」

「うん。もう春だけど……急に編み出したから、ちょっと雑だけど、まだ北海道は寒いでしょ？」

「ありがとう……手紙書くよ」

「……いいわよ」

まだ少し冷たい初春の風が、二人を包んだ。二人は微笑み合う。

「じゃあ俺、行くよ。元気だな……」

少し重い空気を断ち切って、佐伯が言った。頷いているだけの静香の肩を叩くと、佐伯はゆっくりと歩き出す。

「せ、先生も……ちゃんと御飯食べるんだよ。あと、無茶しないでね……！」

離れた佐伯の背中に向かって、最後にやっと静香がそう言った。

「ああ！」

佐伯は振り向いてそう言うと、小さなその町を出ていった。

静香の目から涙が溢れ出てきたが、もはや胸は晴れている。そして佐伯が歩を捜し出して幸せになることを、心から願った。

「さよなら、先生——！」

小さく見える佐伯に、静香が叫ぶ。佐伯にはもうその声は届かなかったが、二人は別々の新しい道を、しっかりと踏み出していた。(いつか……私もすべてをかけるような、あんな恋がしたい……先生。先生が教えてくれたこと、いつまでも忘れないよ。あんなに嫌いだっただ自分自身が、窮屈だったこの町が、先生を好きになれたことで、こんなに輝いて見える。ありがとう、先生……頑張つてね) 静香は晴れた気持ちで、自宅へと入っていった。

「ただいまー！」

「なんだよ、姉ちゃん。テンション高いじゃん」

弟の隆一が、いつもと違う様子の静香に声をかける。

「なに言ってるのよ。私はいつも通りよ。まあ強いて言えば、私は大人になったのよ。あんたにはまだ早いかもね」

「なんだよ、それ」

怪訝な顔をしている隆一を尻目に、静香はリビングへと向かった。キッチンでは、母親が食事の支度をしている。

「おかえり、静香」

「ただいま。お母さん、私、進路決めた！」

静香が突然そう言い出したので、母親は首を傾げる。

「あら、どうしたの？ 急に……」

「教師よ、教師！ 小さな町の、名物教師。子供たちが楽しく学べるような、そんな学校づくり。地域活動とかもいろいろしたいな。とりあえず、東京の大学目指すわ！」

静香が言った。漠然としたものではあるものの、佐伯と同じ教師を目指したい。自分が憧れていた佐伯のような教師になりたい。今

はそれだけだった。

「め、目指すって、そんな急に……」

静香から今まで将来のことなど聞いたこともない母親は、ただただ驚いている様子でいる。

「決めたの」

「でも今のあなたの成績じゃ、どうなのかしら。教師だなんて、思いつきでなれるものじゃないのよ。それにお父さんだって何か言うわよ。今まであんたは、真面目に将来についてなんて言ってこなかったじゃない」

現実的な目で母親が言う。しかし静香の決意は固く、その目は輝いている。

「成績は頑張って上げるもん。お父さんのイヤミだって耐えてみせる。いいの、決めたんだから。駄目でもともと、目指したい。これから勉強するから、今後の成績に期待しててよ！」

静香はそう言って、自分の部屋へと入っていく。

窮屈なままの家族も、急に受け入れてくれるものではないとわかっていった。だが静香は、勉強することで、その決意を示そうと思う。その日から、静香は今まで真面目に取り組んでこなかった勉強の前に、出来るだけの努力しようと誓った。佐伯が去っていった悲しみはあったが、それ以上に、見知らぬ力が漲っていた。

佐伯は、静香のいる町を後にして、東京へ向かい、歩の両親に挨拶をしてから、北海道へと旅立った。

歩の両親は、未だに佐伯を許せないものの、転勤までして娘を思う気持ちを、初めて少し理解していた。

佐伯はそのまま、函館市内のマンションへと移り住んだ。新学期からは、男子校へ勤めることになっている。そして北海道へ到着したその日から、歩捜しに出かけた。

24、ひとつの終わり

歩は、パチンコ屋の経営者、山伏の家で暮らしていた。従業員は親切で、歩も次第に笑顔が増えている。

経営が忙しい山伏夫人に代わって、歩は家の掃除や食事、そして店の掃除や簡単な作業を手伝い、小遣い程度の給料をもらうまでになっていた。

「歩ちゃん。奥さんが、もう帰ってええって」

尾形が事務所にいる歩に、そう声をかける。

「あ、はい」

「一緒に帰る。俺も終わりやねん」

二人は店を出ると、近くの山伏家へと向かっていった。

「今日も冷えこむなあ。歩ちゃんの部屋は大丈夫なん？」

尾形が心配して尋ねる。

「うん。山伏さんが、使っていないストーブを二つも持ってきたの。

さすがにいらないうって、一つにしてもらったんです」

「ハハ。旦那らしいな」

「貴美子さんは、今日はお休みなんですね」

今度は歩が尋ねた。

「ああ、熱出したんや。多分、風邪やわ」

「大丈夫ですか？」

「うん。病院にも行ったし、大人しく寝てると思うわ。歩ちゃんも、

暖かくしてなあかんで。子供もいてんねんし」

「ありがとう」

そこで山伏家に着いたので、歩は軽く頭を下げる。

「ありがとうございます」

「ええよ、帰り道やし。それより歩ちゃん、一人で大丈夫なん？」

「大丈夫。すぐに奥さんも帰ってくるし。それより、貴美子さんの

食事は大丈夫ですか？ 私、作りましょうか？」

「え、いいん？」

歩の言葉に、尾形が食いついた。

「おかゆとかでいいなら」

「ありがたいわ。俺、料理ってまるつきり駄目なんよ……」

尾形の言葉に、歩が笑う。

「わかりました。じゃあ、作っておきます」

「ありがとう。貴美子の様子見たら、こっち取りにくるわ。ほな、後でな」

歩は尾形と分けれると、一人、家へと入っていった。

家の奥の部屋が、歩の部屋となっている。歩は部屋に入るなりストーブをつけると、凍える寒さに身を寄せる。

部屋に置かれた小さな座卓には、一つのオルゴールが置いてある。それは、かつて佐伯にもらった、お揃いのオルゴールだ。その他にも、部屋には佐伯にもらったマスコット人形などもあるが、それらはみんな歩の宝物である。数少ない歩の荷物であるが、部屋にはそれが象徴的に置かれていた。

歩はオルゴールのネジを回すと、一日の疲れを取るようにその音楽を聞くのが日課である。そしてオルゴールを聞き終わると、キッチンへと向かっていった。

しばらくすると、尾形が家へやってきた。

「歩ちゃん」

「尾形さん。今、作つてるところです」

キッチンで歩が言う。

「悪いね」

「いえ。それより、貴美子さんの具合はどうですか？」

「ああ、寝とったけど、もう大丈夫と思うわ。でもあいつ身体弱いから、念のため明日も休ませよう思っけどな」

「そうですか……これ、尾形さんの夕飯です。持って行きますか？」

「え、俺もあるん？」

尾形が嬉しそうに覗きこむ。

「はい。急だったから、昨日の残り物だけど……」

「ええよ。ここで食べさせてもらってもええ？」

「どうぞ」

「ほな、いただきます。腹ペコやったんや」

歩は笑って、尾形の恋人である貴美子の食事をタッパに入れると、自分たちの夕飯作りにかかった。

「歩ちゃん、料理の才能あるな。家でやってたん？」

食事をしながら、尾形が言う。

「うん。学校に行かなくなってから、お母さんは家のことを私に教えたんです。子供の頃から、好きで料理はやっていたけど……」

「そう。俺はまるつきり駄目やわ。かと言って、貴美子も料理はあかんからな」

「そうなんですか？」

「ああ。あいつ一応、お嬢やから」

「へえ……」

一通り料理を終えると、歩は尾形の前に座り、話を聞いている。

「見えないやろ？ あれでもあいつの家、大会社の社長の家だな。

俺は子供の頃に親亡くして、親戚の家に預かられてたんやけど、悪さしててさ。それでもあいつと知り合ってから、心入れ替えたつもりやねん。真面目に働いて、あいつのこと幸せにしたる思うて、結婚申しこんだんや。でも、あつさりあいつの両親に反対されてん……でも俺たち、離れることなんて出来へんかった。両親はあいつを見合いさせて、俺から遠ざけようとしたけど、それを知って、俺は見合い会場から、あいつをかつさらったんや」

尾形が武勇伝のようにそう語る。しかしその目は、遠く懐かしそうに輝いている。

「……カッコいい」

歩が言った。

「せやる？ まあ、今日までいろいろあった。あいつもホームシックにかかったりしたけど、俺を選んでくれたんや。もう帰る気はあらへんって……これでええのかわかんけど、もうなるようになると思うって……」

歩は少し羨ましかった。佐伯には、尾形ほどの勢いはない。それは佐伯が教師という立場があるからということとはわかっていたが、それでも尾形と貴美子を自分たちに重ね、羨んだり後悔せずにはいられなかった。

「ごちそうさま。美味しかったわ。今度の週末は遅番やから、また歩ちゃんの手料理食べれるな」

尾形がすべてをたいて言った。歩は遅番の店員に、いつもおにぎりなどの差し入れをしているので、それを楽しみにしている店員も少なくない。

「ありがとうございます。これ、貴美子さんに。少しおかずも入ってるけど、あんまり無理して食べないように言ってください」

「ありがとう」

尾形はそれを受け取ると、立ち上がった。

「あ、尾形さん……」

帰ろうとした尾形を、歩が呼び止める。

「うん？」

「もう、貴美子さんの家とは連絡取ってないの？」

突然の質問だったが、尾形は頷く。

「ああ。貴美子も連絡取るつもりない言うてるし、俺も親戚とは絶縁状態になってもうて、もう貴美子しかおらへんねん。駆け落ちして流れ着いたのが、ここやからな……まあ、もうしばらくはここで世話になるやろうな」

「……どうして結婚しないの？」

「うん？ そうやな……時期が来たらするかもしれんけど、俺たちは一緒に居られれば、結婚なんてどうでもええんや。なんや、俺らが気になるんか？」

いつになく質問の多い歩に、尾形が尋ねる。

「うん。ただ、素朴な疑問で……」

「まあ、今は日々の生活で目一杯や。ほな、ごちそうさま」

尾形は家を出ていった。

「一緒に居られればか……いいな、そういう関係」

歩はぽつりとそう呟くと、料理の続きをした。

「ただいまー」

尾形が部屋に帰ると、貴美子は布団で眠っていた。

「まだ寝とるんかいな」

尾形はそう言って、貴美子に近づく。寝かせてやりたい気持ちもあるが、起きて少しでも何か食べさせたい。

「貴美子。歩ちゃんが、特製おかゆ作ってくれたで。貴美子……大丈夫か？」

尾形は熱を測ろうと、貴美子の額に触れた。その時、尾形は貴美子が冷たくなっているのに気がついた。

「貴美子……おい、貴美子。貴美子！」

尾形がどんなに呼びかけても、貴美子はもう目を覚まさなかった。

その日の夜遅く、歩が世話になっている山伏家に、中年の男女がやってきた。貴美子の両親である。

眠った貴美子のそばには、尾形がいる。

「貴美子に何をしたんや！ おまえは娘を奪っただけでは飽きたらず、殺すんか！」

貴美子の父親が、尾形を何度も殴る。

「すみません！ ほんま、すみません！」

尾形は土下座したまま、無抵抗で貴美子の父親に身を任せていた。「やめてください！ 貴美子ちゃん、急性肺炎だったんですよ。尾形君は、必死に看病してました。風邪だって、治りかけていたところだったのに……」

山伏夫人が、止めに入る。

風邪だと思っていた貴美子は、急性の肺炎で帰らぬ人となっていた。従業員は誰一人、その事実を受け入れられぬほど、急な出来事であった。

「こいつは我々から、貴美子からすべてを奪ったんや！ こいつだけは許さへん！」

貴美子の父親が、尾形を殴りながらそう言う。

それから数時間、修羅場が続いた。尾形はただ謝るだけで、何も言えない。

その後、貴美子の両親は、もうしゃべらない貴美子連れて、実家へと戻っていった。尾形は別の便で、貴美子の実家へと向かった。突然の出来事に、歩もどうしていいのかわからなかった。

数日後。尾形が山伏家に戻ってきた。

「尾形さん！」

一人きりで家にいた歩が、尾形に駆け寄る。

「……奥さんたちは、まだ仕事？」

「はい。あ、お茶でも……」

「ありがとう……」

尾形はまるで生気のない顔をしている。そんな尾形に、歩は作り立ての料理を差し出した。

「今、出来たばかりなんです。冷めないうちにどうぞ……」

「ありがとう……」

そう言うものの、尾形は何も口にしようとしなない。

「……尾形さん。ろくに食べてないんでしょう？ 顔色も悪いし、一口だけでもどうか食べてください」

歩の訴えに、尾形は音を立てて拳をテーブルに叩きつけると、堪え切れない涙を流した。

「尾形さん……」

歩の声に反応して、尾形は歩を抱きしめた。歩もゆっくりと、尾

形を抱き返す。

かつて自分を助けてくれた尾形に、何か返したかった。

「なんでここに帰ってきたんやろっ……ここに貴美子は、もうおらんのに！俺のせいだ……！」

尾形が叫ぶ。

「違う！尾形さんのせいじゃないです。そんなふう思ったら、きっと貴美子さんだって悲しむと思う……」

尾形を宥めるように、必死な様子で歩が言う。しかし、尾形は何度も首を振った。

「もともと貴美子は、身体が悪かったんや！それなのに一人きりにして、無茶させて……精神的にもあいつ、参っつたんに違いな……い……」

しっかりと歩に抱きついて、尾形が堰を切ったように泣いて言った。そんな尾形の背中をさすって、静かに歩が口を開く。

「……貴美子さんは、幸せそうでした。いつも尾形さんのことを気にかけてた。私だって、幸せそうな二人を見て、どんなに羨ましく思っ、憧れていたか……そんなふうに思わないでください」

歩の言葉に、尾形は涙を拭う。

「ありがとう、歩ちゃん……ごめんな」

そう言う尾形を、歩はもう一度抱きしめる。いつもは強がる尾形に、歩がしてやれることはこれしかないと思った。

しばらくして、山伏夫妻が帰ってきた。

「尾形さん！戻ってきてくれたのね」

夫人が嬉しそうにそう言う。そして尾形を気遣いながら、優しく微笑んだ。

「すみません。店、何日も休んでもうて……」

「そんなことはいいのよ。それで、どうだったの？貴美子ちゃんのご実家は……」

「……当然ながら、追い返されました。通夜も葬式も出られなくて、線香もあげられなかったです……」

俯いたまま、尾形が言った。その拳は固く握られ、悔しそうにしている。

「そう……」

「それだけ報告にきました」

「報告つて……ここを辞める気なの？」

尾形の心情を察して、夫人が尋ねる。

「……辞めたくはないですけど、でも……」

「辞めたくないなら、辞めないでちょうだい。我々も、あなたの帰りを待っていたんだから。ここはあなたの家同然なのよ。貴美子さんと暮らした社員寮が辛いなら、部屋を変えてもいいじゃない」

尾形の手を取って夫人が言う。その暖かい温もりが、尾形の心に安らぎを与えていた。

「奥さん。ありがとうございます……」

尾形はもう一度、涙に濡れる。尾形に帰る場所などなかった。そして、貴美子の思い出が少しでもあるこの場所に、尾形は残ろうと思った。

25、我が子……

数カ月後、夏――。

産婦人科病院に、尾形と山伏夫人の姿がある。そこには、元氣のいい産声と共に、母親の顔となった歩の姿があった。佐伯の子供は無事生まれ、男の子である。

たった一人で生きていくという不安に負けそうになりながらも、歩は優しい人たちの中で前を見つめ、今日まで生きていた。

「歩、大丈夫やったか？」

尾形が駆け寄って言う。まるで子供の父親のように、嬉しそうな顔の尾形がいる。

「ありがとう、尾形さん。大丈夫……」

ホッとした様子で、微笑みながら歩が言った。その手に抱かれた我が子が、愛おしくてたまらない。

「歩ちゃん、おめでとう。男の子だったね」

山伏夫人も、安堵の顔を見せて言った。

「ありがとうございます、奥さん。すみません、ご心配をかけて……」

「なに言ってるのよ。私も孫が出来たみたいで嬉しいわ」

山伏の言葉に、歩は我が子を抱いて頷いた。

「あ、そうや。写真取ろうや、写真」

尾形が、持っていたカメラを取り出す。

「まあ尾形さん。いつも持ち歩いてたの？」

「もちろんですわ。歩のベストショットを収めなあかんです。はい、笑って」

尾形は、歩と赤ん坊に向けてシャッターを切る。一同は笑顔に包まれていた。

函館。

「佐伯ちゃん！」

駅のホームで、一人の少年が走り寄ってきた。呼ばれた佐伯は、それに気づいて手を振る。少年は、佐伯の教える男子高校の生徒である。

「おう、どこ行くんのだ？」

「隣の駅だよ。親戚んちにちよつとね。佐伯ちゃんは？　大きな荷物だけど、旅行かよ。夏休みだからっていけないなあ」

「ちよつとな」

その時、電車がやってきた。

「あれ、東京戻るんじゃないんだ？」

男子生徒は、佐伯の乗る電車の方向を見て言った。

「ああ」

「さては、女だな？」

「ハハハ。まあ、そんなところかな。おまえも気をつけて行けよ」

「うん」

佐伯は電車に乗ると、生徒に手を振って去って行った。

歩が消えて半年が過ぎていたが、佐伯は北海道から離れずに、かな望みにかけていた。どうしても、歩を捜し出さねばならないと思った。

週末や休みになると、北海道中を捜している。時に青森に渡ったり、東京に戻って捜したりもしたが、何の情報もないままでは、歩を埋もれさせているに過ぎない。それでも佐伯は、諦めきれなかった。

二年後――。

病院の小児病棟に、歩が訪れた。

「ママ！」

歩に走り寄ってきた男の子の名は、優。「優」と書いて「ゆたか」と読んだ。二歳になったばかりの、歩と佐伯の息子である。

そんな優は生まれつき心臓が弱く、月一度の診察を義務づけられ、

運動することも走ることさえも許されていない。先日、発作が起きてからは、入院をしている。

「優、いい子にした？」

すっかり母親の顔つきで、歩が尋ねる。優は母親の姿に目を輝かせて、大きく頷いた。

「うん。苦いお薬も、ちゃんと飲んだよ」

「偉いね」

「ママ、僕のお誕生日、入院しちゃったでしょう？　ここでお祝いしてくれたけど、退院したらまたお祝いしてくれる？　ケーキが食べたいの」

優の言葉に、歩は笑って頷く。

「うん、約束する。大きなケーキを食べさせてあげる」

「本当！」

優は喜ぶと同時に、咳きこんだ。

「大丈夫？　ほら、落ち着いて」

歩の対応も、もはや落ち着いたものだった。内心はいつどうなるかビクビクしているものの、そこは母親の強さが備わっている。背中をさすっていると、すぐに優は咳を止めた。

「大丈夫ね？」

「うん……」

「そうだ。今日は何の絵を描いたのかな？」

気を紛らわせようと、歩は話題を変えて尋ねる。

「見せてあげる」

そう言って、優は近くにあった画用紙をめくった。その中には、いろいろな絵が描かれている。

優は絵を描くのが好きで、いつも画用紙とクレヨンを手放さなかった。

「これが先生でね、これがひなちゃんと大地君。こっちが婦長さんだよ」

優が指を差して説明する。まだ人物画としては乏しいが、それで

も同じ年の子供の比べれば、格段に上手い。

歩は絵を覗きこんで、指を差す。

「わかった。みんなでご本を読んでいるのね？」

「うん、そう！」

「あ、もうすぐ画用紙なくなっちゃうね。明日、買ってくるね」

「うん」

その時、尾形がやってきた。

「こんばんわ」

「お兄ちゃん」

尾形の姿を見て、優は手を振る。

「おお、優。元気そうやな。土産やで」

尾形はそう言つと、数冊の画用紙帳を差し出す。

「ありがとう！ 今ね、明日買ってくるって言つてたの」

「そうか。優は絵を描くのが好きやからな。またすぐなくなつてしまふと思つて、買ってきたんや」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「ええよ」

尾形は優の頭を撫でる。尾形の存在は優にとって、父親代わり同然となつていた。

しばらくして、面会時間の終わりと共に、歩と尾形が病院を去っていく。

別れ際には、いつもは手のかからない優もぐずるのだが、二人はそれを泣く泣く放し、家へと帰るのであった。

「いつもすみません、尾形さん……」

すまなそうに、歩が言う。

「なに言つとるんや。優はみんなの子供同然やからな。奥さんなんて、孫みたいに溺愛してるやろ？ 優には甘いんやからなあ」

「ありがとう……」

「ええつて。それより、退院決まつたんか？」

「うん。週末にもって……」

「よし。今年は誕生日もろくに祝えんで、可哀想やったからな。退院したら、ドカンと盛大にやろうな」

「ありがとう、尾形さん」

毎日を不安の中で過ごす歩は、そんな尾形の優しさで救われていた。

次の日。優が入院する病院の病棟では、一人の男が辺りを見回していた。佐伯だった。

佐伯は小児病棟に差しかけると、フリースペースで遊ぶ子供たちを見て、無意識に微笑む。すると、佐伯の方に小さなボールが転がってきた。その後を、小さな女の子が駆け寄る。

「はい」

佐伯がボールを差し出すと、女の子が笑って受け取った。

「ありがとう」

女の子はそう言うと、そのまま去っていった。

不意に歩のことを思い出す。子供が無事に生まれていれば、もう二歳になっているはずだ。男の子か女の子かもわからないが、佐伯は子供たちを見て、自分の子供と重ねていた。

「返してよ！」

その時、そんな声が聞こえて、佐伯は我に返った。窓際では、一人の男の子がもう一人の男の子のクレヨンを取っている。

奪った男の子が佐伯の方に走ってきたので、佐伯はその男の子を静止した。

「返して！」

「優君、走っちゃ駄目よ！」

看護師が、クレヨンを取られた男の子の方に駆け寄り、止める。止められた男の子は、まさしく佐伯の息子、優だった。しかし佐伯は、そんなことを知る由もない。

佐伯は、一瞬間こえた「ゆたか」という名前に反応したものの、

すぐに抱き止めた男の子の方を見つめた。

「駄目だよ。ちゃんと返さないかね」

佐伯の言葉に、掴まれた男の子は俯いている。

「だって優君、絵ばっかり描いてつまんなかったんだもん……」

「でも、そんなことをしたらいけないだろう？」

「……うん」

「ちゃんと謝るんだよ」

「……ごめんね」

男の子は佐伯の言葉に頷くと、優に向かって謝った。優は首を振る。

「ううん。病気が治ったら、いっぱい遊ぼうね」

優の言葉に、男の子は嬉しそうに頷くと、優と手を繋いで歩き出す。

「あ、ぼうや。これ……」

佐伯は、取り返したクレヨンを優に差し出す。

「ありがとう！」

優の笑顔に、佐伯は一瞬、ドキツとした。優はそのまま、さっきの男の子と一緒に、窓際で絵を描き始めた。

「どうもすみません」

佐伯に向かって、先ほど優を止めた看護師が言った。

「あ、いえ……」

「ご面会ですか？」

「いえ、ちよつと迷ってしまつて……一般の受付はどちらですか？」

佐伯が苦笑しながら尋ねる。

「このまままっすぐ行つたところですよ。ここは少し入り組んでいて、迷う方が多いんですよ。もう少し行けば、わかるはずですから」

「そうですか。ありがとうございます」

佐伯はそう言つと、そのまま歩き出そうとした。その時、優が手を振っているのが見えたので、佐伯は優に手を振り返し、そのまま去つていった。

初めての、親子の対面であつた。

26、優

病院を出た佐伯は、街の中で咳きこんでいた。昨夜、電車の中で倒れ、そのまま一日入院した。原因は風邪をこじらせたことと、極度の疲労である。一日休んで点滴をしたので回復したものの、風邪が治っているはずもなく、寒さが一層、佐伯の体力を奪っていった。

優の病室。歩が着替えをしまっていると、優が検査から戻ってきた。

「あ、ママ！」

「お帰り、優。検査だったのね」

「うん。明日、ちゃんと退院出来るって」

「そう。よかった！」

歩もほつと胸を撫で下ろし、喜ぶ。

「今日はね、龍君と一緒に絵描きしたよ。見て」

日課のように、優が画用紙を開いて見せる。

「わあ。今日もいっぱい描いたね」

「うん。これ、お花。これ、お日さま」

「上手に書けてるね。この人は？」

歩が画用紙をめくっていくと、一人だけ描かれている人物画があった。

「それね、お兄ちゃん」

「お兄ちゃん？」

「龍君と遊んでる時ね、龍君が僕のクレヨン取っちゃったの。その時、取り返してくれたんだよ」

その絵はまさしく、佐伯の姿だった。だが、絵だけでは歩が気づくはずもない。

「そう。取り返してくれて、優は嬉しかったのね。誰かのお父さんかな？」

「わかんない」

「そう。でも、よかったね」

「うん」

「さあ、そろそろ寝ようね。明日は予定通り退院だから、早く寝なくちゃ」

ベッドに入った優は、歩を見つめる。

「ママもいる？」

「うん。優が眠るまで、ずっとそばにいるからね」

「よかった。おやすみ」

「おやすみ」

優はそのまま寝入ってしまった。歩は出しっぱなしの画用紙をしまつと、身の回りの片付けを始める。

優が佐伯と出会っていたことなど、歩は夢にも思わなかった。

次の日。優は無事に退院した。

「ママ。尾形のお兄ちゃんは？　一緒にお迎えにきてくれると思ったのに……」

尾形が迎えにこなかったことで、優は残念そうにしている。

「お仕事よ。でも、今日は優の誕生日と退院のお祝い、盛大にしてくれるって」

「本当？」

「うん」

「ママ。お菓子食べたい」

歩の腕を引っ張って、優が言う。

「お菓子なら買ったよ」

「本当？　チョコも、飴も、アイスも？」

優の言葉に、歩は苦笑しながらも、退院の嬉しさを隠せない。

「わかった。じゃあ、スーパー寄って帰ろうか」

「うん！」

二人はそのまま、スーパーへと寄った。優は久々の外の世界に、

興奮したようにはしゃいでいる。

「ママ、早く」

「そんなに急がないで。ほら、カゴを……」

その時、優が歩の手から離れて、突然走り出した。

「ゆ、優、待って！ 走らないで！」

歩の言葉に、優は反射的に止まろうとしたが、その勢いで思いきり倒れてしまった。

「優！」

その時の歩の顔に、血の気はなかった。脳裏に医者言葉が響く。『優君の症状は改善されていません。手術は緊急を要するというものでもありませんし、今の優君の健康状態では、耐えられない手術になると思われます。このまま入院された方がいいでしょうが、優君は家に帰ることを願っていますし、家で安静に出来るならば、退院しても構いません。しかし、発作も頻繁に起こっています。もしまた大きな発作があれば、命の保障はないとみてください……とにかく安静に。リラックスさせて、少しでも体力を回復させてあげてください』

「優！」

歩が駆け寄ると、優は発作を起こしていた。

「優！ 優！」

歩はすぐに、医師に教えられた応急処置を施すものの、一向に回復しない。

「優、しっかりして！ 頑張るのよ！」

そうこうしているうちに、救急車がやってきた。慌しい中、優は病院へ逆戻りとなっていた。

知らせを受けた尾形と山伏夫人がやってきた時、歩は霊安室で優を抱きしめたまま、離れようとしなかった。その姿を見て、二人は声を失う。

「嘘や……嘘やろ！」

あつという間の出来事だった。優は発作を起こしたまま、改善の余地なく死んでいった。わずか二年の人生だった。

歩はこれ以上ないというほどの悲鳴に似た泣き声を上げ、優を抱きしめたまま声を枯らしている。

「あ……歩……」

尾形が話しかけても、歩は反応などしない。しばらくそのままにしようと、尾形と夫人は霊安室を出ていった。

「なんで優ちゃんが……あんなにかわいくて、元気な子が……」

廊下の長椅子に座りながら、山伏も泣き崩れた。そんな山伏の背中をさすり、尾形も肩を落とす。

「……奥さん。俺がついてますから、奥さんは一度、帰った方がええですよ。このままだても、辛いだけでしょう。準備もいろいろあると思いますし……」

「そうね。何かあつたら、すぐに知らせてちょうだい……あなたは大丈夫？」

「俺がしっかりせんと、歩が……」

「そうね……歩ちゃんを頼むわよ」

尾形は山伏を見送ると、もう一度、霊安室へと入っていった。

「歩。そろそろ優を離さんと。一緒に家へ帰ろう……」

そう言う尾形に、歩がゆっくりと顔を上げる。何か言いたそうな歩だが、声を枯らして声が出ないようだった。

「歩！」

尾形は思わず、歩を抱きしめる。

「可哀想やけど……忘れるんや。早く忘れるんや！　そのためなら俺、なんでもしたる。優の分も、俺が……」

「いやあ！」

尾形から離れ、かすれた声で歩が叫ぶ。現実を受け入れられず、歩は泣き叫んでいた。そんな歩を、尾形は抱きしめることしか出来ない。

「歩。俺がおるから！　おまえのこと、絶対守つたる。歩！」

そんな尾形の声を聞きながら、歩はそこで気を失った。

早朝。緊急入院をした歩のそばには、片時も離れずに尾形がいた。そこで、歩が目を覚ました。

「歩。目、覚めたか？」

尾形が声をかける。しかし歩の目は虚ろで、尾形を見つめている。

「……」

「大丈夫か？　ここは病院や。覚えてるか？」

「……あなたは？」

歩の言葉に、尾形は驚きに目を丸くする。

「……俺がわからんのか？　ほんまか？」

歩は首を振り、俯いたまま、放心状態でその場にいた。

自分がなぜここにいいのか、何をしているのか。現実を受け入れられず、自分は何者なのか、今の歩には、それすらわからなかった。

「歩」

「……歩？」

歩が言った。尾形は歩の肩を抱き、しっかりと見つめる。

「おまえ、自分のこともわからんのか？」

歩は首を振る。力もなく、生気もなく、ただ俯いていた。

「じゃあ、優のことは？」

「……ゆたか？」

そこで、歩はハツとした。

「優……優は？　優！」

我に返ったように、歩がそう叫ぶ。しかし、様子はいつもと違う。また。

「だ、大丈夫や。優は家に帰ったで。奥さんが通夜も葬式もやってくれるって……」

「家？　お葬式……優……」

歩はぶつぶつと呟いている。

「まだ思い出さんのか？　なんでもええから、覚えていることを言

つてみてや……」

尾形の言葉に、歩は頭を抱えた。必死に何かを思い出そうとするも、頭痛に耐え切れず、何も思い出せない。しかし優のことは、不思議と思い出が溢れ出してくる。

「……優と一緒にスーパーに行つて、家に帰ろうとして、そうしたら。そう、したら……」

歩はそう言いながら、どんどん興奮して涙を流した。

「そうしたら、優が走つて……走つて、私が……あ……あ……！」

「わかった！ もうええんや。落ち着け、歩」

「あなたは誰？ 私は？ 何もわからない……もう嫌！」

興奮したまま歩が叫ぶ。そんな歩を、尾形は必死に抱きしめる。

「じゃあ、覚えてるのは優のことだけなんやな？ 自分のことも、優の父親のことも、両親のことも、何も覚えてないんやな？」

その言葉に、歩はゆっくりと頷いた。

「わからない。頭が痛い……」

「ええんや……思い出すことなんか、何もあらへん。思い出したくないから、きつと忘れてしもたんや。人生リセットや」

尾形が言つた。しかし歩は顔を強張らせたまま、優を失つた悲しみと絶望に、打ちひしがれている。

「ええか。おまえの名前は、後藤歩や。俺は尾形龍太郎。俺たちは優の両親や。夫婦同然の間柄や」

尾形は、歩にそう嘘をついた。

「……あなたが？」

優の父親ということに、歩は少し疑問の目で尾形を見つめる。しかし何も思い出さない。尾形は頷いて、言葉が続ける。

「そうや。俺たちが愛し合つて生まれた子やろ？」

「……わからない」

「思い出さなくてもええ。これから新しく、思い出作っていけばええんや……」

尾形が歩を抱きしめると、歩はそのまま眠ってしまった。

尾形はとつさに吐いた嘘に後悔しつつも、これでいいのだと自分に言い聞かせた。

27、再会

「やっぱり……記憶喪失なんですか？」

しばらくして、医師にそう告げられた尾形が、落胆して言った。

「ええ。一時的なものだとは思いますが、それがどの程度なのかはわかりません……しかし、相当なショックを回避するための手段だと思われます。しばらく不安定な時期が続くと思われますので、目を離さずに安静にさせてください。安定剤も投与しますが、様子を見るためにも数日、入院させましょう」

「はい。お願いします……」

尾形はどうしていいのかわからなかった。だが、歩を支えたいと思った。

歩は眠ったり起きたりの生活を繰り返していた。起きてても不安定さが残り、薬に頼る生活が続く。覚えていることといえば優のことくらいで、それ以外の記憶はすべてなくしてしまっていたが、尾形や山伏たちの暖かさに触れ、次第に今の状況を受け入れられるようになっていた。

結局、一週間の入院生活を送った歩が、山伏家に戻った時には、唯一覚えている優の葬式も何もかもが終わり、残っているものは部屋に残された、優の描いた絵やぬいぐるみ、そして位牌だけであった。

歩は退院後も、精神安定剤を飲みながら、普段の生活へと徐々に戻っていったが、記憶は戻らなかった。だが、片時も離れずに看病してくれる尾形にだけは心開いていく。優の父親や、自分の恋人としての自覚はなかったが、それも段々そう思うようになっていった。山伏夫妻は、尾形の吐いた嘘に疑問を持ちながらも、今の歩を支えてやれるのは尾形しかいないと踏み、何も言うことはなかった。

数カ月後。世間は年末を迎え、活気づいていた。

佐伯は冬休み早々に、夏休みに一度来たきりの、歩のいる町付近にやってきた。それは、夏休みに風邪と疲労で、この町を散策できなかったからである。

しかし今回もまた佐伯は風邪を引いており、それ以上に、佐伯の焦りと不安は、疲労という形で重なっていた。

「ヤバイな、熱まで出てきたみたいだ……こんなところで倒れたら、シャレにならない」

雪景色の町をフラフラになって歩きながら、佐伯は自分の額に手を当てる。咳が止まらず、気分も悪い。

「クソッ……」

佐伯はめまいと共に、近くのガードレールに寄りかかると、咳こみながらその場にしゃがみこみ、空を見上げた。

「歩……」

そこに、佐伯を覗きこむ女性の姿が飛びこんできた。佐伯はハッとして、目を見開く。

そこには、歩がいる。

「あ……！」

「優！」

佐伯が言うより前に、歩がそう叫んだ。佐伯は信じられないといった表情と、やっと会えたという安堵の笑みを浮かべて、歩に手を伸ばす。

「あ……ごめんなさい。そんなわけないのに……」

歩は我に返ったように、表情を暗くして俯く。

他人行儀なその言葉に、佐伯は言葉を失った。歩ではないのか……探るように、歩を見つめる。

「ごめんなさい。変なこと言って……」

「あ……の……」

無理に笑ってそう言う歩に、佐伯はそれ以上何も言えずに、観察を続ける。

「大丈夫ですか？ 具合が悪いんですか？」

歩は佐伯が伸ばしていた手を握る。その手はとても暖かく、佐伯は知らず知らずのうちに、涙を流していた。歩はそれを見て、ポケットから出したハンカチで佐伯の涙を拭う。

「……熱があるみたいですね。立てますか？ うち、すぐそこなんです。少し休んでいくといいですよ」

佐伯を見ても何も思い出さなかったが、歩はなぜか声をかけずにはいらなかった。

あまりに他人行儀な歩に、佐伯はゆっくりと口を開く。

「……君は……？」

「私は歩です。後藤歩」

素直に歩がそう言った途端、立ち上がろうとした佐伯は、ガードレールに倒れるようにして座りこんだ。

「大丈夫ですか！」

「……俺がわからないのか？」

二人の空気が止まる。

「えっ……？」

歩の純粋な驚きに、佐伯はゆっくりと立ち上がった。歩は佐伯を見つめている。

「……私を知ってるの？」

「嘘だよ。あまりに君が……俺の知り合いにそっくりだったから……」

様子を見ようと、佐伯が静かにそう言う。その言葉に、歩も微笑んだ。

「なんだ。それなら、私も思いました」

「……俺が、君の知り合いに似てるのかい？」

「ええ。知り合いついていうか……息子なんです。もう、死んじゃったけれど……」

「え……？」

二人の間に沈黙が走った。佐伯は目を丸くしたまま、立ち止まる。

佐伯の態度を気に留めず、歩は涙ぐみながら、それを堪えて微笑んだ。

「半年前に、病気で……あの子が生きてたら、きっとあなたみたいになるって思ってた、思わず声をかけていたんです……ごめんなさい気を悪くしないでください。私、あの子がいなくなってからおかしくて、男の子を見る度にあの子だって勘違いしたりして……今回も多分、それと同じです……」

「……本当に……死んでしまったの？」

信じられない様子で、佐伯が尋ねる。それと同時に、どうしようもない悲しみがこみ上げてきた。

「ええ。私がついていながら……とにかく家に行きましょう。もう決めたんです。私の前で、人は死なせないんだから」

「……」

佐伯は、歩の後をゆつくりとついていく。歩に違いなかったが、記憶を失っているのにはすぐに気がついた。そしてそのまま、少し歩いたところにある一軒家へと案内された。

「……ここが家？」

「はい、パチンコ屋のご夫婦と一緒に。ずっとお世話になっているんです。どうぞ」

歩は自分の部屋に佐伯を通すと、すぐにストーブへと火をつける。「男の人を連れこんだなんて知ったら、きっと尾形さんが怒るだろうな……でも、あなたは特別です。優に似てるんだもの。ちよつと待っててくださいね。お茶、持ってきます」

歩はそう言うと、部屋を出ていった。佐伯は重い身体をベッドに寄りかからせ、辺りを見回す。やりきれない思いでいっぱいだった。生まれたはずの息子はすでに亡くなっており、やっと見つけた歩も記憶を失っているという事実には、落胆の色を隠せない。

その時、ふと棚に置かれたオルゴールが目についた。それは佐伯も同じ物を持っている、二人にとって思い出の品である。

「持っていたのか……」

佐伯が視線を逸らすと、近くに並んだ数枚の母子の写真が目についた。

それを見て、佐伯はハツとした。

「この子は……」

佐伯は、忘れてはいなかった。半年前にこの町へ来た時、病院で出会った男の子である。

そこに歩が、お茶を持って戻ってきた。

「ちゃんと横になってなきゃ駄目ですよ」

「ああ、あの、この写真……」

「ああ……私と息子です」

それを聞いて、佐伯は写真をまじまじと見つめる。

「……この子が……」

「おかしいけど、あなたにどことなく雰囲気似ていませんか？
あの子、生まれた時から心臓が弱くて、でも、わがままなんて言ったこともないし、手のかからないいい子だったんですよ……」

佐伯は写真立てを握り締めたまま、言葉にならずに涙を流した。
悔しくて、自分が許せない。

「……どうして泣いているんですか？ 同情してくれているんですか？」

「いや……」

見知らぬ佐伯の涙を見て、歩もつられて泣けてきた。

「なんだか、初めて会った気がしないな。変な人……」

歩がそう言うと、佐伯は思わず歩を抱きしめた。

「ごめん、少しだけ……少しだけ……」

佐伯は止まらない涙を、歩と共に流した。

そしてしばらくすると、歩から離れて涙を拭う。

「ごめん。急に……」

佐伯が言った。その顔は、真剣でいて辛そうにしている。
歩にとっては見知らぬ男に抱きしめられたことになるが、嫌な感

触はなかった。

「……いえ。さあ、お茶を飲んだら一眠りしてください。やっぱり熱があるみたい。薬切らしているの、すぐに買ってきます。後でおかゆでも作りますね」

歩はそう言つと、立ち上がった。佐伯はまだ現実を受け入れられずにいたが、ゆっくりと口を開く。

「……俺のことを知らないのに、どうしてここまでしてくれるんだい？」

「……わからない。でもあなたは、安全な男の人だと思ったから……信用してるんですから、お願いします」

「ああ」

歩の言葉に、佐伯は何度も頷く。

「じゃあ、どうぞ一眠りしてください。おやすみなさい」

「ありがとう……」

歩は部屋を出ていった。

記憶を失っているはずの歩だが、佐伯には警戒心など感じなかった。その不思議は、歩自身も感じていた。それは、かつて二人が恋人同士だったことが、深く支えていたからなのかもしれない。

28、会話

しばらくして、いつの間に眠ってしまった佐伯が目を覚ますと、そばには歩が座って本を読んでいる。

「あ、起きました？ よく寝てましたね」

「よかった……夢かと思った」

佐伯が安堵の笑みを浮かべて言う。

「え？」

「いや……いつの間にか眠ってしまったみたいだね」

「いいんですよ。でも、さっきより大分顔色もいいみたい。今、おかゆ持ってきてますね」

歩が去っていくと、佐伯は腕時計を見つめた。眠ってから、もう二時間以上経っている。頭痛や寒気はあるものの、気分はよかった。そこに、歩が食事を持ってくる。

「どうぞ」

「ありがとう……」

そう言う佐伯の顔を、歩がじつと見つめた。

「……え？」

「あ、ごめんなさい。やっぱり息子に似てるかなって思って……ごめんなさい。私、あの子が死んでからおかしいの。でも、あの子が生きてたら、絶対あなたみたいに男前になってくれると思うわ」

佐伯が苦笑いすると、歩に尋ねる。

「ゆたかっていうの？ その子……」

「ええ。優しいっていう字で、ゆたか。誰がつけたかも覚えてないんだけど……」

「……記憶喪失なのかい？」

疑問の核心に触れるように、佐伯が尋ねた。歩は小さく頷く。

「ええ。半年前から……優が死んだ日におかしくなっちゃって、尾形さんが言ってた。一時的なものらしいけれど、いつ戻るか一生戻ら

ないのかはわからないって……」

「尾形さんというのは？」

「私の恋人……らしいです。らしいなんて変だけど、私、優のこと以外覚えてないんです。後藤歩って名前だって、本当かどうかかわらない……でも、尾形さんが優の父親なんです」

「え……？」

「あの子が亡くなって不安定な時も、いつも尾形さんが居てくれた。だから残りの人生、優がいなくても、尾形さんと二人で生きていくって決めたんです。しっかりしないと、優に笑われちゃうと思うし……」

歩が静かに笑ってそう言った。佐伯は小さく息を吐くと、歩を見つめる。

「そう……その人は、一緒に住んでるの？」

「いえ、彼は近くの社員寮に。ここへ二人で駆け落ちして来たらしいんですけど、私は妊娠していて大した仕事も出来ないし、店長夫妻の手助けをすることが多かったので、人がよく出入りするここに居させてもらってると聞いています」

歩の現状を知ろうと、佐伯は質問を続ける。

そんな佐伯に、歩は正直に話した。また自分の素性を言うことで、記憶が戻るかもしれない、楽になれるかもしれないと思った。

「パチンコ屋で働いているの？」

「はい。今日は早番だから、早くに終わって……」

「ずっとここに……？」

「もう三年くらいになるそうです」

「そう……」

「あ、そうだ。あなたの名前を聞いてなかったですね。なんて呼べばいいですか？」

今度は歩が尋ねた。佐伯はゆっくりと口を開く。

「……豊。佐伯豊」

「嘘……あなたも、ゆたかっというの？」

歩が驚いて言った。少し興奮した様子で、佐伯を見つめる。

「ああ。偶然、かな。俺は普通の、豊という字だけだね」

「そうだったんですか……きつと、うちの子が会わせてくれたんだわ。じゃあ、豊さんって呼んでいいですか？」

「ああ……」

歩は無邪気に喜んでいる。息子と同じ名の佐伯に出会えたことが、奇跡のようで嬉しかった。

「……俺もこの子に、一度だけ会ったことがあるよ」

写真を見つめながら、佐伯がそう言う。

「え？」

「半年くらい前……俺は同じ目的でこの街に来たんだ。その頃も風邪を引いていて、その上疲労で倒れて、病院へ運ばれたんだ。一日入院しただけで済んだけど、退院の日、たまたま通りかかった小児病棟で、足が止まったんだ……」

佐伯は当時を思い出し、目をつむる。

「そうしたら、その子ともう一人、男の子が遊んでいてね。男の子が、優君の持っていた画用紙を掴んで走り出したんだ。ちょうど俺の方に走ってきたから止めて、返してあげたんだよ……」

「ああ！ 私も知ってます。優に聞いたもの！」

歩はそれを聞いて声を張り上げると、ハッと何かを思い出し、近くに置かれていた画用紙帳をペラペラとめくり、一枚を破って佐伯に差し出した。

「それ、優が書いたあなたの絵です」

「俺の？」

佐伯が驚いて受け取る。

「絵の好きな子で、その日にあったことを描いて見せてくれたんです。あの日も、あなたが画用紙を取り返してくれたこと、そんなことがあっても友達と仲直りが出来たことが嬉しかったらしくて。それに、あなたのことが印象に残ってたんだと思います。嬉しそうに話してたから……その絵、よかったらもらってください」

佐伯は堪らず、もう一度涙を流した。佐伯が自分の境遇に同情してくれていると思いこんでいる歩は、つられて涙を流す。

「嫌だ、涙もろいんですね……私まで泣けてきちゃう」

そう言いながらも、歩の涙もとどまることを知らない。

その時、呼び鈴が鳴り、二人は現実に戻った。

「あ……ちょっと待っててくださいね」

歩は涙を拭うと、慌しく玄関へと走っていった。遠くで話し声が聞こえて間もなく、部屋に尾形が入ってくる。

「さっき話した尾形さんです。この人は、佐伯豊さん。ね、優に少し似てない？」

互いを紹介して、歩が尾形に尋ねる。

「うーん、そうか？」

尾形が渋って、佐伯を見つめる。

「似てると思うんだけどな……あ、尾形さん。私、ちょっと店に差し入れてくるね。すぐ戻るから、後をお願い」

「ああ……」

歩はそう言うと、家を出ていった。佐伯はベッドから立ち上がるのと、尾形の前に立つ。

「唐突で悪いけれど……あなたは俺のことを知っているんですか？」

佐伯がそう言うと、尾形の顔が変わった。その態度に、佐伯の表情も変わる。

「あ、あんたやっぱり……あの“豊”なんか？」

「俺を知っているんですね？　じゃあ、あの子は……歩に間違いないんですね？」

佐伯が言い終わらないうちに、尾形は佐伯を突き飛ばした。

「今更、なんや言うねん！　おまえの出る幕やない。もう歩は俺のもんや！」

「何を言ってるんだ。歩は記憶を失っているんだぞ。それを、子供の父親だなんて嘘ばかり並べて！」

声を荒げる尾形に、佐伯も引き下がらない。

「俺は歩が好きや。歩かて、俺を必要としてくれとる。あんたの出番は終わったんや。とつとと失せる！」

「なんだと！」

二人は互いの胸元を掴み合う。

「歩はあんたの記憶は一切なくしとる。あんたは歩に必要ないんや。歩かて、あんたと再会したつて、ちつとも思い出さんかつたやろ。あんたがいない間、俺たちにはいろいろあつてん。そつとしいたつてくれや」

尾形の言葉に、佐伯は小さく首を振る。

「俺は歩を捜してた。今までずつとだ！ あの子の両親だつて心配してる。歩が北海道にいる可能性が薄れてきても、俺は北海道に転勤して、この三年間ずつと歩を捜してきたんだ。歩の記憶が戻らないなら、それでもいい。だけど真実を教えてやつてくれ。俺は今でも歩を……」

その時、尾形がカツとなつて、佐伯を殴つた。

「あんたの出る幕やない言うとるやろうが！ だいたい、あんたは歩を一度捨てた男やろ。俺は歩が好きやねん！」

次の瞬間、佐伯が尾形を殴り返した。

「俺は歩を捨ててなんかない！ 卑怯じゃないのか、そんな記憶を植えつけて！」

「なんやと！」

「何してるの！」

そこに、帰つてきた歩に気づいて、二人は止まつた。

「歩……」

「尾形さん、この人は病人なのよ。原因は何？ 初めて会った人が殴り合いの喧嘩なんて！」

顔を顰めて、歩が尾形に尋ねる。佐伯と尾形は、互いに目を逸らした。

「……男には、初対面もなにもあらへんのや」

「まったく、あなたも病人のくせに無茶です。また熱が上がっても

知らないから。尾形さんが来たし、車で病院まで送ります」

「……いや、大丈夫だよ。一人で帰れるから」

歩を見つめて、佐伯が答える。

「駄目よ。心配なもの」

「ああ……送ったるで」

尾形もそう言うが、佐伯は首を振る。

「いいんだ。ホテルに戻るよ」

「ホテル？ 観光かなにかですか？」

「ちよつとね……」

「……どのくらいいるんですか？」

「冬休みが終わるまでかな……」

歩は佐伯に興味を持つて質問を続ける。ここまで面倒を見た佐伯と簡単に別れるのが、なんだか寂しい気がした。

「会社の方ですか？」

「いや。教師だよ」

「学校……の先生？」

「ああ……」

正直に答える佐伯に、歩はもっと興味が湧いてきていた。本能的ななにかが、佐伯と離れるのを拒んでいるかのようである。

「すごいですね。よかったら、ホテルじゃなくてここにいたらどうですか？ 優と偶然会ってたり、同じ名前だったり、もっと偶然があるかもしれないもの。いろいろ話が聞きたいです。ここまで関わったんだし、店長たちも賛成してくれると思います」

「歩、こいつは男やぞ。おまえにもしものことがあったら、どないすんねん」

歩の言葉に、尾形が口を挟む。

「わからないけど、この人は大丈夫のような気がするの」

「あほか。そんなことあるかい」

「ありがたいけど、ホテルに戻るよ。そうそう世話になってはいられないから。でも……また挨拶がてら、寄らせてもらってもいいか

な？」

佐伯は笑ってそう言つと、自分の荷物を持ち上げた。歩は納得して頷く。

「もちろんです」

「ありがとうございます……じゃあ、お世話になりました」

「ああ、車出したる。ホテルまで送るわ」

部屋を出ていく佐伯を、尾形が追いかける。歩は佐伯を見送ると、不意に悲しい思いに駆られた。

29、重すぎる現実

車の中では、尾形が運転をしながら、ちらちらと佐伯を見つめる。

「……なに？」

そんな尾形に、怪訝な顔で佐伯が尋ねた。

「いや……意外とあっさり引き下がったからな」

「そりゃあ、あいつの中では、俺は他人だから……」

「へえ。意外と理解力あるやん」

「まあ、あそこにいれば、いなくなるようなこともないだろうし……」

……

歩を捜し続けてきたという佐伯の前に、尾形は佐伯を観察するように見ていた。

歩と出会ったというのに、佐伯は案外落ち着いていて、遠くを見つめたまま、難しい顔をしている。

「ずっと捜してたって、どこをや？」

「……北海道中。休みを利用したりしてね。でも、さすがに広くて何度も諦めそうになった。東京に戻ってるかもしれないとか、いろいろ考えたけど、やっぱりいたんだな……」

「……歩の両親には伝えるのか？」

「いや、もう少し待つよ。今は俺も気が動転しているし。でも少ししたら教える……ご両親はもう半ば諦めていて、今は捜すことはしていないんだ。でも歩に兄弟はいないし、歩の両親は俺からの連絡を待ってる……歩は俺と別れてから、ずっとあそこに？」

今度は佐伯が尋ねた。

「ああ。流れ着いたように、公園のベンチに座ってた。風邪をこじらせとったけど、病院には連れて行くな言って、目の前で気を失ったんや……あれからずっと、あの店長夫妻の家で世話になっとる。あの頃は、俺にも恋人がおったけど、優みたいに病気で死んでいった……優が生まれた時、俺は父親みたいに喜んだんや。歩を守りた

いと思ってる……」

尾形が正直に言った。佐伯は流れる景色を眺め、質問を続ける。
「優って……名づけたのは、歩？」

「ああ。男の子やったら、ゆたかやって決めてる言うてた。でも、同じ字じゃ芸がないからって、一緒に調べたで」

「そう……」

「……あんたは本当に、優の父親なんか？ 歩とは、教師と生徒の関係やったんやろう？」

尾形の言葉に、佐伯は小さく苦笑した。

「そうだよ……軽蔑するか？」

「ああ」

佐伯は、静かに目をつむる。

「ああ、俺だってわかってたんだ。許されない恋愛だって……でもお互い惹かれ合って、もう止められなくなってた……それがバレて歩と離れなきゃならなくなった時、俺は正直ホッとしたよ……悲しいけれど、歩が卒業したら迎えに行くつもりだった。でも、歩は耐え切れなくなつて家に来て、すれ違って……」

佐伯はまぶたに手を乗せ、ひとり言のように過去を振り返る。

「歩が北海道にいと知ってしばらくして、俺は北海道に転勤することが出来た。それから、長期の休みはもちろん、週末には北海道中を回つてた。さすがに広いし見当がつかなかったけれど、こうして再会することが出来た……叩きつけられたのは、予想以上の落胆しかなかったけど……風邪を引いていてよかった。全部、嘘みたいだ……」

そこで、車は佐伯の泊まるホテルに着いた。

尾形は押し黙ると、佐伯を見つめる。今まで、歩を捨てた酷い男としてしか思っていなかった。しかし実際に出会った佐伯は、今でも歩を愛しているのがわかる。佐伯を哀れだとも思った。

「……また顔出せや。一応、俺の連絡先教えておくわ」

「ああ、俺も」

二人は連絡先を教え合つと、それぞれ重い心で帰っていった。

ホテルに戻った佐伯は、尾形に殴られた頬を冷やししながら、今日のことを振り返った。歩と出会えた安堵と嬉しさがこみ上げる反面、優の事実はまだ受け入れられない。また尾形のこととは、今まで歩を支えてくれた男なのだと認識していた。

一人になり、佐伯は突きつけられた現実を前に、自分を悔いた。

尾形が歩のもとへ戻ると、歩は本を開いたまま、ぼうつとしていた。

「歩？」

「尾形さん……」

我に返ったように、歩が微笑む。

「……送ってきたわ」

「うん。ありがとう」

「どうしたん？」

「ううん。優のこと、思い出しちゃって……」

「ああ……」

尾形が歩を察して言う。記憶が戻らなかったにしても、歩の佐伯に対する態度は、他の人間とは明らかに違う。それは説明しがたいなにかが、歩の奥底にあるに違いない。

「ごめんね。勝手に男の人、連れてきちゃったりして……」

「いや。でも、あいつだったからよかったものの、氣いつけるや」

「うん。でもさつき、どうして喧嘩なんて……」

歩の言葉に、尾形は押し黙った。

「……男には、いろいろあるんや。あれが男の挨拶や。でも俺たちは、もうただの知り合いになったから、心配すんな」

「そう。ならいいけど……」

「……歩。もし、おまえの記憶が戻ったら……」

尾形はそう言いかけて、やめた。

「え？」

歩は尾形の顔を見つめるが、尾形が何を言おうとしているのかはわからない。また、その話の続きを聞くのが少し怖く感じる。

「いや、なんでもない。帰るわ……」

「あ、夕飯は？」

「その辺で食べる」

「尾形さん？」

「……あいつ、ほんまに優に似とったな」

尾形が苦笑して言った。

「……うん」

「ほな、おやすみ」

「おやすみなさい……」

尾形は寮へと帰っていった。

残された歩は、記憶をなくして初めて、意味のわからぬ胸の高鳴りを覚えていた。

数日後。夕方、歩のもとに佐伯がやってきた。

「豊さん」

「どうも……」

「私も今帰ったところなんです。どうぞ上がってください」

歩は笑顔で、佐伯を招き入れる。佐伯はケーキの箱を差し出した。

「おじゃまします。これ、お土産」

「ありがとうございます。そんなのいいのに」

「世話になったからね」

二人は、リビングへと入っていった。

「適当に座ってください」

歩はテキパキとお茶を差し出し、佐伯の前に座る。

「具合は、もういいんですか？」

「ああ。病院にも行っだし、数日寝こんでたから、もう治ったよ」

「そう、よかった」

「ありがとう」

「いえ……」

お互いに心地のいい時間だった。昔のようではないけれど、二人は確実に安らぎを感じていた。

「……記憶をなくして、不便じゃない？」

突然、佐伯がそう尋ねた。歩は少し考えた後、悲しげに微笑む。

「不便ではないけど、自分が何者なのかわからないのは不安かな……」

……

「両親のことも、何も覚えてないのかい？」

「ええ。思い出そうとしても、もやがかかったみたいで、ひどい頭痛がするんです」

「そう……か」

「でも、もし生きているなら、会ってみたいとは思いますね。会ったら思い出すかもしれないし」

「……じゃあ、会わせてあげようか……」

佐伯がおもむろに、そう言った。

「え……」

「君が会いたいと思うなら、きっと会えるよ」

佐伯の言葉に、歩が笑った。

「あなたが捜し出してくれるの？」

「……望むなら」

冗談交じりの歩の言葉にも、佐伯は真剣な目をして言った。そんな佐伯に、歩も真剣な顔になる。

「不思議な人ですね。でも、なぜだか叶いそうな気がする……そうですね。もし会えるなら、会ってみたいな。ちょっと怖いけど……」

今度は真剣に、歩がそう答えた。

「そう……じゃあ俺、そろそろ行くよ」

立ち上がる佐伯に、歩もつられて立ち上がる。

「え、もう？」

「目的も達成したし……一度、家に戻るよ」

「目的？ あの、また会えますか……？」

名残惜しそうに歩が尋ねる。佐伯は優しく微笑むと、ゆつくりと頷いた。

「ああ、会えるよ。ここに来れば、会えるんだろう？」

「ええ……」

「また近いうち顔を出すよ。じゃあ……元気で」

佐伯はそれだけを言うと、家を後にした。そして近くのパチンコ屋へと向かっていく。路地から裏口を見つけると、そこにはゴミ出しをしている尾形の姿がある。

「尾形」

「おお、佐伯か。歩のところに……？」

少し身構えて、尾形が尋ねる。

「ああ、行ってきたよ」

「それで？」

「別に……これから、函館に帰るよ」

「……そうか」

「ただ、歩の両親には伝えようと思う」

それを聞いた尾形は、佐伯に駆け寄った。

「出来れば、それは止めてくれんか」

尾形の言葉を察して、佐伯は目を伏せる。

歩にも今の生活があることはわかっている。それを壊すべきではないとも思った。両親には知らせても、今は会う時期ではないのを、佐伯は悟っていた。

「……君の気持ちもわかるけど、歩の両親にとって歩は、まだ生死もわからないままなんだ。知らせれば、確かに両親はすぐに会いに来るかもしれない。歩にとってまだそれは早いと思う。だけど伝えなきゃならないと思う。肉親なんだ。本当は、すぐにでも知らせるべきだった……歩も会いたがってる」

「歩に早いんだってわかつとるんなら、知らせんや！ 俺たちの生活を壊す気か？」

佐伯は首を振る。

「だったら住所は教えない。ただ、どこら辺にいるかは教える……それならいいか？」

「……わかった。住所は教えないんやな？」

尾形は佐伯のその言葉を信じて頷いた。佐伯の気持ちもわかるが、しばらくは今の生活を壊したくはない。

「……歩を頼むよ。じゃあな」

加えて佐伯はそう言つと、尾形に背を向けて歩き出す。

「え、ええのか？ 歩を俺のもんにして」

尾形の言葉に、佐伯は立ち止まった。

「それは駄目だ。でも、このまま歩が記憶を取り戻さないまま……いや取り戻した後も、尾形を選ぶなら、俺は何も言えない……」

佐伯が険しい顔をして言った。

「……変なやつやな。おまえはもう歩の教師でもなければ、なんでもないやん。俺やったら、かつさらつてまうで」

「出来ることなら、とつくにしてるさ。教師と生徒の関係はなくなつても、過去の過ちは消えないんだ。ましてや歩の両親は、俺を一生許してはくれないだろう。それに……突然消えて、再会してどうだ！ 息子にも会えず、肝心の歩だつて、記憶をなくしてるんだぞ？ 俺にどうしろって言うんだ！」

めずらしく佐伯が取り乱して言った。佐伯には、今後どうしたらいいのかなど、今はまったく考えられなかった。

無言の尾形に背を向けて、佐伯はそのまま街を後にした。成果はあつても、足取りは重い。

その後、家へ帰った佐伯は、歩の両親に電話をかけた。歩の居場所は教えられなかったが、両親は本当に喜び、近いうちに佐伯を訪ねてくることになった。

30、失われた記憶

次の日の夜。佐伯は職場の教師たちに誘われ、飲み会へと出ていた。少しの時間でも歩を捜していた佐伯は、今までほとんどの誘いを断っていたので、歩が見つかった今、つき合いもあり久しぶりに誘いを受けたのだった。

「乾杯！」

一同はそう言っ、ビールのグラスを合わせる。佐伯の他に二人の男性教諭がいる。年が近いため、学校でもよく話す教師たちだ。

「佐伯先生。今回の休みは、お出かけにならなかったんですか？」

いつも休みとなると、長期でお出かけになるのに

そう尋ねられ、佐伯は小さく微笑んだ。

「もう行ってきたんですよ」

「そうなんですか。どちらへ？ 噂によると、行方不明の恋人捜しとか」

「ハハ……東京からこんな離れた場所でも、噂というものは広がるものですね」

冗談交じりの言葉に、佐伯は否定もせず、苦笑して答える。

「え、じゃあ本当なんですか？」

「ええ」

「へえ……行方不明とは大変ですね」

「ええ。でも、僕の場合は自業自得ですから……」

佐伯は静かにそう言っ、酒を飲み続けた。

それから数時間に渡り、飲み会が続いた。佐伯が家に帰ったのは、すでに夜中である。

家に入っ、すぐに、部屋の呼び鈴が鳴った。佐伯は真夜中の訪問者に首を傾げて、ドアを開ける。するとそこには、尾形の姿があった。

「尾形……」

「佐伯！　なんでおまえ、電話しても出えへんのや！」

「ああ、ちよつと今まで出てて……何かあつたのか？」

ただならぬ勢いに、佐伯は不安気に尋ねる。尾形は佐伯の胸倉を思い切り掴んだ。

「おまえ、裏切つたな！　歩の親に、居場所教えたやろ！」

「え……」

佐伯の顔色が変わった。いったい歩に何が起こつたというのか。

「昼間、歩の両親が来たんや。歩は有無を言わず、家に連れ戻されたんやぞ！」

「なんだつて！」

今度は佐伯が、身を乗り出して尋ねる。尾形は話を続けた。

「おまえは電話しても出えへんし、俺は歩の自宅なんて知らんからな。居ても立つてもおれんかったから、ここまで来たんや。どういうことか説明せえ！」

「……知らない。俺は住所も何も教えてない。歩の両親には、歩が見つかったことと、記憶をなくしたことは伝えたけれど、しばらくそつとしておくということで納得したはずだ。様子を聞きに、俺のところへ近々訪ねてくると言っていたが、本当にそれだけだ。歩を引き戻すなんて、そんなことは有り得ない！」

「じゃあ、どないしたつちゅうねん！」

「……わからない」

佐伯は少し考えた後、尾形を見つめた。

「とにかく入れよ。歩の実家に電話してみよう」

冷静を装って佐伯はそう言うのと、中へと入っていった。尾形はそれに続いて中へと入る。佐伯はそのまま、すぐに歩の実家へ電話を入れた。

「もしもし……夜分遅くにすみません。佐伯ですが」

『ああ、佐伯さん。ありがとうございました。無事に歩は、家に戻つてきまして……』

電話に出たのは、歩の母親である。

「どういことですか？ 昨日の電話では、しばらくはそつとしておくということになったじゃないですか」

『ええそうですが、あの後もう一度、主人と話し合ひまして、やはり会いに行く決めて……だって私は、歩の実際の母親なんですよ？ 記憶がなかるうが、娘と会うのが当然でしょう？』

開き直ったように、母親はそう言う。以前とまったく変わらぬ態度に、佐伯は思わず溜息をついた。

「それはそうかもしれませんが、彼女は記憶をなくしているんですよ？ それで……彼女は、今？」

『……部屋にいます。今はまだ、我々のことも理解出来ずに可哀想ですが、私たちと一緒に懐かしい家にいれば、すぐに思い出すに違ひありません。佐伯さんにはいろいろとお世話になりましたけど、歩があなたのことを忘れたのは好都合ですし、あなたも歩のことは忘れてください。歩はこれから、新しい人生を歩んでいかせますから』

「待つてください！ それはまた別の問題でしょう。だいたい、どうして彼女の居場所がわかったんですか？」

一歩も引かない歩の母親に、佐伯も食らいつく。

『パチンコ店と聞きましたから、片っ端から町中のパチンコ店に電話しましたの。地域だけは教えてくださったので』

「……わかりました。明日一度、伺つてもよろしいですか？」

『どうぞおかまいなく。あなたにはお世話になりましたが、我々はまだあなたを許したわけではありません。だいたい歩がこんなことになったのも、すべてあなたのせいなんですから』

母親の言葉が胸に刺さりつつも、佐伯は言葉を続ける。

「しかし今の彼女からすれば、見知らぬ人に拉致されたも同然なんです。話に聞けば、有無を言わさず連れ帰ったとか。一度様子を見に行かせてください。彼女の周りにいた人も、大変心配しているのです！」

『……わかりました。でも、一度だけですよ』

渋々、母親が言った。佐伯はそうして電話を切ると、深い溜息をつく。そんな佐伯に、尾形が顔を覗きこんだ。

「どうやって？」

「相変わらずな人たちだ……明日、東京に行ってくるよ。休みの間でよかった」

「ほな俺も連れてつてくれ。歩かて、俺がいたら安心するかもしれない」

「わかった。狭いけど、よければ今日はここに泊まっていつてくれ」

「ありがとう。でも歩、大丈夫かいな」

その言葉に、佐伯は黙りこむ。

「さあ……わからない」

「……歩の両親、最初は歩がどんな暮らしなのか見に来てただけ言うてたんや。でも歩のことを見た途端、泣き崩れおつて……自分たちが親で、ずっと捜してたつて名乗り出たんや。歩は戸惑つてた。それから父親の方が、強引につて感じて……」

「……なんとなく、わかるよ」

嫌と言うほど見てきた歩の両親だけに、佐伯にはその時の状況がなんとなく想像できる。しかし今の歩は、佐伯が知っている歩ではない。考えれば考えるほど、心配になった。

「おまえも相当、苦労したんやな。あ、このオルゴール……歩と一緒に買ったんか？」

尾形が棚の上に置かれたオルゴールに気づいて尋ねた。歩の部屋にあった物と同じだ。

「いや、同じ物を持つてるけどね」

「知つとる。いつも大切そうに、棚に飾ってたからな。連れ帰られる時も、これだけは持って帰ってたで。どうしてかわからんけど、記憶を失つても、歩にとってこれは大事な物やったんやろうな……」

「……明日は早く出よう」

「ああ」

二人はしばらく話した後、眠りについた。

次の日の朝方。二人は足早に、東京にある歩の実家へと向かっていった。

「へえ。お嬢やったんやな」

「ああ、箱入りだよ……」

尾形が歩の家を見て呟く。佐伯は苦笑すると、逸る気持ちを抑えて呼び鈴を鳴らした。すると、歩の母親が出てきた。

「佐伯さん……」

母親はうんざりした様子で佐伯を見つめ、隣にいる尾形をも睨みつける。

「彼は尾形さんです。今までずっと彼女のそばにいた人間です。一緒に来たいと言うので、連れてきました」

佐伯が一步前へ出てそう言う。母親も小さく頷いた。

「……どうぞ。主人は仕事で出かけていますが」

家の中へと通され、佐伯は口を開く。

「彼女は……」

「部屋に閉じこもったきりで……」

夫人の言葉に、佐伯と尾形の顔が曇る。

「なぜ無理やり連れ帰るようなことを……いえ、今はそんなことを言っている場合ではありませんね。彼女に会わせていただけますか？」

「ええ……でも、部屋から出ようとしません」

母親は二人を歩の部屋まで案内すると、ドアを叩く。

「歩ちゃん。北海道から、佐伯さんと尾形さんが見えたわよ。出てきてちょうだい」

夫人がその声をかけるが、部屋の中からの反応は何もない。一同は顔を見合わせる。

「歩！ もう大丈夫やで。出てきてや」

今度は尾形が声をかける。そして、佐伯も口を開いた。

「歩……」

その時、ドアがゆっくりと開き、歩は目の前の佐伯に抱きつき、泣いている。

「……大丈夫か？」

歩を優しく抱きながら、佐伯はそう尋ねる。しかし歩は何度も首を振った。

「怖い……怖い！」

しばらく歩は、佐伯の胸に顔を埋めたまま、泣きじゃくっていた。そんな光景を、母親と尾形は、見ていることしか出来ない。

その時、急に歩の全身の力が抜けた。

「歩！」

すかさず佐伯が抱き止めるものの、歩は気を失っていた。

「どないしたんや、急に」

歩の顔を覗きこんで、尾形が尋ねる。

「気が緩んだんだろう……しばらく休ませた方がいいな。きっと一睡も出来なかったんだ……」

佐伯はそう言うのと、歩を抱き上げて、部屋の中のベッドに寝かせた。初めて入るその部屋は、北海道の歩の部屋によく似ている、歩らしい部屋だ。

「……しばらく眠っているでしょうから、下でお茶でもどうぞ……」
母親がそう言うのと、一同は一階のリビングへと向かっていった。

「……昨日も連れ帰る時に、空港で倒れたんです。一応、医師には見てもらいましたが、異常はなく、精神的なものだろうと……我々も少し強引だったと、歩には悪いことをしたと思っています。でも信じているんです。私たちと一緒にいれば、必ず記憶も戻ります……」

俯きながら、母親がそう言う。その言葉に、尾形が立ち上がった。
「何を言う тонн ねん！ そりゃ、あんたらが心配してた気持ちはよくわかる。でも今の歩は、あんたらの知ってる歩ちゃうねん！ 俺と会ってから、いろいろあったんや。一人きりで見知らぬ土地に来て、子供が生まれて、死んで……記憶を失ったんやぞ！」

「やめるよ、尾形」

きつい口調で責め立てるような尾形を、佐伯が制止する。しかし、尾形の怒りは収まらないようで、佐伯の手を思い切り振り払った。

「おまえかて、そんな冷静な顔してるんやあらへん！」

尾形の目に映る佐伯の顔は、静かながらも怒りや苛立ちを発し、辛そうに自分を見据えている。

「俺のどこが冷静なんだ……昨日は居ても立つてもいらなくて、一睡も出来なかった。この三年間、俺は必死で歩を捜してきたんだ！でも、やっと再会して知ったのは、後悔しかない出来事ばかりだ……」

「佐伯……」

「……ちょっと、様子を見てきます」

佐伯はそう言うと、歩の部屋へと向かっていった。

部屋にいる歩は、ベッドで眠ったままだった。佐伯は歩を見つめると、歩の目から零れている涙を拭う。

「歩……全部、俺のせいだ。ごめん……」

寝ている歩に向かって、佐伯がそう呟く。

「ゆたか……」

その時、歩がそう言った。しかしまだ眠ったままで、うわ言だったのがわかる。

「歩……」

佐伯はそう言うと、椅子に座り、祈るように歩を見つめる。

枕元には、佐伯と同じオルゴールが置かれていた。佐伯は無意識に、オルゴールのネジを回す。やがて流れたメロディは、思い出が鮮明に思い出されるような、懐かしい音だった。

その時、歩がそつと目を開けた。目を開くなり、歩の瞳から涙が溢れる。

「歩……」

「……豊？」

「ああ」

佐伯はとつさに歩の手を握る。歩の涙は止まらずに、後から後から溢れている。

「歩」

片方の手で涙を拭いながら、佐伯はもう一度そう呼んだ。そんな佐伯に、歩は涙を流しながらも、優しい顔で微笑む。

「豊……やっと会えたね……」

歩のその言葉に、佐伯の顔が変わった。

「俺が……わかるのか？ 思い出したのか？」

「……うん……」

思わず佐伯は、歩を抱きしめた。壊れそうなくらい、強く離そうとしない。

31、もう、離さない

「ごめん！ 今まで散々辛い目にあわせて、おまえにばかり苦勞をかけて、俺は……」

佐伯の言葉に首を振り、歩は佐伯を抱き返す。

「うつん……豊も、ずっと私を捜してくれたんでしょう……？」

「……ああ」

二人は互いの顔を見つめた。何よりも大切な人の顔である。

「なんだか、不思議な気持ち……眠り姫にでもなつたみたい」

「ああ……」

「夢を見たの……」

もう一度、佐伯に抱きついて、歩が言った。

「夢？」

「そう、夢……優が出てきて、目を覚ませつて。僕は幸せだから、ママもパパと幸せにならなきゃ駄目だよって。そんな時、オルゴールの音が聞こえて……ムシが良すぎる夢かもしれないけど、本当に目が覚めたみたい……」

歩が涙を流しながら言う。佐伯は微笑みながら頷いた。

「ああ、きつと本物の優だよ。歩の記憶を取り戻してくれた。俺も

……目が覚めた」

「豊……」

その時、ドアがノックされて開いた。母親と尾形が入ってくる。

「氣いついたんか？」

尾形が歩を見て尋ねる。

「尾形さん……」

「大丈夫か？ どこもなにもないか？」

心配する尾形と母親を見つめ、佐伯は口を開く。

「……彼女の記憶が戻りました」

「え……」

「本当なの？ 歩、お母さんがわかる？」

それを聞いて、母親が歩に駆け寄る。

歩は頷きながらも、その表情は強張った。久々の母子の再会だったが、まだ素直になれない部分もある。心配や苦労をかけ続けたことがわかつている半面、無理矢理に家に連れ戻されたことは、親であつても少し許し難い。

「……うん。お母さん」

そんな複雑な思いを抱え、歩は母親を見てそう言った。後ろめたさもあり、涙腺が緩む。母親は、構わず歩を抱きしめた。

「ああ、歩……心配したのよ。本当に心配したのよ」

「ごめんなさい、お母さん……」

涙を流す歩に、尾形がゆっくりと近づいた。それに気づき、歩が尾形を見つめる。

「尾形さんも、ありがとう……」

歩の言葉に、母親は歩から少し離れる。それに代わって、尾形が歩に寄りながら俯いた。

「俺は人間失格や。おまえの記憶が戻らんかったら…… 思ってた」

「ううん。私、尾形さんがいなかったら、今頃どうなっていたかわからない。本当に感謝してます」

正直に胸の内を語る尾形に、歩は何度も首を振ってそう言った。

歩の言葉に、尾形は静かに微笑む。

「ありがとう、歩……俺は歩を好いとった。でも、もう終わりやな」

「……ごめんなさい。ありがとう……私、尾形さんには、本当に感謝しきれない。だって、ずっと誰よりも近くにいて、支えてくれた人だから……」

「ええんや。それに記憶をなくしてても、佐伯と会った時はなにかが違つたって時点で、俺の負けや。卑怯な真似して、ほんまに悪かったと思つとる。佐伯なら安心や……少しすれ違つただけで、二人は繋がったままやつたんやからな……ほな、俺はもう帰るわ。仕

事もそうそう休めんし」

尾形はそう言って、背を向ける。歩の記憶が戻った今、会わせる顔がなく居たたまれない。

「尾形さん。私……」

「歩、佐伯と幸せになれよ……ならんかったら承知せえへんからな。それから……北海道に来た時は、きつと寄ってくれな。あと困った時には、いつでも連絡してくれな」

「うん。ありがとう。ありがとう……」

そう言う歩の肩を、佐伯がそつと抱く。尾形は一同に背を向けたまま、言葉を続けた。

「ほな俺、行くわ」

「尾形」

佐伯が声をかける。なんと言ったらいいのかわからなかったが、尾形の存在は、佐伯にとっても歩にとっても、もはや大切なものになっている。

「ええんや佐伯。おまえは歩のそばに居といたってくれ。頼むわ……」

……

「ああ……連絡するよ」

「ああ。どうせおまえは、まだ北海道暮らしやろっからな。店のことは俺から言っておくけど、歩も一度、店長に電話でもしといたってくれや。じゃあな」

尾形はそれだけ言つと、そのまま家を出ていった。

残された一同はしばらく言葉を失いながらも、互いの空気を感じている。やがて、歩が静かに口を開いた。

「豊も行っちゃうの？」

「……うん」

歩の悲しそうな顔を見て、佐伯は少し俯くと、母親を見つめた。
「後藤さん。少しだけ……彼女と話をさせていただけませんか？」

突然の提案に、母親は渋々部屋を出ていった。それと同時に、佐

伯は歩を抱きしめる。

「豊……」

「よかった……」

「うん」

互いの温もりを噛みしめるように、二人は離れようとはしなかった。

「歩。今まで、ごめん……」

しばらくして、佐伯がそう言った。歩は佐伯を見つめている。

「謝らないで」

「歩……」

「私も、子供だったの……」

「歩、ずっと捜してたよ……ずっと言いたかった。俺には歩だけだ。愛してる……」

佐伯が言った。もう歩を離したくはない。その言葉に、歩の目からはまた涙が溢れ出す。

「豊、私もだよ……ずっと豊が好きだった。もう、離れたくない！離さないで。ずっとそばにいて」

「ああ、もう離さない。誰にも渡さない」

二人はしっかりと抱き合つと、長いキスをした。

「……夢みたい」

歩の言葉に、佐伯は首を振る。

「夢じゃないよ」

二人はもう一度キスをする、何度も抱き合い、そして見つめ合った。

「やっと会えたんだな……」

「うん。豊にも、ちゃんと優に会わせてあげたかったけど……」

「……辛かったな。でも俺も、一度も会えなかったわけじゃないから。それに、優が描いてくれた俺の絵まであるんだ。残念だけど、もうたくさんもらってるよ……」

「うん」

二人は抱き合ったまま、しばらく何も言えなかった。

「……これからどうする？」

しばらくして、佐伯が尋ねた。歩はすぐに不安な表情に戻ると、佐伯を見つめる。

「離れたくないよ……」

「ああ。でも、ご両親のこともわかってやってくれな……俺と同じで、ずっとおまえのことを思ってたんだから」

「わかってる。でも、ひどいよ。昨日だって……」

「うん……」

佐伯は歩の頭を撫でる。この先どうなるのか、どうしたらいいのか、まだ何も見えない。歩を離したくないといっても、両親の手前すぐに暮らし始めることなど無理だろう。しかし歩に無茶をさせないためにも、ここでしっかりと話し合っておく必要がある。

「すぐ、北海道に戻っちゃうの？」

「そうだな……休みが明けるまでは、こっちにしようか」

「本当？」

「ああ。それまで、ゆっくり決めよう」

「……うん」

二人は、もう一度キスをした。

「そろそろ下に行こう。そろそろ二人きりでられない」

「うん……」

素直に頷くものの、歩は不安を隠し切れない。また両親によって、佐伯と引き離されるのではないかと心配した。

そんな歩の不安を悟って、佐伯はもう一度歩を抱きしめる。

「大丈夫。もうどこへも行かない」

「うん……」

歩は噛みしめるように自信と希望を取り戻し、二人はリビングへ降りていった。

それからしばらくして、佐伯は一人、歩の家を後にした。

その後、冬休みの間中、佐伯は歩の自宅近くのビジネスホテルに泊まっていたが、新学期もあるため、北海道へと戻っていった。しかし、歩は両親の強い希望もあり、しばらくは自宅に居ることになった。

今は少しでも離れていたくはなかったが、歩の両親の気持ちも、二人は痛いほど理解していた。

数カ月後、三月――。

空港で、二人は久々の再会を果たした。

「豊！」

「歩！」

二人は会うなり、しっかりと抱き合う。

「これからは、ずっと一緒だからな」

「うん。もう離れないよ」

佐伯は北海道の高校を辞め、この春から東京の高校へ転勤となっていた。

32、懐かしい顔

東京都内の喫茶店で、一人の女性が紅茶を飲みながら、手紙を読んでいる。テーブルの上に置かれた封筒の差し出し人には、連名で“佐伯豊、佐伯歩”の名前が躍っていた。

女性は懐かしそうな目で、丁寧にもその手紙を読み、やがてそれを封筒にしまった。見えた宛名の部分には、“室岡静香様”という字が見える。手紙を読んでいた女性は、かつて佐伯が赴任先で受け持った生徒の一人、静香であった。

佐伯が北海道に赴任して以来は、年賀状で連絡を取り合っていたくらいだ。しかし静香は、誰よりも佐伯と歩の仲を心配し、世話をかけた生徒だったため、佐伯と歩は、静香に経過報告の手紙を送ったのだった。

“拝啓、静香様。いかがお過ごしでしょうか？ 私たちはこの度、晴れて夫婦となりました”

そんな言葉とともに、手紙には二人の経緯が書かれていた。出会うまでは大変だったようだが、今では幸せそうな二人が目に見えかぶ「よかった。幸せそうで……」

静香が呟く。この数年の間に、静香にもいろいろなことがあった。懐かしそうに過去を振り返りながら、静香は今や憧れとなっている佐伯と歩の姿を思い出し、そばに投げ出してあるノートや教科書をしまつと、身を引き締めたように喫茶店を出ていった。

とあるマンションの一室には、“佐伯”の表札が掲げられている。その中で、夫婦となった佐伯と歩が、休日の午後をくつろいでいた。「豊、ちよつと買い物に行ってくるね」

歩はそう言いながら、すでに出かける支度を整えている。

「買い物？ 俺も行こうか」

玄関に向かう歩に、佐伯が言う。

「いいよ、すぐそこだし。何か買ってくるものある？」

「いや。特にない」

「じゃあ、行ってくるね」

「気をつけてな」

佐伯に見送られ、歩は部屋を出ていった。

二人はまだ結婚式もしておらず、籍を入れただけではあるが、新婚気分を楽しんでいた。何より一緒にいられるだけで、幸せを感じていた。

「夕飯、どうしようかな」

近所のスーパーで、歩は夕飯の献立を考えていた。こんな穏やかな時間が好きである。

「あの……歩さん？」

そこで突然、歩は声をかけられた。まだ近所に知り合いはいないので、驚いて振り返ると、そこには見覚えのある女性がいる。うる覚えではあったものの、すぐに思い出したその女性は、かつて佐伯が赴任した町で世話になった、静香である。

静香はまだ学生のようにであり、また少し大人びた表情を見せ、歩に笑いかけている。

「静香さん！」

「やっぱり、歩さん！ お久しぶりです。先日、お手紙届きました。ありがとうございます。ご結婚なさったそうで、おめでとうございます」

静香の言葉に、歩は笑って首を振る。数えるほどしか会ったことがないのに、二人は昔からの友人と再会したように、その場で飛び上がって喜ぶ。

「いえ、そんな。ありがとうございます……あの、今日、彼はお休みなんです。家にいるので、もしよかったら家に来ませんか？」

突然の歩の誘いに、静香は笑って首を振る。

「いえ。休日にお邪魔しちゃ悪いです。また今度にします」

「そんなこと言わないでください。お時間がなければ無茶は言いま

せんが、きつと彼も会いたがります。どうぞ来てください」

「でも、いいんですか？」

「もちろんです。本当にごめんなさい。ちゃんとお礼が出来なくて……静香さんが、彼と一緒に私を捜してくれたこと、後で知りました。ずっとお礼が言いたかったんです」

「そんなこと……」

偶然の再会と、純粋な歩の言葉に、静香は過去を思い出した。

若さだけが先走りし、歩を捜す名目で佐伯に近づいた時もあった。けれど今では、二人の存在は静香にとって憧れそのものであり、人生の転機を与えてくれた恩人とも思っている。

「これから、ご予約あるんですか？」

謙遜している静香に、歩が尋ねる。

「いえ。特にはないですけど……」

「じゃあ、ぜひ来てください。よければ夕飯も一緒にどうですか？
今から買い物するんで、ちょっと待ってくださいね」

歩は早々に買い物物を済ませると、静香を半ば強引に連れて、マンションへと帰っていった。

「ただいま！ お客さんだよ」

歩は帰るなり、部屋の奥へとそう叫ぶ。

「おかえり……誰？」

いつもと違う様子の歩に、奥から佐伯が出てきた。そして静香を見た瞬間、驚きに口を開ける。

「静香か！」

「あの……お久しぶりです」

少し照れて、静香が言う。佐伯は笑顔で頷く。

「ああ、本当に久しぶりだな。どうしたんだよ」

「豊、こんなところじゃ駄目だよ」

歩がそう言って遮ったので、佐伯は苦笑して頷く。

「ああ、悪い。中へどうぞ」

佐伯も快く、静香を招き入れた。静香は恐縮しながらも、奥へと進んでいく。新婚夫婦の部屋だけあり、まだこざっぱりとしている。「嫌だ、部屋がぐちゃぐちゃじゃない」

奥の寝室へ行った歩が、リビングに出てきてそう言った。

「ああ、悪い。久々に片付けでもしようと思ったら、散らかっちゃって……」

「もう、これだもん。ごめんなさい、静香さん。ここは綺麗なんでどうぞ座ってください。今、お茶入れますね」

「おかまいなく……」

歩の言葉にそう言って、静香は勧められたソファへと座る。横の椅子に、佐伯が座った。

「この間、手紙出したところなんだ。届いたかな？」

懐かしそうに微笑む佐伯に、つられて静香も微笑む。

「はい、ありがとうございます。この間、実家で受け取って、カバンに入れっぱなしで……さっきも読み返してたところなんですよ。お返事出そうと思ってたんですけど、こうしてお会い出来て良かったです」

「バタバタしてて、なかなか出せなくてごめん。そうか、実家を出たんだな」

「はい。大学に通っているんで、今は一人暮らしなんです。ゆくゆくは、教師になろうかと……」

「本当か。大変だぞ、教師なんて」

笑いながらも、佐伯は嬉しそうだ。静香も吹き出すように笑った。「わかってます。でも私、先生に出会ってなにかが変わった気がするんです。地元の町も自分も嫌いだったのに、先生がいろいろ教えてくれた気がして。私もそんな先生になって、地元を盛り上げたいって思ってるんです」

それを聞いて、佐伯は照れ笑いをする。

「なに言ってたんだ。教えるどころか、おまえには教師じゃない部分しか見せてなかった気がするよ。でもおまえの人生の転換期に、少

なからずの貢献が出来たならよかった。教師として、これほど嬉しい褒め言葉はないよ」

「いえ、そんな……」

その時、歩がお茶を持ってやってきた。

「お茶、どうぞ。何にもないところですけど、ゆっくりしててください。私、ちよつと買い物行てきます。いろいろ買い忘れちゃたから」

歩はそう言うのと、部屋を出ていった。

「私、悪いことしたんじゃない……」

二人だけで盛り上がった話をしていたので、静香が心配そうに言ったが、佐伯は気に留める様子もなく微笑んでいる。

「いや。あれで気を利かせてるつもりだと思うから、気にしないでいいよ」

「そうですか？」

「ああ。それより、ゆっくり出来るのか？ 夕飯食べていけよ」

「ありがとうございます。今日は休みなんで、買い物に出たんです。でも、あんなところで歩さんと会うなんて、すごく嬉しい偶然！」

「そうか。これからも、近くに來たら遠慮なく寄つてくれよ」

「ありがとうございます」

二人は懐かしそうに笑い合う。それは出会った頃と変わらないように、何の違和感もなかった。

「地元のやつはどうしてる？ 会ってるか？」

話題が尽きずに、佐伯は尋ねる。

「高校卒業してからはほとんど会わないけど、地元に戻る時は、真子にはよく会ってます。あ、先日、真子と広太が結婚したんですよ！」

「本当か？ へえ、あいつらが……」

ローカルな話題に、静香の言葉が弾む。

「そう、幼馴染み同士で」

「そうか。みんな着実に大人になってるんだな」

「遅くなりましたが、先生もご結婚おめでとうございます」

「ああ、ありがとう」

そう言って笑いながら、お茶を飲んでいる佐伯を見て、静香はこの数年間の出来事を想像した。手紙には書ききれないことがたくさんあるはずだが、少なくとも今の生活は幸せに見える。それがなんと、羨ましかった。

「……先生には、いろんなことを教えてもらった気がする。私、辛い時は、先生と歩さんのことを思い出したりするんだ。そうすると、勇気が湧いてくるの」

「なんだそりゃ」

思わぬ静香の言葉に、佐伯は苦笑する。

「だって私にはまだ、先生たちみたいに、全力で恋をしたこともないから……本当に大変だったと思うけど、今が幸せならそれでいいと思う。それに、そういう経験をした人が教師っていうこと、生徒にとっても勉強になると思う。少なくとも、私は先生に会えてよかったよ」

佐伯はゆつくりと口を開く。

「……俺は教師失格なのに、今でも教師を続けてる。俺みたいな教師で、生徒にはいつも申し訳ないと思ってるけど、俺はこの仕事の本気で楽しいし、おまえみたいにどんどん成長していくやつを見るのが嬉しいよ」

「駄目だよ、先生。私はこれから教師を目指すんだから、ずっと上にいてもらわないと。もっと自信持ちなよ。もう、歩さんは生徒じゃないんだから。それに先生の授業は楽しかったし、先生には本当に、大切なことを教えてもらったって気がするんだ」

「……ありがとうな、静香」

照れ臭そうに佐伯が微笑んだ時、歩が帰ってきた。

「ただいま」

「ああ、お帰り」

「今、夕飯作るね。いろいろ買って来ちゃった。パスタでいいかな？」

「私、手伝います」

歩の言葉に、静香が立ち上がる。

「いいの、いいの。静香さんはお客様なんだから。積もる話もあるでしょうし、どうぞくつろいでいてください」

歩はそう言いながら、キッチンへと向かった。少し困った様子の静香に、佐伯は笑う。

「くつろいでろってさ。何もなくていいよ。“奥さん”やりたいんだから」

「豊。なんか言った？」

佐伯の言葉に、キッチンから歩が口を挟む。

「いいや、何も」

わざとらしく、佐伯が答えた。幸せそうな二人のやり取りに、静香も優しく微笑む。

三人は一緒に夕食を食べると、夜遅くまで話をしていた。

33、私の永遠の教師

数時間後、静香はまた来ると言い残して帰っていった。懐かしい人との久々の再会に、一同は懐かしい気持ちに浸っていた。

「お疲れさま。いろいろありがとうな」

静香が去った後、片付けをしながら佐伯が言った。

「ううん。私も静香さんには会いたかったの。直接お礼が言えてなかったから……ちゃんと話、出来た？」

歩は洗い物をしながら、そう答える。

「うん。まあ他愛もない話だけだな」

「なんだ。せつかくの再会なのに」

歩の言葉に、佐伯は無言で微笑む。洗い物を終えてソファに座った歩は、含み笑顔の佐伯の顔を覗きこんだ。

「なに？」

「いや……前のおまえなら、“静香さんと二人きりなんて怪しい”とか、“女の人と二人きりなんて駄目”とか言ってると思って」

からかうように笑う佐伯に、歩は口を尖らせる。

「嫌だ。前のおまえって、いつのことよ。そりゃああの頃は、私だって子供だったって思ってるよ。それに、本当は今でも、女の人と二人きりなんて嫌だけど……」

そう言う歩を、佐伯がそっと抱きしめた。

「豊？」

「ありがとうな……」

「……ううん」

二人は静かにキスをする。しかし途端に、歩が我に返って立ち上がった。

「さあ、早く片付けちゃおう。たまに人が来ると、いろいろ出して散らかしちゃうんだよね。私がない間に、豊は寝室まで散らかしちゃったみたいだし」

「ハイハイ……悪かったよ」

ムードを壊され、佐伯は苦笑してゴミ袋を広げる。

「豊、こっちはやるから、郵便受け見てきて。今日は一度も覗いてないんだった」

「今日は休日だから、郵便は来ないだろう」

「チラシとかで一杯になっちゃうのよ」

「わかったよ」

歩に促され、佐伯は部屋を出ていき、マンション玄関口のポストへと足を運んだ。休日というのに、大量のチラシが詰めこまれている。

佐伯が部屋に戻ると、歩は片付いたテーブルを拭いていた。

「ただいま。結構入ってたよ」

「そうでしょ。最近、多いんだ。不動産とか地域紙とか……あ、待って」

佐伯が捨てようとしたチラシを、歩が受け取った。チラシの束の中には、一通の封筒が入っている。

「封筒が入ってたのか」

「手紙の宅配便みたい」

差出人の名はないが、宛先は二人である。そんな封筒を、佐伯が開けた。

「……尾形からだ」

「え、嘘！」

歩が嬉しそうに、手紙を覗きこむ。結婚してからは、尾形とはほとんど連絡も取っていない。

“ 佐伯、歩へ。

元気ですか？ 手紙は苦手なので、全然連絡せんとすんません。

俺はまだ山伏さんのところで働いています。最近、隣町にチェーン店を開いたので、俺はそこで店長を任されました。北海道に来たら、必ず寄ってください。

最後に、引越で片付けをしていたら、いろいろ写真が出てきたので送ってきます。では、また会う日まで、元気で。尾形”

手紙にはそう書かれていた。封筒には、一センチくらいの厚みの写真が入っている。そこには尾形が撮った、歩と息子の優の写真があった。

「優……」

思わぬ写真に、歩の目から涙が溢れ出る。そんな歩の肩を抱き、佐伯は写真を見つめた。

「……優の分まで、幸せになろうな」

「うん……悲しいから泣いてるんじゃないよ。ただ、懐かしくて……」

「わかってるよ。いいさ、たまには……」

歩の髪を撫でながら、佐伯が言う。写真には、生まれたばかりの優の写真もあった。

「これ、本当に生まれたばかりの写真だよ。尾形さんが、いつも力メラを持ち歩いていてくれて、撮ってくれたの……」

歩はそう言いながら、一枚一枚、写真を説明する。

「そうか……」

佐伯もいろいろなことを考えていた。優のことを考えると、自分の不甲斐なさが身に沁みる。しかし、優のことは忘れることなく、優の分も幸せになると決意していた。

「尾形に礼の手紙出さなきゃな。こっちも全然、連絡をしてないから」

「うん、店長の山伏さんたちにも」

「そうだな……今年は久々に、北海道へ行くか」

「うん」

二人はしっかりと抱き合った。歩の目からは、涙が止まらない。それでも歩は口を開いた。

「豊……私がいなくなってから、豊には苦勞かけたと思う。でも私、

後悔はしてないんだ。だって、こうして尾形さんや山伏さんたちにも会えたし、優も居てくれて、強くなれた……だから、豊と離れて辛かったけど、悲しみだけじゃないの……」

「ああ。わかってるよ」

歩は佐伯から離れると、涙を拭いて、真っ直ぐに見つめる。

「私はもう豊の生徒じゃないけれど、私の中では、豊はいつまでも教師だと思うんだ。だって、私がこんなに優しい気持ちでいられるのは、みんな豊のおかげなの。今でもいろんなことを教えてもらってるから」

「駄目だよ。それじゃあ俺、一生犯罪者じゃん」

その言葉に、二人は笑い合った。そして佐伯も真剣な顔に戻ると、歩にキスをする。

「俺も歩にはいろいろ教えてもらってるよ。俺が安心して生きていられるのは、歩が居てくれると思ってるからだ。今まで俺は、教師としては失格だったかもしれないけど、静香が言ってくれた……俺と出会って変わったと。そういう生徒が居てくれるだけで、俺、教師になってよかったと思ってる。辛かったけど、おまえにも会えた。これからも、俺についてきてほしい」

佐伯から歩への、改めてのプロポーズだった。佐伯はそう言いながら、小さな箱を歩に差し出す。

「え……？」

歩は感動とともに、驚いて佐伯を見つめる。

「開けてごらん」

促されて、歩は小箱を開けた。すると中には指輪が入っている。

リングの内側には、“TO AYUMI”の文字が刻まれていた。「ど、どうしたの？ 名前まで……」

「うん……実は大分前に買ったものなんだ。いつかおまえと約束しただろう？ 次の誕生日には、指輪がほしいって。結局あの時、渡せずじまいで、最近も結婚だなんだで、なかなか渡す機会がなくてさ。ずっと棚の中で眠ってたんだけど、さっき見つけたんだ」

少し照れながら佐伯が言う。歩は感無量といった様子で、また泣き出しそうだ。

「……覚えててくれたの？」

「随分前だけど、買ってたよ。別れても、いつか渡せる時がくればいいと願ってた……今日はなんでもない日ではあるけど、いろいろ思い出すことがあったからな。またひとつの記念日だ」

佐伯はそう言うのと、指輪を歩の指にはめた。歩の目からは、またも涙が溢れ出す。

「また泣く……泣き虫に戻っちゃったな」

「だ、だって豊が……」

歩は泣きながら、佐伯の胸に顔を埋めた。

「ありがとう、豊……私、豊があ頃、こんな物を買っていてくれてたなんて思わなくて……」

「泣くなよ。まあ、今日からまた新たによろしくってことで……」

佐伯は、歩をしっかりと抱きしめた。歩も抱き返す。互いの温もりが伝う。

「こちらこそ……ごめんね。私、何もあげられるものがない……」

「歩が居てくれれば、それでいいよ」

二人は、吸い寄せられるようにキスをした。甘く長いキスだった。すべての隙間を埋めるかのように、暖かな空気が二人を包む。

「もう離れないから……」

もう一度抱きついて、歩が言った。

「うん……離さない」

佐伯も答えた。二人は抱き合ったまま、離れようとはしなかった。

二人はこれから、新たな人生を歩む。もう離れることはないとお互いの心に決めて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2398e/>

教師

2010年10月8日12時57分発行